

特 8

944

一九五〇年

毛澤東 在韶山



道中膝栗毛序

箱根八里の長持唄には猛き宰領の心を和らけ竹に雀の馬士うたには鬼殺
 しを爛せしむはその歌の徳利酒呑や謠ひの旅衣都をさじて行がけの駄賃
 帳を綴る筆の建場に雲駕の息杖をしてゑいやらやつと書編りたる東海
 道五千百次の記行に無滑稽と方言の二割増重荷に僻言夷曲歌それが中に
 唯一夜の飯盛ふしかけて商あふ戀の箱まくら其のあらましを宿帳
 の帖とせしたるは空尻の殻無體あるほんのはるしの問屋場もどきへい頼
 みますたのみますとこの本の鹿島立に序することしかり

十返舎一九識



模
廣重翁之圖



東海道
之首驛
品川の
眞景



増補道中膝栗毛

十返舎一九著



武藏野の尾花が... かのる白雲と詠は。むかじく浦の苦屋。しきたつ澤の夕暮に愛で。仲の町の夕景色。しらの時となりし。今は井の内に船を汲む。水道の水。長なへにして土藏造の白壁。倒れ物の補明。俵破れ傘の置所まで。地主唯は通さぬ大江戸の繁昌。他國の目より。は。大道に金銀も時ど。あるやうにむはれ。何でも一稼ぎと心して出かけ来るもの。幾千萬の。生國は駿州府中。枋面屋。彌次郎兵衛といふもの。親の代より相應の商人に。着替水多羅。四郎が抱の鼻之助をいへるに打込。この道に孝行ものとして。黄金の釜を掘出せし心地。して悦び感氣の。ありたけを盡し果は身代まで途方もなき穴を掘り明て留度なく。尻の仕舞は若衆とふたり。尻に帆かけて。府中の町を欠落するとして。

借金に富士の山は。あるゆゑに。そこで夜逃げを駿河ものかな。斯足久保の茶なることを吐ちらし。頼て江戸にきたり。神田の八丁堀に。新道の小借家住居し。す。この時へあるに任せ。江戸前の魚の美味に。豊島屋の鯛。明梅はいくつとなく。長家の手水桶に配り。終に有金を呑なくし。是ではすまぬと。鼻之助に元服させ。喜多八と名乗せ。相應の商人。

かたへ奉公に遣りしが元はさいはじけものにて主人の氣にいらぬ小銭の立まはる身分となり彌次郎は又國元にて習ひ覺たりしあふら給なをを。かきて其日ぐらしに春米の當座買。たしき納豆。あさりののむさみ居ながら呼込で喰てしまへば。びた錢一文も残らぬ身代。田舎より着つけの。布子の袖。縮が出て洗濯の氣をつける者もなく。これは餘りなるぐらしと。近所の削り友達打寄て。さるお屋敷におする奉公勤し女年かさなるを嫌して。彌次郎兵衛に。あてがへば。破鍋に蓋が出来てより。狼の口あいたやうなふくちびも。ふとぎてやり。諸事手健に人仕事などして。彌次郎を大事にかくる様子。此女房の奇特なる。心ざしに。彌次郎夜もはやく寝て。随分機嫌を。とりくらしけるが。うかくとして。はや十年ばかりの星霜を經りけれども。藜藜に成らず相替らぬ貧乏。されども屈託せぬ氣性にて。殺酒落にしやれちらし。近邊の。なまけもの其の遊び所ろに成りて。五合徳利の寝姿流しをもとに絶えず。そこへ三味線の音。不斷味喰桶の蓋をあくる間とはなかりける。あるじ彌次郎兵衛は。るすをみね女房おふつ。ながしをもとにすすのしかけてゐると。うらだなの女ばうおちよま。ほそおびまへだれにて。たなごぢりあふつて。うらぐちよりおののき。あちよま「モシおかみさんへ。御無心ながら。醬油が。すこしあつた。さうぞかして。おくんなせへ。ホンニゆふへは。大分。お賑やかで。ござりやした。わつちらが所の生酔ひどのを伊勢じやれ。ただけへりやせんわな。此間の晩夜更けて。路次の戸をわれるやうに。たいたとつて大屋さんの。おかみさんが。どの口で。こへそうに小言をいひなすつたが。わつちら

が所の野呂馬殿も。のろまなりやアあのみたかおみさんも。あんまりじやアござりやせんかへ。ナント店賃の一年や二ねん溜つたとして。一生やらすに。おきやアしめへし。それをやかましくいふくらへなら。溝板の腐つた所も。さふぞするが。いじやアねへかへ。そして犬の糞も。てんでんの内の前ばかり浚つて長家のものはなんだと思つて居るやら。ノウおくんさん「トむかふのうちの驛乗へ水をむけるとあがり口にかたあておろして子供にちくをのませてゐる女房やがてありて出かけ「おくん「モシエあんまり大な聲をして。そんなをいひなざるナ。奥のおけんつうが今手水にいつたよ。アノおじやべりも又大屋さんのおかみさんへいつを退従ふばかりいつて長家の事をどうめへつたかうめつたを。い「苦勞性じやアねへかへ。それに聞なせへ。此間からあそこの内へ来て居た居候はアノかみさんの妹女だといふてつたが。ナニあれがお屋敷に奉公してゐたもすまじい。ちよつと見てもしれてありやす。ありやアおへねへ。ばんくるわせものだよ一昨日もどこか下谷のおやしきへ。目見に行つてつくりたつて出ていつたが。ナニよその隠居様へ。妾にいくので支度金が七兩来たよ。い「おじやアねへかへあ。顔で妾も氣が強い。わつちらもこの額のはげつてうがなくて。耳の隣の痰腫がもうちよつと。さういふと妾にでも出て。支度金をさるがものを。ハ、ハ、ハ、おかみさん。彌次さんはまだかへ。チャ〜〜時をいへば影がさすぞ。ソレ且那が歸りだ「トふたりおのがうちへひつこもを彌次郎立ちかへりて「彌次郎「エ、この畜生めは願にかけておらがとこの口は寝ておら。おふじ茶は沸ておらかふじ」

二十膝

チャおまへ滯計で。おまんまはまだかへ彌次郎「これである事さ居飯屋へはよつたが。居飯屋へは奇なんだ おふじ」そして喜多八さんの處から。なんで度々呼びにくるのだへ 彌次「かれに金をかしてくれろとつて おふじ」マヤ馬鹿らしらとうしたのだへ 彌次郎「あつめが假宅へでもはまつたそで親方の金をちつと計りつかいこんだといふことだ。其屍がわれると。しくじるはあたりまへだが。こいでしくじつては理屈のわるい事があるといふ。何だをきいたら。あそこ番頭めが。此間痴氣が天窓へさしてこんで。それなりに天窓が。じやつさりとなつて死だといふをだ。それに親方は年寄の癖に美しい若いかみさまをもつて。腎臓してもう。今日かあすかといふくらぬ。これも今にめでたくなるは必定。そうすると喜多八めが其後家を請け合て。手に入る仕様があらうつたがなるはをさふいけば。あつめは。あかまをこすはなしたが。そこではおいらもわりい事は無し。おふぞこへ。しくじらねへやうにしてへものだが仕方がねへハナ時に飯にじやう。何ぞ菜はねへか おふじ」おふじのちみみ幾計は 彌次「ナニ投身が喰るものか。しかしてらつとも。さらすとあれね。さつけへなした」この内日もくれたるにあんどうをもし。彌次郎ちやづけをくひかする時年のころ五十あまりの待。たびじやうぞくにて侍「イヤ卒爾ながら。駿河の府中からおつた彌次郎兵衛殿は。爰元でおるかヤマ おふじ」ハイ。こちらで。ごめりですが。おつちからお出なさいました侍「イヤ。ハイ氣遣ひな者ではおまんないヤマ」ト三十ぢかき女をつれて。はいり。こじをかへるをみて。彌次郎ちもをつぶし「彌次「コレハ兵衛太

三十膝

左衛門さま。妹御を連れて。何んとして御出府で。ごめります兵衛「あんとしてたア曲がない。このいんもふとめを貴様の所へ。嫁入りにつれてきたのでおる。ヤマ斯ばかり申ては合點が參るまい貴様國元にて。これなる身もが。いんもふとのお婿と。密通をせられたといふこと。あでにて聞て腹立は。いたしたれもたんだひとりの。いんもふとがととうしたはんでがな。貴様でなくては添ぬと申すゆゑ。不便におもつて堪忍のねを撫て。すいた男に添せずとおもひごはめ。おざく召しつれてまわつて。あなを。ヤマこのうへからは随分といんもふとめを不便がつてやつてください。まづはして冷酒でなりと。蓋をさせずに。ヤマ「はやく」おふじ「ヤマ」おまへさんは。おなたかは知らねへが。おこの國からめつそうな。體へ男といふ者は女にまつて。二世の三世の。奥宮らしく。いひかけて欺してみるのは。女をおとす。おさだまりの口上。それを。まんまことにして駿河からわづ「其男に添はをふとつて。つれておこしなざるといふは。馬鹿氣をいつて。ぬるじヤマごめりませんか。又「も。妹御。満足な男でもあるとかわたしはしかたなしに添ては。ぬますれを色黒くして目が三かくで口が大きくて響だらけで。胸先から腹中に。響がべつたりで。足は年中勝券で。ごら「して。イヤまた寝た時寝息が嗅い男彌次「ヤマ」こいつめが。亭主を離利背灰にじやアがる おふじ「オホ。ハ。ハ。それでも男と云ものは。すたねへ者で。女をせへいやア眼一でも鼻欠でもだいは道なぬ氣性。さだめし念頃知れた人も。選道にはありましたらうがまんまり好もしい。男でもごめりませんから。おま

四十膝

へさんがたの。やうに。跡を追て来た人は。ひとりもありません。此の狭い内に。女房がふたり三
人あつたら。大屋から根太がたまたねへ。店を明ると退出されるでござりませう人の知らねへ
うらに。はやくつれてお。りなされませ 兵太「エレハ最前からつべら。こへらと此女中よくし
やべるが其方先なに者だい おふつ「アイわたくしかへ。彌次郎兵衛の女房でござります 兵太「
アニ女房だい。見たくでもないヤア。これ彌次郎兵衛。お身女房をもつたか。エレ「是非に及ば
ない。繩にかゝれ。國元へひいていかずは「トくわいちうよりはやなわを取出し立掛れば彌次郎
はやつさとして「彌次「ナニ繩を。かゝられたアさういふ理屈。わつちが女房を。もちやア。繩
かゝらにやア。なりやせんかへ。とほうもねへモシ終切りを二本さしなつたとして其が恐ろし
い。ものでもござやせんわな 兵太「イヤお身が。ぬにかさ高にをでやるな。コリヤよくさけ。今度
いんもふとを。めしつれたわ。家老中の指圖に依て罷り越たぞ其譯。といふは相役の横須賀利金
太かたより此いんもふとを。婦妻に貸ひたきよし 媒を以て申こした。身にとつては過分の押ゆ
へ。早速に同心して結納まで受をさめる所に。いんもとは一筋に。こなたと夫婦の契約をした上
はたどへ親兄弟の差圖でも。ほかへ縁につかすこたア。いやたといふみども。魂消まいものか。ア
せず事がないと。それから其利金太かたへ使ひをつかわし彌次郎兵衛と申すものを。妹めが密
通を致せし事。神もつて存せず。それゆゑ。結納も受納致せし所に。いんもふとめは密通の男
ならでは。添ないと申す然れば妹が首をさつてこなたへ持参仕らふ。それば御一分を立られ。

五十膝

御了簡願み入と申遣せしに先方も諸親類は心め傍輩どもへ。兼てこなた妹御を妻に申受る苦と
吹聴せし上は。世間体へ對し申譯の無い仕合。女の首一つ受たとして。何の役にも。たゞ此止
は其元と相果すより。外分別なし。明晩安倍川原に於て勝負を決せずとの返事。元來身共も覺
悟の前。いかにもと挨拶せし所に。家老中より双方を召れ。年來御主人の珍知行を頂戴いた
し居ながら。私しの宿意をもつて。討果さんとは殿へ對して第一不忠妹が兄にかくして。夫を持
しを知らずして。利金太に契約せしを。不屈とはいひ難し。いまた姉禮もせないうちのを。互に一
分のすたるとはない管自今以後兩人遺恨を棄て御奉公を大切に勤められよ。さた妹おた子こと
は。假初にいひ約束せし男の外。他へ縁さ。つくまじとは寔に貞節の至りと殿にも不便と思召さ
れ下坂より馴染たる男に添せよとの御意。有難御受申て。それよりこれまで罷越たる所さきの男
今女房を持居故。すゞ〜と妹をめしつれ歸りましたとアニハ兵太左衛門ともいはる侍が
生顔さげてかへられずかヤアサア妹めを妻に致せば其通いやだといへ。是非とも繩をかけて
國元へひきつれ。家老中へ此段を披露し。一旦約せし利金太方へ。已を渡さねば。兵太左衛門
武士がたないサアせずとがないと諦めて繩をかゝれ但しは踏附けてとしめらすかヤア彌
ハア成程。うらおつしやれば。聞はましたか。しかしうれば。おめへさまの方の得手勝手。た
とひ此身は一枚におろされ切割まれて捕辛にせらるゝとも。我を大切に。艱難辛抱する此
女房を捨て。妹御を女房にもたれるものか。しかたがねへ。さうとも御勝手になせへまじ「ト

膝六十

かくこして兩手をうしろへまはせば。兵太左衛門立ち入り。すでに彌次郎をいましめんとするを。女ばうおふつすがり付て。おふつ「モ」段々の様子を承たまはりますれば御尤な事法ながら現在夫が細めにかり永の道中に耻をさらし。お國でもしも命に拘ることをやなせあつては。わたしの悲しむ。モ今おまへの。いひなされるには。たごへ此身はさうなつても。親離手抱した女房は。すてられぬ。といひなごつたが私には千倍もふなんにもいひませぬ。わたしには。隙を下さりませ。あの妹御は。駿河からの馴染とあれは。私よりは先の事。添ふとおつしやるも無理ではない。サア期わけて。いふうへに腹をもくれず。お侍さまの手にかゝる了簡なら。まづ私から先へ死にます。トなく。ながしもののはうてうをこつて。ひねくり廻すをさへて彌次コリヤ。何を。馬鹿ものめがおふつ「イエ」それでも彌次「ハテさてそれほかに。思ひつめたことならしかたがねへ。さつこの間暇をこつて。親分の所へでもいつて。めてくれ。大事の女房を今去ふなご。は。夢にもおもはねへ。はかねへ別れをするも。みんな己が。わりいからだ。トさすめす。いりばこりいだし。三くだり半を。かきてやれば。びんぼう人のきさんじ。さの身さた儘くじばこに。ぶろじまづみひと。ひつかへて。なみたながら。じはくとして出てゆくと。兵太左衛門。大小をとりてほうりいだし「ヤレ」重荷を。おろした。ナント彌次さん。わじが仕打は妙でありませう。彌次「駿河もの」詞恐れ入た。田舎侍の出立。いかな後家の質屋へ見せ

七十七

ても百石せりとは直打する男を。棒手振の芋七にして。かくは惜いもの。それにこのまた。矢場のお鶴が田舎娘の身振。妙であつた。昔おれが自作の狂言で。兩人を頼んで女房に一ばい。くわせ。退出したも。あの隠居ものには飽果たからの事。ひとつは急に拾五兩と云ふ。金が無ればならぬ。こと。芋七「さういふこと」咄したら。ささまの云には。ソリヤアはいはぬの事がある。去る所の隠居が内の腰本に手をかけ。孕したゆへ聲や娘の手前へしれぬさきにとて。表向いとまを出して。主人の所へ内証で。預けておかれたが。さふを腹の子ぐるめに。金拾五兩つけて。かたづけたいと。わしが頼まれて居るから。調度よいが。しかし女房の在上一は。さふも。咄してついで。それもその拾五兩はしい最中たへ腹には鬼の子が。やごつて。居ようが。金へもつてれば。年増女房に飽た所。こいつは妙だと此狂言を聞いて。貴様たちふたりを頼んで。さんまを土首尾にやりはやつたが。彼時参金のしろものは。いよ。念に来る筈か。さうだ。芋七「イヤ。さういふ。はづとも」。おめへも金がさうといふ。先でも。腹がさうだから。一刻も早いが宜い。せきこんでぬられるから。そこで今夜更てから。そつと親でこへ向て来る。はづにしておひた。ちよつぱり淫でも出さばやアなるめへが内にこつたのがありやすか彌「ヤア」今夜来るのか。ま。それは又早急な。それとついたら。今日髪刀代でもしておてらう。い。ドレちよつと。盛ばかりでも刺て来やう。芋七「ア。コレ」。今頃さうに髪結床があるものだ。そんなことよりか。酒の支度でもするが宜コレサ。おめへ何をまどくする。彌次郎「イヤ何も

第八十

しねへ。がちよつと爪でも取ておこら。芋七「ナニ呼もねへ。そんなことは。しねへでもらへてや
 アねへか彌次「イヤそれでも十本みんなとらすとも。せめて二本の爪斗りは芋七「ハハハハハ
 さやアがれ。大わらひだ」ト此内にはかほそらどり片付るやら。火鉢にけし炭を。おこしかけ。
 ねづみいらすから五合徳利を取出し。さつさつとけしらふてはおかしいと。三人はなつさあは
 せ。のみかけてある折から。表口にいさづの音カッチ「芋七「チャもふ来たそうな」トか
 の戸をそととあけてとんでいで「チャットこた」ト。銀の衆御太儀「コレ一ぱら。香でござ
 れ」トあり合のはした錢を造て銀のものをさつそく運かへし。のつて来た女の手をとつてもな
 ひはいら「芋七「サア娶御のお出だ。お酒盃」ト彌次「コレハ。いからおせば芋七「サアお壺さん。
 をけへ。座りなせへ。そこであめへが。一ッ呑で御亭主へさしなせへお酌お酌」トコリヤア四海
 浪御かたも。云てへが謡ひは知らず。明日来て潮来でも。やらかしませう。ト此内だん「さか
 つも。済み夜もふけたるに。お酌」いも七さんわつちらアも。おひらき。いたしやせう芋七「
 シレ」ト此狭い内になが居はあそれだ。コレお壺さん。今夜は。ゆるりと休みなせへ。またあ
 たお目に懸らう」トいとまごひしわたともうとも立ち出づれば彌次郎おくる。ふりして。表に立
 ち出で「彌次「コレ芋七。持参金の。さたがながどうする芋七」そこは。ぬからねへ。今の
 彌次「出でさ。そこをさいたら明日の。晝時分隠居のほうから。くる管に間違がひは。なご
 ぶことだ。ソリヤア請合ひさづけへなごし。今夜はしつかり樂みしなせへ」ト彌次郎がせなかを。

九十

ひとつくらわせて出て行く。彌次郎かきぐちをしめて「彌「コリヤア寒くなつた時に煮漬でも喰
 ねへか お壺「イ、ユよろしうござります 彌次「そんならふ寐ようか お壺「おとをとりませ
 う。彌次「チャ」トおれが出して。やらう」ト戸棚より。やぶれぶとんに。かいまさなぞ取り出す
 ところに。おもての戸を。ドン「」ト彌次「エ、今頃誰だ」ト「い」ト。扱は今お
 ひだした。女房。このことをかきつけてや。なりこんで来たるならんか。但しはおやぶん。いさく
 さをいひに来たるか。なにはもせよ。見つけられてはめんどう也と。今の女ぼうにおかひてこい
 ねにて「彌次「コレ」トひよんなことがある。此長屋の作法で。長屋の者が娶を取と長屋中の。も
 のが来て具娶の尻をさすつて見るが定法。今そなたの来たことをさうして知つてやら。それで
 さすりにさあつたに違ひは無い。そなたは懐妊のよし。おなじくは。まだ今宵は来ませぬと云つ
 て見せ度ねへがどうであらう お壺「チャ」トわたしはいやだのふ。殊にたのい身では無い。しら
 ないお人に。此おめを撫でさせる事はいやだね 彌次「そんならさぞぞ」トかくしてへものだが。
 此通り二階はなし。チャットあるぞ」ト窮屈ながら。ちその間は此所へ」ト賣残しのあき半燈
 さいわい。ふたをあけて。彼お壺をいれもとの如くふたしてあき。やかて表のかけがねをはつし
 戸をあければ。あんにさうめして北八せさこめは「彌次「ヤア喜多八かエ、今時分にどうして
 来た北八「イヤもう」ト内は落着てぬられやせぬ此間からおまへに頼んだ拾五圓の金の事。翌
 日は店御しにかゝる故。是非」トあすの朝まで。わつちが遣ひ込んだ穴を埋ておかねばなりや

せぬ。それが出来ぬ。と。愈々百日の説法尻ひとつ。おめへのいふには。胎分心帯たりがあるから。胎分心帯してやろ。と。いひなすつたによつて。じつと待て居たが。今以て沙汰が無から。あんなに氣づけへさに。胎分心帯から。その服を脱ぎやした。が。いよゝその金は。出来やせうか。ね。彌次。しれた事よ。あしたの晝迄には。さつと出かしてやる。そこへ。い。つちや男だ。なんぼこんなに。しみたれな。お。じ。居ても。お。ア。い。へ。拾兩や拾五兩の目くら。が。ね。工面せう。といつたが。せうが。にやア。ちげへは。ね。へ。から。落ちて居。さ。つ。し。北八。を。いつは。有難。其。か。は。り。百。倍。に。して。此。恩。を。返。し。や。す。此。あ。ひ。だ。か。ら。い。ふ。を。を。り。普。頭。は。な。く。な。る。親。方。も。今。に。目。出。度。な。り。や。す。か。ら。跡。で。後。宗。御。を。手。に。い。れ。さ。へ。す。り。や。ア。す。ぐ。に。わ。つ。ち。が。且。那。様。さ。う。か。芝。居。の。敵。役。が。い。ふ。よ。ふ。な。こ。つ。た。が。こ。れ。ば。つ。か。り。は。違。な。し。極。々。内。々。の。と。こ。ろ。は。も。出。来。か。つ。て。居。や。す。か。ら。今。が。大。事。の。所。こ。で。拾五兩の金がねへ。と。しく。ぢ。つ。て。此。も。と。ら。ず。離。も。と。ら。ず。だ。か。ら。何。卒。お。頼。み。や。し。や。す。彌次。お。れ。も。手。め。へ。を。思。は。身。を。お。も。ふ。だ。か。ら。其。咄。し。の。と。を。り。に。い。さ。さ。へ。す。と。互。の。爲。だ。あ。す。の。晝。時。分。には。耳。を。捕。へ。て。十五兩。と。つ。と。問。に。あ。は。せ。て。遣。さ。し。この。咄。の。うち。半。櫃。の。ふ。た。を。お。し。あ。け。て。於。盡。し。モ。ミ。と。い。う。ぞ。じ。つ。と。さ。り。ま。せ。腹。が。痛。く。て。さ。う。や。ら。産。を。う。に。な。り。ま。した。ア。苦。し。か。く。く。く。く。無。症。に。う。め。さ。出。せ。彌次。郎。大。さ。に。う。ろ。た。へ。彌次。エ。そ。い。つ。は。因。つ。た。も。の。だ。コ。レ。北八。て。め。へ。子。を。産。女。の。手。傳。を。し。た。と。は。ね。へ。か。北八。ナ。ニ。と。ん。だ。と。を。イヤ。か。み。さ。ん。が。い。つ。の。間。に。孕。ん。だ。の。だ。さ。つ。ば。り。知。な。ん。だ。隣。の。か。み。さ。ん。で。も。起。て。來。て。頼。む。が。宜。彌次。イヤ。く。



ちつと譯がらつて。鄰へも沙汰無に。こつそりどやりてへ。マアそこへ湯でもわかしてくれ。北八。それは。承。知。だ。が。何。あ。ん。な。窮。屈。な。所。へ。か。み。さ。ん。を。い。れ。て。置。ぬ。た。の。だ。サア。く。出。な。せ。へ。ト。は。ん。び。つ。の。中。か。ら。女。の。手。を。ひ。つ。ば。り。て。引。出。さん。と。し。け。る。に。お。つ。ば。北八。を。見。て。お。つ。ば。ヤ。ア。ア。お。ま。ま。へ。か。婚。し。や。く。わ。し。が。産。み。月。を。心。も。と。な。さ。に。爰。ま。で。尋。ね。て。來。て。く。だ。さ。り。ま。した。か。ト。し。が。み。づ。く。に。北八。は。び。つ。く。り。し。た。か。は。彌次。郎。ふ。し。ん。は。れ。ず。彌次。郎。コ。リ。ヤ。北八。手。め。へ。此。女。と。ち。か。づ。き。か。お。つ。ば。ハ。イ。私。は。こ。の。晝。多。八。さ。ま。の。さ。さ。る。内。に。お。ま。ん。ま。た。さ。を。い。た。し。て。居。り。ま。した。も。の。い。や。だ。と。い。ふ。を。無。理。無。体。に。北八。様。に。口。説。れ。ま。し。て。ツイ。逢。ま。し。て。こ。う。し。た。身。に。な。り。ま。した。故。お。隙。を。貰。ひ。親。許。へ。歸。り。ま。し。て。も。物。置。い。親。う。ち。へ。は。入。れ。ず。北八。さ。ま。の。も。ら。ひ。分。

にて。親の手を引取れ。余所の内に預られて居ましたが。此事親方さまの耳に入らぬうち私
に拾五兩の金をつけて外へ片付たいとの相談。わたしは逆も斯なるからは。いつまでもはなれぬ
氣でぬましたけれど。それではあなたのは爲になるまいと。得心づくで思ひやり。心にそまぬこ
へ。嫁入して來ましたのでござります。トくるとしひ中になみた半分いさいの。はなし彌次郎
は引負ひではなくて。この女を片付代の拾五兩か。北八「さやう〜」彌次「エ、おさやアかれ。
此へらばうやうめ。よくおれをそんだめにせやアが。つた北八「ナニそんだめにあふもの
か。金をへ借ねへけりやアい〜じやアね〜か」彌次「い〜とは何のをだコレ其金ゆへに。おらア
女房をさらけ出してしまつて。今夜からひとりで。寢にやアならねへは北八「そのかはりまた。若
い女房を譲つたから。申分はあらめ〜」彌次「たはこそしくじやアがれ。あゝ女のつら。ふた目
とも見られる顔か。めへまじい野郎めだ」トまじくろになつて。はぢをたて。一ツニツいひつ
りて。彌次郎耐へず北八にぶつて懸る。北八もやうきになつて。からかつて居るうち。お堂は頻
りにぢががふるをみ〜ハッ〜うなつてくるじがるのも。かまはずこなたにはやみくもさ
かみぢふてゐるうち。夜明て嫁姑の芋七。商賣物のからだにゆ〜とてこの内へおこつれたる
が。何やらうちにはばつた〜とて。女のうめ〜聲もさ〜ゆるにぞ。芋七これほど。そとよ
う戸をぢけんとするに。あかす。叩てもぢぢぢれ。やにはに。外よりひつばすしてはいると彌次

三十二 彌次

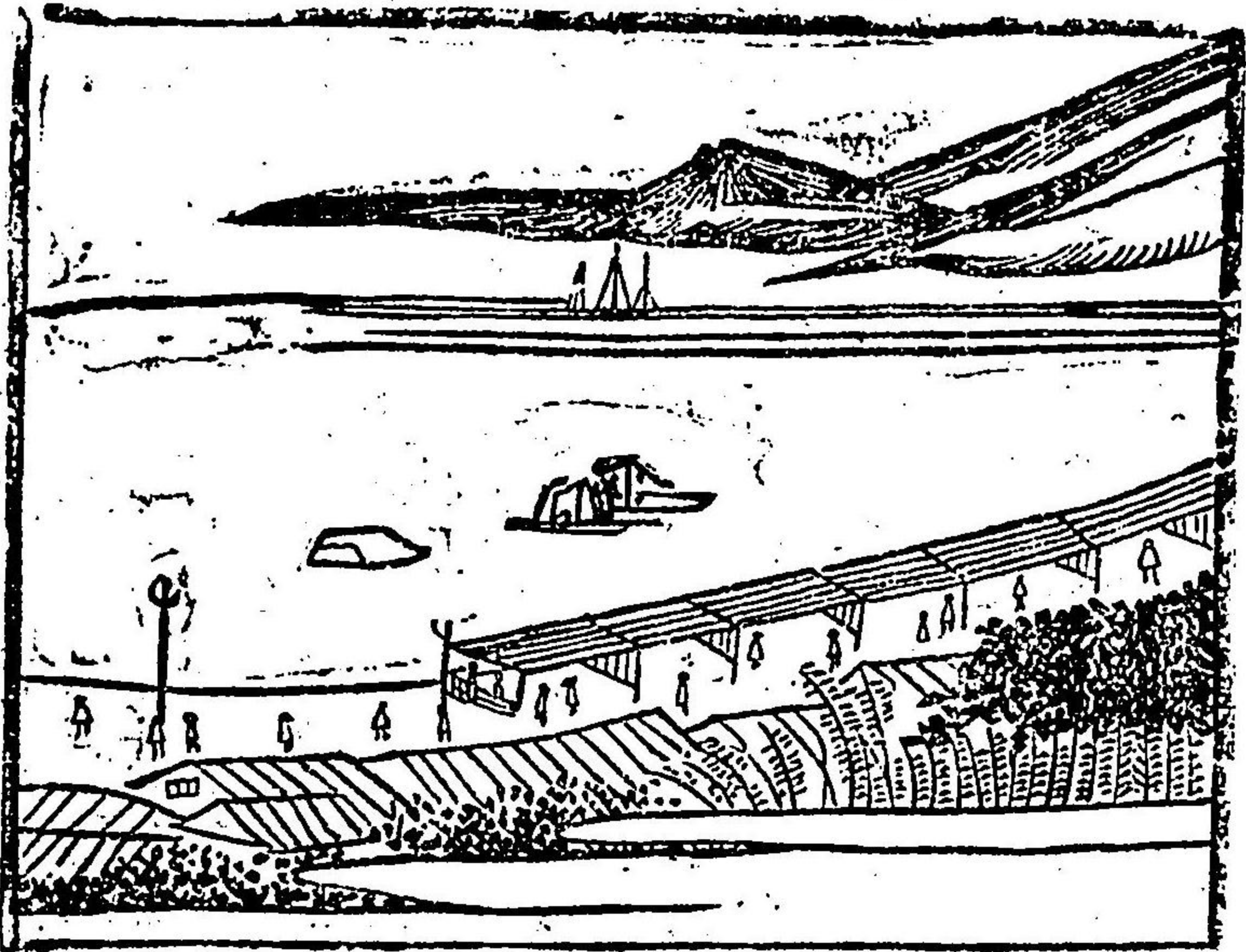
郎見るより彌次「ヤア芋七か。よくも〜」此やううめと馴合ておれをばめたな〜合點しね〜
ぞ。すまね〜芋七。ナニはめたとは何のことだ彌次「なんの事だもすまじひふて〜」
らだ」トまた芋七に取てかゝる。いも七はらを立。小ぢからのあるにまかせ。彌次郎をぢぢ
せる。北八とりおさへても。さかす。さつたか〜して。たはこぼんをふみくだくやら。とびんの
茶をふちまけるやら三人やたら。みつちやに。さわざたつる物音に。さんじよとなりの人々おひ
〜かけつけ。かれこれを取りおさへる内。おつぼはそらをのた打まはり。くるしみたるが。
ついに血をあげて目をまはじ。たされる(北八「ヤア〜」お堂をうした〜コレ芋七来てくれ〜
可愛そうに。さうかしたそうな芋七「コレヤ〜」目を廻したのだコレ〜水だ〜北八「お堂ヤ
アイ〜となりの亭主」お堂様とは。誰の事だ。若愛のかみ様は〜芋七「コレ此目をまはしたか。
かみ様となり〜」彌次さん。おめへのおかみさまか。彌次郎「アイわつちが女房のやうでもあり。
またないやうでもあり」となり「ハア聞へた喜多八さまのかみさまか。喜多八「アイわつちのか
アのやうでもあり又ないやうでもあり」となり「ヤアなんにしろとつちのなか知れない。おかみ
さまヤアイ〜」芋七「コレアつめたくなつた。もういけね〜北八「エ、いぢらして〜」
彌次さん隣者をよびにやつてくんせへなとなりの亭主「わたしが元宅さんでも呼んで來てお
びませうか。彌次。その席にお寺へもらしてもらひて〜」このうち隣者がくるやら交をす
るやら。おつぼだかして〜見れともおぼん〜顔の色變り。おつぼり〜

○發語

富貴自在冥加あれとや。營みたてし門の松風琴に通ふ麗らかな。實や大道は髪かみの如しと。毛すぢ程も動かぬ御代のためしに。鳥が鳴く吾妻錦給に。鑑武者の美名を殘し弓も。太刀も額かぶたにして。千早振の廣前におさまれる豊津國のいさばしは。斐舞のいにしへ。延喜の昔もまのあたり見る心地になん。いざや此時國々の名山勝地を巡見して。月代にぬる。聖代の御恩徳を。樂鐘頭の茶香咄しに時はへん物をと。玉くしげ二人の友だちいさないつれて。山鳥の尾の長旅なれば臍はらのあたりは打替の命いのちあため。花のお江戸を立出るは。神田八丁堀邊に。獨住の彌次郎兵衛といふ。のをらくもの。食客の北八もろとも。朽木草鞋の足元軽く。千里道の時はへは何貝なんかいとなく。蛤はまがひのむきみ紋りに對の浴衣を吹かふる。神風や伊勢參宮より足引の大和巡して。花の都に梅の浪華へと。心ざして出行程に。早くも高細の川に來かたり。川柳點の前句集をおもひいだせば

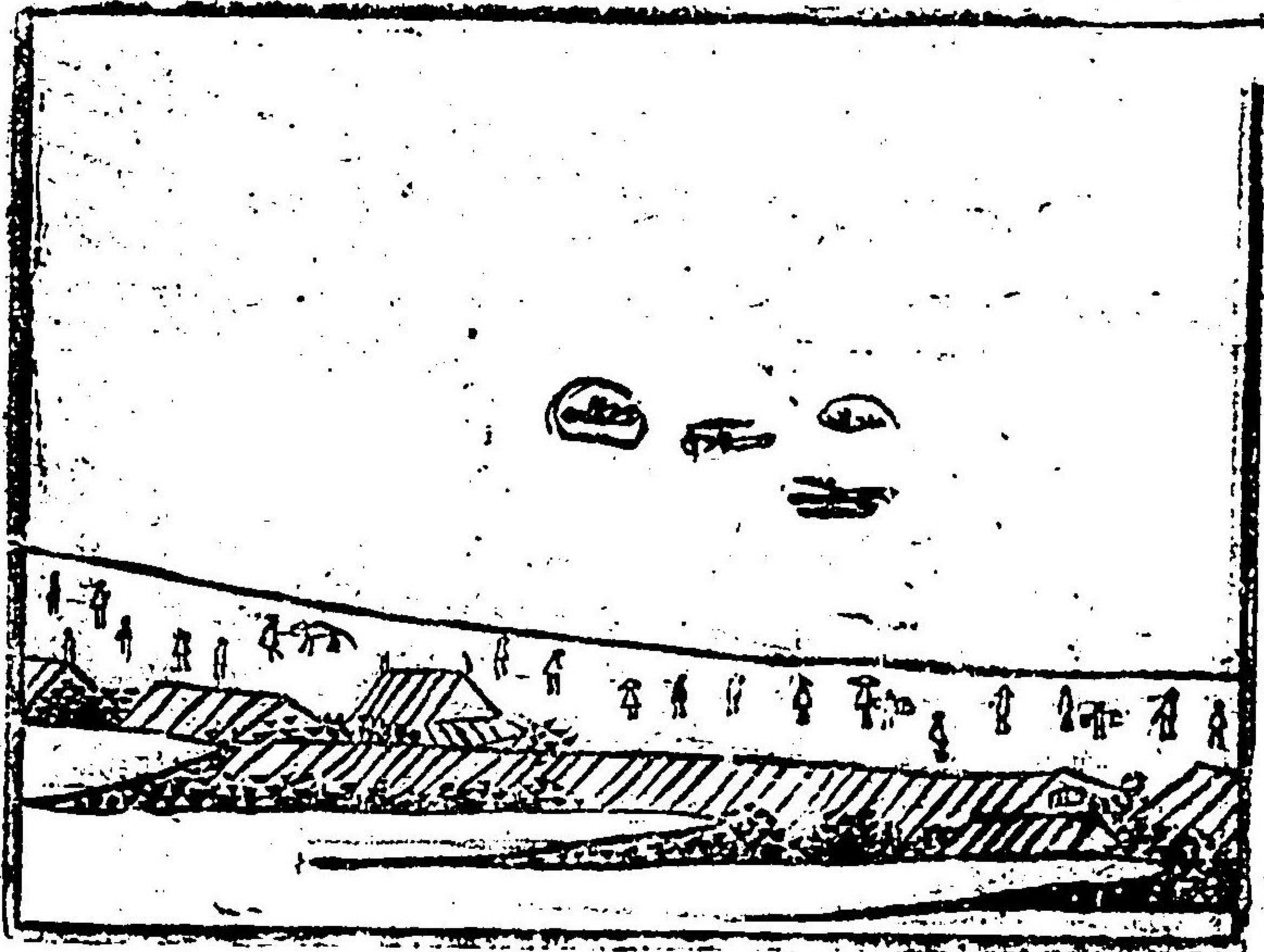
高細へ來てわすれたることばかり
とよみたれ共我われは。何一ッ心がりの事もなく獨身のささんじは。鼠の店賃出すもついでと。牙上のこらす。風呂敷包ふろしきとなしたるも心安し。去ながら且那寺の佛鉢袋ぶつぼたを相らかに。つめたれば外そとに百銅地腹ひゃくどうぢはらを切て往來の切手きりてをもらい。大屋へ古借を濟したかわりに御關所の手形を請取まがふ

九十二



める物は見たをしやへさづけて。金にかへ。がらくた物は店請たなせうにしよはせて禮を請。漬菜つけなのおもしと炭すすきかき庵あな丁は隣へのこし。ちぎれたれ共細ともなほすだれと油壺あぶらは向へゆすりて。何一ッ取殘とりのこしたる物もなく。まだも心がりは酒屋と米屋の拂はらをせず。だしぬけにしたればさぞやうらみん。さのさくながらも。これ古歌に

この世に。かりたをなすか今かすか。
いづれむくひの有ありおもへや
打笑うちわらひつゝ彌次郎兵衛狂馬やじらうべゑを口すさむ
雖いえ非な亡な命いのち可た三た奈な何なに借金かき不な報は襄たれ
過す。夫お居と本ん買か掛か乞ぎ衆しゆ。將まさ是こ川が向む成なり
于こ戈こ
うち興おこじて程ほどなく品川しながわへつく彌次郎兵衛
海邊うみべをばなき品川しながわといふやらん
と難たがじたる上うへの句くに北八きたはちとりあへず



さればさみこの。あるにまかせて
いと面白く歩行ともなしに鈴が森にいたり彌
次郎兵衛
おそろしやつみある人の首だまに。つけた
る名なれ鈴が森とは
大森といへるは發賣工の名物にて家とにあ
きなら
飯に焚麥わら紙工買たまへ。これは子供を
すかし屁のため
それより六郷の渡しを越て萬年屋にて支度を
せんと腰をかける 萬年やの女」をはやうとぞ
いはず 彌次郎兵衛「二膳頼みますさた八」コ
ウ彌次さん見なせへ今の女の尻は去年までは
柳で居たッけがもう白になつたア。どうでも
杵にこづかれると見へる。そしてめんような。
道中の茶屋では。床の間に。ひからびた花をい

けて置の。あのかけ物を見ねへ何だ彌次「アリヤア鯉の鱸登りよ北」をらア鯉がそう廻を喰の
かと思つた彌次「コウむだをいわすと。はやく喰はつじ。汁がさめらア北八」チャいつの間
持来た「ドレ」トなごちやまを切り切さうとぞしてやり「彌次」もふふはちがれい落した北
又ささへいつて。うめへ物をしてやらふトそれより二人は錢をはらひこゝを立出て行向よりか
大名の行れつ先柳の男一人六十位の親父一人は十四五の奴いづれも宿の八足也「先柳」下アに
くかぶり物を取ませうア北八「かけ落物は下座をじねへでも。いゝと見へる彌次」なせ北
はて。かむり物を通りませうぞといふは先柳「馬の口を取ませうぞ北八」馬の口も。とりはづ
しがでさるのか、先柳「跡の人せいが高いぞ 彌次」おいらがとか。高いはづだ先柳の
坂で九文龍とかたをならべた男だ北八「しやれなさんなどんだめにあはふせ彌次」アレ見やれ
せれも。いゝ奴だ。巻はしよりでさうせいに尻が並んで。何のとはねへ「後明新道の土用手と言物
だ北八」をや、弓をかついでいる。人の笠を見ねへ頸と短引して尻らア彌次「そしてあの羽
織の長さは暖簾から。金玉がのぞいてゆる北八」殿様はい、男だ。さを女中衆がこすり付るな
らう 彌次「へらばうめ。色く」な事に。せはをやくはあなたがたい。とつてやたら。そんな事をし
てつまる物かへ北八「ナセそれだつて。お道具を見ねへ」あの通りに立すめだ、サアお忍が
通たから行ふ「たつて行過ると宿はづれに」馬方「親方戻り馬だか乗てくんなどい」彌次「安くば
乗べい馬方」手で行ふとで乗てくんなどい「馬の直段もそうだんができ彌次郎も北八もこ

二十三階

より馬に乗と二疋並べて引出す鈴の音しやんく馬ヒオンく向よりくる馬方へエちくし
ようめ申いなこちらの馬方くそを喰らへさきの馬方うぬけつ出もしやぶれト是がこのて
いの行違ひの挨さつたがひにぬくたいを云てざりまのへわかれる彌次郎兵衛を乗せた馬方コ
レ伊賀よ昨日手ゆへと香でぬた。やううはアリヤア上の宿の房州だな(この手やい常に名をい
はず皆國所の名を呼北八を乗せた馬方大道にひよぐり乍ら先度の晩げにな。アノ房州めが女房
がな。己らが親方が香戸口に尿を。こいて居たと思へ。何かシヤアくといふ音を聞とうらも
氣がわるくなつたもんだて。こいつなアかまう事アねへ。ぶつためてやろふと思て。打喰つた
げんきで。いきなりに腕チねぢやアけて。そこへぶつたをたとおもへ。そうすると。女房
めが。まもをつぶしやアがつてコリヤア。何をすると。ぬかしやアがつたから。エ、あにをす
るも大のくそもいるもんかへ。ぶつてしめるのだ。まつてけつかれと云と。あにがアノ体たへ
だから。ひごへ力の有女よコノ野郎みやアと。口をつこかしやアがつたんで。エ、どうしや
アがると。横面ア一ツぶんなぐつて馬屋の壁へぶつたをして乗かつたと思へ。又こゝをぬ
かしやアがるから。己が親方の子にやろふと思て餅よチ買てぶかけだから其餅よチ一ツ三ツ女
房めが口へねじこんだら。おしやくと喰やがるから。其内へぶつちめた。そふすると最つとく
れろと。いやぢがつたんで。うらうらうらアさぐり廻して馬の驚たア。しらすにあらうが口へ押
込えたら。胸よマわるかつて。はらア立やアがさういか。うらもあんまり可愛そうだんてとら

二十三階

焼衣の下駄ア一ツおつたをれたはな。いまくしい此はなしに二人りも大きに興をよよし
しはや神奈川の棒鼻へつく(夫より二人とも馬をおりてたどり。行程に神奈川の嶺に來る爰は片
側は茶屋軒を並べ何も座敷二階造欄干付の廊下棧橋など渡して浪打さわの景色いたつてよ
(茶屋の女門に立て)お休なさいやアせ。温たかな冷飯もございやアす。煮たての肴のさめたのも
ございやアす。そばの太いのをわがりやアせ。うどんのおほきなのもございやアす。お休なさい
やアせ(二人はこゝにて一ぱい氣をつけん茶屋へはいりながら彌次「北八見さつし美しい太へ
もんだ北ハ、アいか様い、娘だ時に何が有(きた八そこらを見廻し肴をさしづして酒を言付
る娘前だれで手をふる焼焼のあぢをあたためてうし盃持出) 娘「これはお待ぢふ様でございや
した彌次「おめへの焼た鱈なら味かろふ(娘フ、ント笑ながら表のはふを向て呼なからゆく)娘
お休なさいやアせ。奥が廣ございやす北八「奥が廣いはづた安房上總までつゝいてぬる彌次
八見さつし此肴はちとござつた目元だ打かへしみて彌次
ござつたと見ゆる目元のお肴はさては娘が焼くさつた
北八是を聞てたなしくこじつける
味とふに見ゆる娘に油断すな。さやつが焼たる味のわるさに
彼是を興じて爰を立出色く道草を喰ふ馬路の氣さんじは高聲に咄ものしてたどり行程に此宿
はづれより十二三才の伊勢參跡になり先になりて伊勢參「旦那様一文くれさい彌次「やろふ

三十三

とも手ゆへにこた 伊勢参私ら奥州 北八「奥州はどこだ 伊勢参」笠に書て有中す 彌次「奥州信
夫郡 幡山村長松よ」。幡山かおいらも手前たちの方に居たもんだはた山の奥次郎兵衛殿は逆者
で居か 伊勢参「奥次郎兵衛といふ人さアしり申さな 奥太郎殿ならわしらが隣さアに有中す彌
次」チ、その奥太郎よ其又内に呑ん太郎と云ふ年寄のちい様が有はづだ伊勢参「ぢいはいは有申す彌
彌次」そうして奥太郎殿の女房は艶女だつけ 伊勢参「おかつ様ア女で御さりますよすよく知て居
めさる 彌次「今じやア何といふかしらねへがおいらが居た時は名主殿は熊野傳三郎といつて
ナ其女房が内にかつておいた馬と色事をしてにげたつけが。とふしたしらん 伊勢参「それよさ
ア。よくしつて居めさる。庄屋殿のおかつさまア。内の馬右衛門といふ男とつばしり申した北
八「妙々 彌次「コリヤ小僧よなせ跡へさがるくたびれたか 伊勢参「わしは。ひだるくてなり申さ
ない 彌次「餅でも買てやろふこひく」(五文餅五ツ六ツ買てやりながらいよくづにのり) 彌
次何と小僧能く知て居るだらう 伊勢参「アイく」(餅をしてやる此内これの伊勢参これも十四
五の能髪跡から呼かける「チ、イく」長松ヤイく 奴の伊勢参「ささいのく」ソレう主やア餅
をふれにもくれさい 伊勢参「先へ行人に買てもらへ。あんでもあの衆が國さアの咄をすするま
イく」といつてゐると。直に買てくんさるはチャアッレノ伊勢参「チイうちも買てもらうべ
い」かけ出して彌次郎に追つく) わしも餅を買てくれさい 彌次「手ゆへはどこだ」笠のかさ付を見
てハ、ア) 是も奥州下坂井村コレ手ゆへの村に奥次郎といふ親父があらふ 伊勢参「先餅を買て

三十三

くれさい。そふせないけりやア。こんたのいふとが當りもふさない 彌次「おきやがれハ、ハ
、北八」といつはかつがれた。ハ、くト打笑て行程に早程ケ谷の驛につく。雨脚より旅徒の御
鳥に出して假泊女の顔はさながら。面をかむりたることく。奥白に途立。いづれも井の字がすり
の紺の前垂をびたるは。ほこそいにしへ爰は帷子の宿といひたる所なん聞へし(旅人を乗たる馬
士たなまける聲にて)馬方「富士の人穴馬でもはいる。なせにお方にや穴が無ドウく」泊女「馬
士とんお泊かな馬方「イヤ旦那は武藏屋たか。お前の顔を見たらッレ此ちくしやうめが泊たが
らアッレく」馬とインくく」(行過ると又あとより旅人二三人)泊女「申お泊かへ」(引とらへて
引はる)旅人「コレ手もけらア 泊女「手はもげてもよふゆささい升お泊なさいませ 旅人「馬鹿い
へ手かなくちやアお飯まが喰れねへ 泊女「お飯のあがられねへほうかお泊申ちやア猶勝手さ旅
人「エ、いめあましいはなさぬかど(やうく)にふり切て行と又あをからくるは旅僧(泊女「お泊
かへ(旅僧泊女の顔を見て)旅僧「イヤもちつと先へ参ろふ」ト此跡よりくる田舎道者(泊女「お泊
なさいませ 田舎「旅ごさア安かア泊ますべい 泊女「お旅ごは二百ツ、田舎「イヤくううは出
し申さない。うんだい湯はぬるくてもよくござる。平はついで替てくつた事ア御ざら無か。飯と
汁はたつた六七杯ツ、も喰やアうれてよく御坐るは。うんだいにはやア。明日の晝食は此柳ごりに
一ぱいつめてもらへばもう外に何んにも。入申さ無旅ごは百六十文ツ、出し申さう 泊女「そん
なら外へお泊なさいませへ。田舎「ハア泊ご行ますべい」トゆき過る(彌次郎兵衛北八此休を見て

六十三 膝

始終興に入又こじつける歌

お泊はよい程ヶ谷と泊め女。戸塚前てハはなござりけり
と打笑ひ過行程に信濃坂といふ所にいたる此なん武州相州の境なりと聞バ

玉櫛け二つにわかる國境所かはれば信濃坂なり

すでははや日も西の山のはにちらつきければ。戸塚の驛になん泊へしといそぎ行道すがら彌次、

コレ北ヤ○待つせへ。咄があらア。何でも道中は飯盛をすゝめてうるせへから。こゝで一ッはかり
事が有かいらわ親仁なり主やア廿代といふもんだから。親子を言ても。いゝ位だによつて。是か

ら泊くでは何と親子の分にしようじやねへか 北八「サ、此は妙だなる程それヒア。すゝめね
へでいひそんなら親父さんといふのか 彌次「そふと貴様は諸事を息子さぞりだが承知之助か北

八「よし〜そういつて亦いたばでも有たら此息子を出しぬくめへよ 彌次「エ、馬鹿アいわ
しチャもう戸塚だ。笹屋にしようか 北八「親仁や 彌次「何んだ 北八「爰じやアねつから泊り

なせへといつて引ばらねへの 彌次「本に其善だ爰はどなたかお泊と見へて皆宿屋に札が張て有
北八「コウ向の内が風流だせ 彌次「コレ姉さん泊てくれる氣は無いか 旅屋女「イエ今晩はお泊

で合宿は成ませぬ 彌次「南無さんううたらう（ト段〜宿をさがせども皆ふさがり泊れぬゆる
大きにこまりまごつさあるく）

泊めざるは宿を油氣としられたり。大金玉の名ある戸塚に

七十三 膝

夫より宿はづれにいたるに漸く旅人屋の合宿無きていに見ゆるあれば。やがて爰に立よりて彌次
次「何とわしらを泊めてくんなせへ 亭主「お二人りかへ。お泊なされませ。當宿は宿屋は皆ふさ
がりましたが私方はかり當ませぬ 彌次「こんなにきれいな内をなせあてねへの 亭主「私方は別宅
でござり升。それお鍋お湯はどうだ（此内女盥に湯を汲て来りやなぎこり風呂敷包を座敷にはこ
ぶ 北八「コウ彌次さんじやアねへ親仁おめへ草鞋もいつしよにしておこふ 彌次「サ、そしておれ
が脚半もどつとすいすいでおさや 北「ナニ脚半を。いすげか（顔を見ると彌次郎兵衛目つきでしら
せるゆゑ口こゝとをいひながら脚半を洗ひしまいて） 北「姉さん茶を一碗くん（ト座敷へ通る
女盥にお茶を二ッ持て来り）女「直にお湯にお召なさいやせ 彌次「コウ彼女の面をみたか、真中が
へこんで何の事わねへ。踏げへしの馬蹄石といふ物だ 北「そりやアそらと彌次さん 彌次「ソレ女
がきたは 北「チット親仁。湯へ道人ねへか（此内女盥を持って来る） 彌次「サ酒か江戸者と見と。ど
こでもこうするにはあやはる 北「ナセ酒を出しやア別に錢を取か 彌次「しれた事よ（トいひなが
ら手拭を取湯へは入る女祝ふたとてうしをもちいで）女「お一ッめしあがりませ 北「是は御馳走
だ。コウおぬらが親父に早く揚らつせへ。いつてくん女「ハイさよウ申ませふと（立て行く
此内彌次郎兵衛湯よりあがりて） 彌次「ハ、ア何だ。コリヤア香るは。コレ手前早く湯に入てさや
北「イヤ香でからいかふ 彌次「エ、てめへもいぢの。きたねへもんだ。這てさやナ（此内北八湯
へは入る） 亭主「出て是は何も御座いませんが一ッ召あがりませ 彌次「イエ御亭主さん是ではめ

八十三膝

いわくだ亭主「イエ時にかよウで御座升。私方は今迄外商賣を致して居ました。此度旅之屋に成
まして。すなはち今日が見世開で御座り升。あなた方は始てのお客ゆゑをそれで祝つて一ッ差上升の
で御座り升から別に御代をいたゞくのでは御座りませぬ。心置無召あがつて下さりませ。彌
イヤ夫は先にお出たい。しかし御馳走に成ては。近頃氣のどくだ亭「ナニサ御座慮なう今にお吸
物も出衆升。彌「イヤもふかまひなさるな亭主」へ御ゆるりと「トいゝすて立つて行く北八
風呂より出て「北八」よウすは残らずあれにて聞た親方たゝとは有がてへ彌「コレしやれずとも
う一べん湯へ這入てきや其内に皆おれが香でしまハア北「そうなるふと思つて。湯へはいつて
もあらうそらはねへ。チャははまだ士だらけだ。まよよサア初ねへ彌「もウとツくに初ていらア
「トもウ一ッ初直してから。さうウ北「イヤおいらはこれだ「ト茶碗についでいさなじに。ぐら
くどやらかし「北八「ア、いゝ評だ時着はハ、ア浦はこも白板だ。鮫じやアあんめへ。濱生美
に車海老。やホヒアねへ。コウ親仁此紫蘇の實がいつち妹へナおめへは定バツかり喰なせへ彌
馬鹿アいへそりやア跡へ残るにきまつた物だ。もう吸物か出そうな物だ北「まちなよ「トふす
まの間から勝手の方をのぞき」北「出るく今よそつていらアチャ南無さん神様へ上るのだ。イ
ヤアくるぞく「トしごを直して居るとやがて女吸物を持って出でて「女「おてウしを替ませよ」
トもつて行二人ながらすぐに吸物のふたを取て「北「チャ赤味噌だア。しやれるは。よもや玉
そじやアあんめへ。てうしはどウだ彌「世話しねへたつた今持て行たは北「もウきそふな物だ

九十三膝

(此内女かてうしを持てくる二人りながら成口ゆへ相の押のど番掛段々酒が廻て親子の扶さ
つも何だかもちやくちやと成北「コウ姉さんちつと相をしてくん女「私くしは一向喰ませぬ
北「はてまコレそういはずとをして。今夜おめへと一寸ナ。是か片めの盃だノウ親仁 彌「酔めは
もう酔たそうな北「ナニ酔たも氣がつへエ。アノ親父の面はよ。ハ、ハ、ハ「トまじたにてしや
れる女はきもをつぶしながら酔けた盃を干て彌次郎兵衛方へさす北「エ、親父のちくしやうめ
思ひさしに預たな。コウ女中のちに熱み升「トしなたれかゝる女はあされて早々にげだして行く
彌次「コウ貴様ア悪男だ女の前であんな事をいふな北「ナせいつちやアわりいか。あるかア
ふめへ。おらアアノ太るもんめか。おかしな目つさをするのでう親子の縁が切度成た「ト此内
に膳も出て色々あれども餘り事長ければこゝに略すなまな加親子の挨拶にて旅こやの女眞事を
おもひ何をいつても「取上げねハ今更一人寝の枕淋しく。打ふしけるが夜も更行間々に勝手もし
づまり。山の神の小言いふ聲のみ聞へて此二人り。寝もやらず。着たる夜着のあか付かけて。干手
観音の利生あらたにかゆき所へ。ふすまもある風の手の届くもうるさくほる酔の酒もさめて。今思
ひ巡らせば。一人り寝にかはちの廻らざるも。めし盛の杓子當りわるさ故にや。假の親子の遠慮
有しはかへつて。烏目の徳つきたりとあかしくて
一筋に親子と思ふ女より只ニマサぢの錢まうけせり
斯口すさみて。打笑ひつゝ片向し箱枕ら。耳の根にいたくひやく夜明の鐘早もてには助郷馬の

嘶く聲ヒインく(馬の尻の音)ナウくく(長持人足の歌)人足「竹にさア産ハアなアんあへ
 サイくくどうするく(此内彌次郎北八もあき出ればやがて膳も出てくにも色くくあれどもあ
 まりくだくくしければ略す夫より二人はそこくくに支度してくを立出ると向よりついで來
 るか大名長持引もさらす)人足箱根サア八里ハイなアアッ。あへアッくくどうだかく(北八「彌
 次さん見ねへ重そうな物を能かつくせアノ尻を掴まア彌次「あの手やいが尻を振廻を見たら
 ナトふさいで來た北八「なせく(彌次「死た女房が事を思ひ出して北八「おきやアがれ。ハ、
 くく(此内向よりちよんがれ坊主破れた扇子にて手をたきながら)坊主「ヒヤヤ御繁昌の
 旦那方一文やつて下しやいませ彌次「付なく坊主とくくくくよいとこな北八「コレ付くな
 といふに錢はねへけ坊主「ナニない事が御座りやしやう。道中なさるお方にはなくてかなはぬ
 錢を金またも杖笠袴桐油なんぼしまつな旦那でも。足一本では歩かれぬ。其上田町の反魂丹こり
 や幸手屋のしらみ紐。越中ふんどしの掛がへも。なくてはならぬ其替り古いやつは。手拭はかつ
 かひなさるが御徳川彌次「エ、やかましししッレやろう(トはや道より一文はふりだす)坊主「
 彌次「四文錢とは有がたい彌次「ヤア四文錢か南無さん坊。三文つりを貸せ坊主「ハ、くくく
 彌次「いめへましし(此内早藤澤につきければまづばうばなの怪しげなる茶屋にやすみ)北八「
 さん四子はつめてはか。ナトあつためてくん茶屋は「ドレ焼直して進せ升べい(けし炭の
 をかきさかした灰の立をもかまわずあをき立る此内二人りはほこりをはたきく(煙草吞めると

六十位の桐油を着て風呂敷しよつたる親仁此見せ先に立とまりて親仁「モシちつと物を問ます
 べし。江の島へはどふらまます彌次「おめへ江の島へ行なさるか。そんならこりよままつ直に行
 てノオ。遊行様のお寺の前に橋が有から北八「木に橋といやア體其橋の向だつげいさな女房の有
 茶屋が有たつて彌次「ソレく去年からか山へ行た時泊た内たアノ女房は江戸物よ北八「どう
 りで氣がきいていらア親仁「モシく其橋からどう行升彌次「其橋の向に鳥居が有からそこを
 異すぐに北八「まがると田圃へおッ落ちるよ彌次「エ、手めへだまつていろへ。ソノ道をすつ
 と行と村はづれに茶屋が二軒有所か有北八「ほんに夫よよく腐つた物を喰はせる茶屋だ彌次「
 ソリヤア手めへのいふのは右側だろう。左側の内はいはは。去年をらが行た時。ピチーくする
 鯛の焼物。夫に大平が海老のはね出るやつに。玉子とくわいと。大椎吾にそして親仁「モシく私
 はそんな物は喰すさよう御座る。そこから又どう行升彌次「うこそすつと行當ると石の地藏様
 が有やす北八「アノ地藏様は漆の願が聞うだ。おらが方の。へた茄子があれで直つた彌次「本
 に漆といやア新道の金箔屋の狸言めは草津へ行たけが。どうしたしらん北八「あれは大福町に
 所帯を持って居らア彌次「大福町といふはどこだ北八「大福町はわいらが通りを異すぐに常座町
 へ出て判取町から出賃町を通して。地代屋敷の辨盤橋を渡るとうこか大福町だ親仁「そんな事よ
 りやア。江の島へ行道をおしへてくんさい彌次「本にうだつて其地藏様から大福町を異すぐ
 び行とノ親仁「江の島へ行にもそんな町が御座るか彌次「イヤくこりやア江戸の町だつて親

二十四

仁「此非に江戶の事は聞中さな。ちつちもな衆だ。先へ行て開弁べい」ト云つゝ
こゝをいひ乍ら行過る北八「ハ、ハ、ハ、ハ」(此内ハハは團子を四五くし盆にのせてもち出つ
る)彌次「こいつは黒い團子だ」トいひながら「トくし取上て見ればけし炭の火が團子にくつ
ているゆゑわざと火のついて居るをかくして北八の方へさしだして)彌次「コレ手めへ。こげ
たやつがよからう。北八「ハ、ハ、ハ、ハ」(ト口元へあてから)「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云
んだめにあわせたコレ團子に火が。くつついてア、びりくする。彌次「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ手めへめ
つたかなのがよからうとおもつて火の付て居たのをやつたは北八「エ、いめまし、ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ
彌次「サア行う婆様お世話」ト茶代を置袋を出て藤澤の宿へは入と兩側の茶屋口を揃て)茶や女
「お休なきいやアし酔ない酒も御座りヤアすばりくする強めしを上りヤアし馬方「旦那、旦那、
馬はどうか。安くやりませう。馬は達者だ。はねる事は詰合だ。籠かき「籠よしかの旦那、旦那、安
く行ましやう。彌次「籠はいくらだ。籠かき「二百五十。彌次「高い。二百五十ならおれがかついで
行ア籠かき「二百五十にまげます。彌次「まげるか。ハ、ハ、ハ、ハ」(此馬鞋をそけへ付て下せへ籠かき
「お目へ乗のかへ百五十でかつぐ。いはしやつたじやアないか。そんだんで片棒私かついで百
五十取のた彌次「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ
ア棒組「サア召ませ(駕の直段出来彌次郎兵衛と)より駕に乗て出かけ)と棒組「棒組や旦那はか
たいで跡棒「しつかり捕ていやしやるもんだんで(此内茶屋の亭主籠かきの名をよびながら)

三十四

主「サ、イ、梅澤の佐渡屋にちよつくり。そういつてくん。さ、此中の新酒はあんまり水の
交よらがすくない。今度から酒をちつと交てよとしてくんさ。ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ「ハ、ハ、ハ、ハ」ト云つゝ
おちたア籠かき「ア、ハ、ハ、ハ」(トかつぎいだす)彌次「ヨウ貴様立アア藤澤かアノ宿も大分きれい
なつたの間屋の太郎左衛門殿は達者か。先棒「よく旦那はしつて御座る。随分達者で居られ升彌
次「孫七殿はまだ勤めているかの。先棒「ア、ア、ア、ア」旦那はなんでもあかぬいもんだ。跡棒「べら棒
めしつて。いやしやる等だ籠の内で道中記を見ていさしやるは。ハ、ハ、ハ、ハ」(ト此内早くも馬
入の渡むにつく北八爰は何と云川と人にとひしは只渡し場と斗りこたへけるを彌次郎聞て
川の名を問へば渡と斗にて入か馬入の人の挨拶
此川は甲斐の猿橋より流るよし。やがて向に渡り。たどり行程にて、に白旗村と云るは。その
むかし経の首とくに飛来りたるを齎めて。白旗の宮と云る今に在を聞て彌次郎兵衛
首ばかり飛た咄の残りけり。は、は、は、は、の事は白旗の宮
夫より大磯にいたり虎が石を見て北八「ハ、ハ、ハ、ハ」
此里の虎は敷にも剛の物。おもしろい。と成と真節
彌次郎兵衛とりあへず
夫ながら石に成とは無分別。一ツ蓮の上はや乗られぬ
斯打興じて大磯の町を打過立譯に垂り。文藝上人が刀作を聞へし西行の像に向て

四十四段

我くは天窓を破りて眺よまん。刀作なる御影がみて
 春の日の長欠び。あとの掛命もはづる。ヨリ目を指ながら北八「ア、退屈した。ナント彌次さん
 道々などを懸よふおめへ解か彌次「よかろう懸やれ北八「外は白壁中はどんくナアニ彌次「
 べら極めろんな古い事よりおれが懸ようか。コレ手めへとおれと連達て行と掛てサア何ととく
 北八「ソリヤアしれた事伊勢へ参るとく彌次「馬鹿めこれ。馬二疋ととく北八「なせ彌次「
 どうくだから北八「ハ、くくくろんならおいら二人りが國所ナアニ彌次「神田八丁堀の主
 與次郎兵衛店ととくか北八「エ、おぶしやれんな。これを家が二疋犬子が十疋ととく彌次「
 其心は北八「豕二ながらきやん十者彌次「おきやアがれ。コレ今度はむづかしやつをいほふ。
 其代り手めへ解ねへと酒を賣せるがいか北八「解たらおめへ買か彌次「しれた事よ北八「こい
 つアおもしろい彌次「ちつ長いせ。マアこうだ。おいらが二人か國所と掛て是を家か二疋犬
 ころ拾疋ととく其心はふた二ながらきやんとを者サアは何に北八「ハ、くくろんななぞが有物
 か彌次「べら極めありやアこも掛るは解て見ろへ北八「どうしてそれかじれる物か彌次「しれ
 ざア言てきかせよふ。是を色。自分の帯を取て女にも帯をとらせると解北八「どうきむづ
 かしい其心は彌次「ハテ解た上で又解せるから。なんと奇妙か。サアく酒を買く北八「まぢ
 なよ意越げへしをやらかううおれがのもちつくり長い。マアかいつまんだ所かこうだ。おいら二
 人が國所と掛て是を家か二疋犬と拾疋と解其心は家二ながらきやん拾者。是又色男か自分の

五十四段

帯を取つて女にも帯をとらせると解く其心は解た上で解せるから。サア是ナアニ彌次「ハ、
 くくくとはうもねへ長い謎だぞ北八「どうだ彌次さんしれめへが。是を衣箱のふんせしと
 解やす彌次「其心はどうだ北八「解ては掛くく二人「ハ、くくくくくく「打笑ひつゝあゆ
 むとはなくいつの間にか曾我の中村に八幡八幡の宮を打すき酒匂川にさしかりけり
 我くは二人り川越二人りにて。津匂の川にじめてよつたり
 (此川を越行は小田原の宿引早くも道に待受て)宿引「あなた方はお泊で御座り升か彌次「貴様
 小田原かおいらア小清水か白子屋に泊つもりだ宿引「今晚は雨家共お泊か御座り升からどうぞ
 我方へお泊下さりませ彌次「貴様の所はきれいか宿引「さうで御座り升此間建なをしました新
 宅で御座り升彌次「坐敷は幾間有宿引「ハイ十疊と八疊と見世か六疊で御座り升彌次「すい風
 呂はいくつ有宿引「お上と下と二ツ宛で四ツ御座り升彌次「女は幾たり有宿引「三人御座り升
 彌次「きりやうは宿引「すいぶん美しう御座り升彌次「貴様御亭主か宿引「さやうで御座り升
 彌次「神様は有やすか宿引「御座り升彌次「宗旨は何だの宿引「浄土宗彌次「寺は近所か宿
 引「イエ遠方で御座り升彌次「非禮は何時だ北八「コウ彌次さんおめへもそんな事を云もんだ
 彌次「ハ、くくくッイ口かすべつた。ハ、くくく「ト段々打つれて程なく小田原の宿には入
 ると兩側の泊女)泊女お泊なさいませく(呼立る聲かじましく彌次郎しげらく考へ
 梅原の名物とてや泊女。口を酔くして旅人を呼ぶ

十五膝

「……」云々色男はうろたへた。「……」もう寝ようか（ト手水に立て行此内女來りと
 こきとる）北八「コレ姉さんおめへおいらが連の男に何か約束をしたじやアねへか宿や女「イ、
 エチキ、……」北「笑ひ事じやアねへ。コレヤア内じやうの事だが。あの男はおねへ落かきたか
 らうつらぬようになせねおめへがじよつては氣の毒だからさかすか。必らずさたなした
 よ（ひそ）者で真事らしく言へバ女さをもつふせしようすに北八づに乗り（うして足は年中
 遊で何の事はねへ。乞食はう主の普笠を見る様に所々に油紙のふたがして有。夫に又アノ男の胡
 臭のくさい。うのくせ。ひつこい男で。かぢり付たらはなしやアねへ。めんようなアノ落かさ
 云者は口中のわるくさい者で。あいらも並なでめしを喰さへいやでならねへがしかたがねへ。思
 ひ出しても出づが走るヤツ（ト其内彌次郎てらすより出て来るようすに）宿の女「もうお
 休なさいませ（トそう）立て行く彌次座吸へ遣入直に夜着をかぶりて（彌次「ドレふところを
 あつためて置てやろふ。北「いゆいゆしひ今夜のようすに。うまらねへ事はねへ。やけをまじて武朱
 金はふんだくられる其上。アノ美しひやつを側で抱て寝られてはんに踏だうけたりな目に合は
 へ彌次「へへへかんんんさつし。今夜ア一寸請にくからふ。さくじよう目こたへられぬハ、ハ
 へ。コレ北八もう手めへ寝るか。もつと起ていねへ（北八「いさいかまはず）北八「コウ
 へ彌次「もうさうふなものだ（ト一人り枕してまてども）音も無しなまなかな先錢をやつて
 襦に振かど氣が氣ではなくこらへかねてもしよふやたらに手をたゝきたてると宿屋のかみさん

來り「宿女房」お呼びなさいましたか彌次「イヤおめへではわかるめへ。さつきこの女中にちつ
 と頼んで置た事が有からどふぞ鳥渡よこしてくんねへ女房「ハイあなたの方へ出ました女は
 雇人で御座り升からもう宿へ歸りました彌次「エ、ほんにか。うんならよし（宿女房「ハ、
 お休なさいませ（ト勝手へ行く）北八「ハ、へへへ彌次「べら棒め何がおかしい北八「
 ハ、へへへイヤ是で地にした。もう女堵して騒ようか彌次「勝手にじやアがれト哀なる
 かな彌次郎兵衛。北八が奸計とは露じらす。貳百懸しやうらめしのか洒落か無洒落かあたら夜を
 是非なくころりと。つツふじけれバ彌次「おかしく又一首

こま塩の北からき目を見よとてや。おこわに掛し女うらめし
 彼は興してふしたりけるに。早くも聞ゆる道寺の鐘に一睡の夢は覺て夜明けなバ。やがておき出
 うこくへ支度して立出けるに今日は名にあふ箱根八里早うろく（とつま上りの石坂道をたど
 り行程に風まつり近く成て彌次郎兵衛

人の足に踏きたけぞ箱根山。ほん堅ぢなる石高のみち

十五膝
 北八「コレ」明松を買ねへかこの名物だ彌次「べら棒めもう旭の出る時分明松がナニ人物
 か北八「夜が明てもいへはな。おめへ買とともせば宜夕夜の代りに彌次「おきやアがれ北八「
 ハ、へへへ又こへは湯本の宿といふ所側の家作さびやかにして。いづれの内にも
 ぬり立た女三三人ッ、見せ先に申で名物の物細工を商ふ。北八「軒へこのぞき見て北八「

二十五 膝 こうく あらい粉のかんばんを見るやうに顔と手先斗り白い女が居らア彌次「何ぞ買ふ娘」な
んぞ召なさいませお遣入なさいやんせ彌次「コウ姉さんうこに有物を見せなせへ」ト云に
娘は又外の客と合手に成て商ひして居る勝手より婆アはじり出「婆」ハイ「是で御ざり升か」
婆アではふしやうちの顔つきにて彌次「夫じやアねへコウ姉さんうこちのを見せねへ婆」ハイ
「是で御ざり升か彌次」エ、夫でもねへコウ姉さんお前の手に持て居は何だ娘「ハイ」お
煙草入で御座りやんす彌次「コレ」此事サ時にいくらだ娘「ハイ」三百で御坐りやんす彌次「
百ばかりにしなせへ」娘「お前さんあんまりなあなた方のお蔭でかやうに致して居り升ものを掛直
は申やんせぬ」彌次郎をじろりと見るより怒ちのろくなりて彌次「うんなら二百は娘もうさつ
とお召なされて下さいやせ」サキ、~~~~~「ねつからをかしくもない事を笑て
彌次郎が顔を又じろり見る彌次「うんなら三百」娘もうさつとで御坐りやんすホ、~~~~~
而倒な四百」ト登本はうり出して買取る」北八「サアいかうようお出なさいやんした北八」
ハ、~~~~~三百の物を四百に買はあたらしい」彌次「夫でもおしくねへ」娘はよ
つボ下おれに氣が有たと見へる北八「をさやアがれ」彌次「夫でも初手からおれが顔は
かり見て居たわ北八」見て居た筈だアノ娘の眼を見たかや藏にら眼だハ、~~~~~「こゝにいが栗
頭の子供四五人めて」子供「横現様へ御代參一文やつて下されナヤ北八」ナニ御代參とは何だ子
供「こなた衆の代りに参るは北八」ナニおいらが代りにいづれを見ても山家うだち身代りにす

る面らが有ものかろくな首は一ツもない。イヤ時にアノ証は何だ彌次「さいの河原へきたぞさ
たぞ

辻堂はさすかにさいの瓦屋根されも鬼は見へぬ極樂
お茶漬のさいの河原の辻堂は。にじめたやうな形の坊さん
夫より御脚所を打過て

春風の手形を明て君か代の月さゝぬ露を越る目出たぞ
斯説して峠の宿に悦びの酒汲かわしぬ。

○第二編

三十五 膝
長明が東海道記に曰く松に雅琴の調子有浪に鼓の音ありと息杖の竹笛を吹ば助郷の馬太鼓を打
膝栗毛二編の序開しヒヤリ〜てんつく〜すてん〜。狂言詞「此様に候者はお江戸の蒲田の
八丁堀邊に住居せし彌次郎兵衛北八と申すなよけ者にて候儲も我々伊勢へ七度熊野へ三度愛宕
様へは月參の大願を起し。ぶらりしらりと出かけねつから。急す候はどに。ゑいやつと箱根の驢
に着て候。玉くしげ箱根の山の九折〜。げにや久方の醜酒屋。山椒の魚の名所多き山路かな
あまぎけ賣親父「名物あがらしやいませ。あまぎけ飲まじやいませ。北八」彌次さんちよと休やせう
オイ一盃くんナトせう木に腰を掛る親父一盃汲て出す」北八「こいつは黒い〜彌次「黒いよ
うてあまぎは遠州濱松じゃアなへか北八」わりい〜コウおめへなせ香まねへ彌次「おいら

四十五

いやだ。ソノ茶碗を見や施主の氣がきかねへよ。朝顔形にでもすればいいに。北八「ううさ。是じやア強飯の香の物も奈良漬じやア有めへの親父」香のもんは御ざらねへが梅干よチ進せ升べい。皿にさる梅干を出す。北八「チイ〜いくらだへサアお世話。一ト錢を拂ひ出でゆく。向より来る小荷駄馬引もさらず鈴の音しやん〜」馬士唄「宮上の町かつんもへる。なじよにけむりがつんもへる三島女郎衆に。がら、打込。こがれをじやつたらつんもへたア。じよんがねドウ〜」こちから行く馬方互に行ちがひて。ヒヤア出羽宿の先生どうだ。向よりくる馬方「べら林めおれが先生なりアラぬははつ〜けたア馬ヒイン〜」又向より来るはお大名のお國からお江戸入の女中立籠をつらせて四五人づれさわざつれて来るを見て彌次郎「チャ〜〜えらい〜」北八「ほんに是は皆生た女だ奇妙〜。ナント彌次さん。つかねへこつたが。白い手拭をかむる。顔の色が白く成てとんだいきな男に見ゆると云事だかほんとうかの。彌次「ソリヤア遠なしさ。北八「よし〜」トたもとからさらしの手拭を出して〜つとほうかむりをするを通りすがりに女中たち北八の顔をのぞきて見て皆〜笑ひ通り過る。北八「ナントどうだ今の女供かおいらが顔を見てうれしさうに笑つて行たはさうでも色男はちがつたもんだ。彌次「笑つたはづさ手めへの手拭を見て木綿さな田の紐がさがつていらア。北八「ヤア〜こりやア手拭じやねへ越中ふんどしで有た。彌次「手めへタペふろへ遣入時ふんどしを袂へ入て夫なりにわすれたはあかじい大かたけさ手水をつかつて。顔も夫で拭た〜らう。きたねへ男だ。北八「ううさ。どうりこりわる

五十五

くさい手拭だと思つて彌次「せんてへ。手めへがあだじけれへから。こんな恥をかくは北八」なせ彌次「木綿をしめるから手拭を取違へるは。コノおいらを見やれいつでも絹のふんどしだ北八」夫だつて家根屋が長局の替へに行きアしめ〜し絹をしめる事もすめへ。エ、まよ〜旅のはぢは。かきつてた斯もあらうか。手拭と思つてかむるふんどしは。緒ころ恥を晒すなりけれ。夫よりかぶと石をよめる彌次郎兵衛。たがこ〜に肌捨おきし兜石掛る難所に降参やして。斯て山中と云へる建場じいたる。爰は兩側に茶や刺を並べてお休なさいまアし。下り謀白もお座りやアす。餅よチあがりやアし。いち膳飯よチあがりやアし。お休なさいやアし〜彌次「北八ちつと休でいこうへ茶屋へ遣入る此内の庭につき立てたるへつ〜いのまへに雲助共ふとんをからだに巻きたるも有り澁紙を着たるも有り或は露ささ赤合羽なぞをきてよりこぞり火にあたり居ると表の方より竹のきせるをくわねて一人の雲助すつとはいり。おへねへひゆうたくれどもだ。赤熊やとぶ八めが峠迄長持でやつたアな。一人の雲助「えいは其だぬあし手が。あんどんに。げんこは。ふんだくるべい。此長持と云は六百の事あめてと云は酒手の事なり。今一人「コレうりやアあいか。コノ郎野がおじやらくを見ろへ。しつかり紋付を着がつた。酒をもをきて居る雲助。昨日小田原の甲州屋で。やらやつと一枚もらつて着たか。あんまり裾が長くてお醫者様のようにだ

の淋く成たる故にやあらん(此時やうやく二編の宿へつくと兩側の呼立る女聲々々)に(お泊りなさいませ)彌次「お引張な此を放したら泊へ女」そんならサアお泊彌次「あかすかへお引(ト)にびるはづみにあんまに行きたる(あんま)アイタ」眼がつぶれらへら梅ゆ。あなまけんびきお引 焼酎買の聲焼酎は入ませぬか目のまはる焼酎を買じやいませ 北八「あいかげんに。こゝへ油多うか 宿や女」サアお道入なごへませ。おさんぜんお泊りだよ 宿屋の亭主「お早よう御座い升お連様はいくたり 彌次「影がじともで六人 亭主「へい夫はヤレちやア三太郎はいぬか。おゆを取てこい。お茶は煮へて在か。ソレ先風呂を一ツ上う。お飯も溜た。直にお道入なさいませ(此内三人共足を洗しまゆ直に奥へ通) 宿女「おゆにお召なさいませ 彌次「ドッお先へ参らう(ト)はだかに成でかけ出す) 宿女「モシモシはかうか御座い升。こつちらへ彌次「是は(ト)湯殿へ行く) 十吉「時にかのわらぢはへ 北八「床の間に置きた。のちに寐酒に捨て貰いやせう(此内彌次郎ゆよりあがる)と次に十吉ゆに入此宿の亭主問屋の下役をつれ帳面と矢立をもちいづる是は宿帳とて旅人の國所をしる事也) 亭主「御免下さいませ。かアお一人お風呂か。宿帳を附升あな方お國は 北八「泉州堺名は天川屋 儀事と言やす 亭主「へいあなたは彌次「私がへ披州山崎村與一兵衛と申やす 亭主「さては與一兵衛様とはあなたか。うけたまはよりあんだ。あなたのお探検本様はどうなさりました 彌次「勘平は三十に成やならずは死にやした亭主「ハア夫は力おとしおかるばは彌次「少し分違者でいやす 亭主「うして狸の角

兵衛様や。めつぼう彌八様は健かあなたのご近所で有た 彌次「さよう) 亭主「あノ又猪はごこに居られ升 彌次「ハア猪はごこだか 亭主「てんつる) てんつるてんは。ごう致じました皆) 亭主「イヤまづ御膳を上げしやう 彌次「いまく) けつ) あつちにあうばれた(此内宿の女膳を持きたりならへ置て) サアお上りなさいませ。コレヒヤア越たつ段よう。うこの飯櫃もつてきなごう 北八「時にこゝにや々しる物はなじかの 宿女「この間木曾海道退分から来た女郎衆が二人ござい升。お淋しいか。お呼なさいませ 彌次「こいつ面白からう器置は 宿女「がいに急い云でもござりませない。マア十人前でございます 北八「ハ、ハ、ハ、十人前の飯置が面白い呼でくんな 宿女「すんなら只今(ト云すて) 立てゆく此内十吉湯殿よりあがりきて(族十) あめへ方ア何かやばからぬお咄したね 彌次「主やごうだ 族十「イヤ私しやアノ内の女に少し咄合が有やす(此内宿女きたりて) 是は御女才で御座い升。サアお買なさいませ。モシ今のが参りました。コレお前ちやアこゝへ來なごう。ドレおかひに行すに(ト)女は立てゆくすべで此あたりより暖河遠州掛川あたり迄は行と云をゆかすといひ喰と云をくわすと云ふ頼てかの女おす問の影はのをいて立ているをひつぱり出る) やど女「サアサアきなごう) 飯盛お竹「アレサアぶとつてお升。すがいにしよびきなさん今一人の飯盛おつめ) どうせハアお出へいごこさ。出にやアならぬサアお竹さん) 出なごう(ト) やう) 二人乍ら出掛て来る一人は紺の木綿に鯛かたばみの紋の付たるを着て太織細の帯を(今一人は紺

から色の赤きいとの入たるたて縞の布子に是も帯は太織のきぬびらうをへに木綿のふんごじち
 らくを出しかけ黒きらはのきせるを手に持て坐敷へすわる。北八「サア、愛へきなせし時に
 女中臈はひいて酒にじやせう宿女「ハ、今に出升（ト臈を引でしませ）銚子盃をもちいで（宿女
 サア、一ッ上りませ）臈「アレ、（ト一口呑で下に置と女心にてお竹にさす）お竹「コリヤ、ハ、わ
 じにへ（ト呑まねをじて北八へ差北八呑でおつめへさす）おつめ「おたつ臈「アをりよげへだも
 し北「一ッ呑なせへつめ「わしらアはア。がいに呑じぬへ。ヤレとて此衆はがいは。おつめやると
 よ宿女「お竹さんお前ちのどこじやアみんなこりよう差て居の（トお竹のつむりに差てぬる銀
 ながしの五大力のかんざしを扱て見る）お竹「コリヤアお江戸でも流行けでの。わちらがこの
 金彌さんが野尻の彦十さんに買てもらたげエ。がいに自慢らしく内ぢうのものに。ひけらかす
 からわしもハアあの衆の差物をささないでもくやむいから。引すくで。からく二十四文うつ
 ちやつたアもし宿女「おつめさんお前の臈を見なさう（ト取にかゝるをいやがりて）つめ「おら
 しいやアだはく（臈をりむけるをむりに取て見れば朱塗の臈に金ふんにて抱若荷の紋か
 ついてある）宿女「ばあちやアコリヤア札の辻の太郎左衛門さんの紋所だアよ。おつめ「こつて
 うやだかやア（トひつたくり臈にて叩くまねをじてつむりへさす此二人まことに此間追分から
 きたと見へて是は皆つちの言詞なり皆くおかしさをかくじだんまりにて居る。こゝにもい
 うくおれどもおまりくだくしければ略す）宿女「もうおうなりなさいませ。臈「サ、サ、おわ

は次の間へ寝やせう。彌次「ナニサ、いつしよにこけへ。旅十「コレハめいわくな。宿女「サアお前カ
 も着替てきなさいまし（トよきふとんをはこびとて取る皆く蒲團の上におがりぬると二枚
 折の小屏ふにて間をしきる此内彌次郎が相方來たりて）お竹「モウ、へらじやうまじたか。が
 いに寒い晩だアナもし彌次「もつとこつちへ寄なせい。何も多ん慮はぬへからうと。斷じても
 しなせへお竹「わしらがようなもなア。江戸の衆にやア。こつばすかしくてなにも。かたるべ
 いこたア御座んなへもし彌次「ナニはすかじひも氣が強いお前もいくつだ。お竹「わじや、お月様
 の年だよ。彌次「十三七で廿才と云をか。でへぶおしやれたのお竹「サ、くくわじやア
 此ぢう追分さアから來て。是の所の客衆さアあじやうしたらよかんべいか。なほかじお江戸の衆
 にやア。きがつかつて成まじない。帯のう解なごうして。此正ア私が上へのつけなごう。彌
 次「くく。かうか。お竹「ヤレハアねづらぬこんだよ。うじてがいに跡へさがりやる
 ぞよ。もつと空へつん出なごう。彌次「サット承知（トよきをすつぱりかむりしはらくむごん
 此内北八が相方のおつめも來りて色々あれどこれもくたくしければ器す。早其夜も更行ま
 じに助郷馬の鈴の音もたへはて。宵月に啼犬の返吼。猪を追ふ鳴子の音迄吹れる夜嵐の身にじむ
 ばかり。行燈の油も盡で。いつの間にかは真くら闇（此時かのつとになし置たる泥龜床の間に並
 たるまゝ夫なりにわすれたるがやがてつとを喉やぶりをうくはい出さうくあるくに十吉目
 を覺し何やらんと考る内北八が夜着の中にはいりこむと北八ひつくり目を覺したれた誰だぞ

四十六條

に支度する内宿女「お一人はどこへ行なされた北八」ほんに十公はとうした彌次「大方雪隠だ
ろう先へやらかせ」トかまはずめしを喰初め十吉ははやいこの間にかうらみちよりに行きた
れバいくらまつてもくるはづはなし彌次郎あたりを見廻しふしきうらに「コウ北八。アノ十吉と
やらア何たらふ北八」されば彌次「ハテがてんのゆかね。アノ野郎が風呂敷包も笠もねへ。大か
たおいらが寝て居る内立てしまつたを見へる北八」ヤアそんなら何ぞ無なりやアしねへかト
うこら見まはし「何も別條はねへか彌次」イヤ〜別條が有ようだトふ所からとうまきを出し
振ふて見れば紙につんだやつが。がつたり落るあけて見れば昔石ころ「彌次」ヤイ〜北
八「とうした彌次」とうしたところか金が石に成てしまつた。エイ〜北八「こいつは大變〜
彌次」くやしひ今の野郎めにするかへられた。コレ女中御亭主を呼んでくんな。早く〜トむ
しやうにのばせかへる女はうふ〜立て行を此やうすを聞て宿の亭主ねまきのま〜かけきたり
「今受玉はりました緒〜」とんだ事で御ざり升彌次「イヤ貴様亭主だの。コレすまね〜ぞ〜
あんなごまのはいに宿をかすからにやア。こなたもうはまへを取らう。なせおいらにきたな
じに。先へた〜せた亭主」コレハけしからぬお連様を存て泊たので御座い升。今朝た〜しやたも
さつぱりしりませぬ。大方裏道からでも彌次「裏道からでもすまじい。そんなで行のじやアね
へは。なんでもアノごまの灰を出せ〜」コレ野郎を見そくなつたか。お江戸でも神田の八丁堀
でそこ面やの彌次郎兵衛様を云ちやア。忍ら〜。おれが近付の人に誰しらぬ者は。ねへは思〜ら

五十六條

「おやアがるぞ。家裏骨よを叩きこはして。合羽干城の地階に立のた。星元のあかるい内。サアご
まの灰めを爰へ出せサア〜だせ〜」亭主「是は御難題。さりとてはお氣の毒な彌次」ナ
ニお氣の毒の人丸様だ。イヤ四斗樽様がめされら。サア四斗樽めをこ〜へ出せ亭主「ナニ四斗
樽とは彌次」イヤ。ナニ四斗樽をがつてんで泊るからにやア。貴様も一ツ穴のぬだ亭主「是は無
休な。ナニわしらか四斗樽を拍ませう彌次」泊ねへ事が有者か夕べから今の先迄この内に寝
て居たは亭主「アノ四斗樽かかへ彌次」サ。サ。四斗樽。イヤ〜ごまの灰だ〜北八「コレ彌
次さん。マアしづかにしねへ。かはへうらに御亭主のしつた事じやアねへ。道連れにしてきたの
は。こつちがわりい。どうもこかたがねへとあきらめなせ〜亭主「左様〜是が私どもが内へ
御座つての相宿ならば。おつじやるも尤もだが何を云もい〜しよに御座つた者を。申さばお前
立の御座相と云者だ北八「途いなしさコレ。彌次さんおめ〜りきんでも初まらね〜どうもしや
うかねへはサ」トいはれて見れば彌次郎も成ほどと思たところがつまらす。ふさぎつてだんま
りで居るしまつかねば北八「彌次さんマア飯でも喰ね〜彌次」飯も喰ぬ。ナント北八。かう
だ府中迄いけばちつたアさんだんする。あても有から先一文なしで出かけやうト口かい錢の
錢をさつめてやう〜とど〜のはたを拂ひあせにわづかのはした錢の残りたるをたよりに。
うら〜と〜を出かけ道々も心がけてごまの灰の行をたづぬれ共一向しれす。しやれもむだ
も〜と〜平らた〜し〜とだだりまがら〜

北八「彌次さんうんなに力を落しなさんな高がこうだ
うき沈みある世は次第不動尊いのれるかいもなき護摩の灰哉

彌次「北八おらアもふ切主にでも成ない北八「おめへとんだ事を云彌次「いつう江戸へ歸へろ
うか北八「ナニサ歸るとか有もんだ。拾物を振てもお伊勢様迄行てこにやア。外分がわるい彌
次「夫でもモウひだるくつて歩行れぬへ北八「ハテ待なさい。こゝに江戸からとつかつてきた
十二銅が有から先へ行たら餅でも買て食なせへ（トいひつゝ二人ながらつゝゑにすがりうらつら
らとゆく向より狀箱をかつきし人足「エイとつき〜北八「何だ。野郎の草駄天様を見るや
うに。むちみとかけてきやアがる彌次「ア、うらやましおあんなにかける。いきはいだから定め
てお飯もふんだんに喰だらう北八「エ、おめへも乞食じみた事を云ものだ（御狀箱人足「エイと
つき〜北八「ソレあふねへこつちへ寄な人足「エイとつき〜（ト通りすがひに御狀箱の角
で彌次郎が小びん先へがつたりとあたる）彌次「アイヤ、〜（人足はいさいかまはず）エイこ
りやア。さつき〜彌次「ア、〜いたい〜何の因果で。こんな目にあふか。おらア死に度成
た北八「エ、馬鹿ア云なせへソレ馬がきたア彌次「馬士とん。先の宿迄はまだよつばさ有かの
馬士「ナニセつきにうごたア。彌次「いくら程有へ馬士「たつた三里廿四五丁も有だんべい
彌次「ハッア、（と段々たどり行程に頓て釜が淵と云所にいたりてかゝる中にもすきの道をて

又一首口すさむされ共歌も其身の苦きまよふればは
名を聞てはしや小金の釜が淵。口に孝行したき故にわ
此所にて餅などとのへ。少しは腹の虫をやしなひ。たがひに力を付合咄しものして漸々沼津の
驛につく。こゝにて先足を休めんと宿外れの茶屋へ遣入茶屋女「お早うる座い升チヤ。お支度で
もしなさいませぬか北「イヤ跡の建場でうんといふはと喰て来やした（此内兩掛を人足にか
つがせ供を運たる侍お國ふう大たぶさ。木綿を片面に染たる小紋のふつきき羽織を着たるが此
茶屋へ遣入）茶や女「お茶上りませ侍「もう何時だの茶や女「ハイハッでも御ざりやしよ侍、
よい酒があらばちくと出しなさら茶や女「ハイ〜三十二文の上ませうかやア侍「今すこし
下直なのはなんぼじや茶や女「廿四文のも御座い升侍「しからば。ソノ廿四文の酒と三十二文
の酒と等分に割て一合五タヲだしなさら茶や女「ハイ〜（ト勝手よりちろり盃を持来たり魚
の表付などをいだし侍「コリヤ〜此表付よつた。肴どもの價はなんぼじや茶や女「卅二文で
御座い升侍「こちらは茶や女、十二文侍「ム、よい〜コリヤ傳助わごりよも一ツ飲やれ供
傳助「チイ侍「コリヤ向ふに火を焚よるおな子供は奥田氏の内室によく似よつた供傳助「い様
こちらの今笑ひよるおな子なども能ようで御座升侍「それか〜ウ、アノ柱のぬきに。横たわ
つて居おな子がよい〜。げア傳助今すこしする飲でしよへ供傳助「チイ〜侍「勘定の致ろ
う何ぼじや。コリヤ〜此魚どもは手はつけ無ぞ茶屋女「ハイ〜四十二文で御座い升

十六 膝 侍、よいく(ト供の者に拂はせこゝを出かける北八彌次郎は茶まら香で(あがり)北八) 八 跡になり先に成て色々咄し運てたどり行くにならの坂といふ所にいたり千本の松原にて北八が こじ付るうた

この景色見ては休にやならの坂。いざ煙草にや千本の松。

(侍此歌を聞てかん心し)ヒヤアでけたく。お身立は江戸者だな 彌次「左様で御座り升。私どもは夜前の泊でこまの灰に取つかれて。大きに難儀を致し升侍」ハア夫は近頃氣の毒じや。成程こまの灰のさしたのはいたかろう。北八「イヤこまの灰と申は。どろ坊のことで御座り升侍」どろと何じや 北八「ハイ泥棒と申は盗賊の事で御座り升侍」ハ、ハ、何か人の物を取よる盗賊の事を泥棒と云か 彌次「左様で御座り升侍」ソノ又泥棒をこまの灰と云じやナ。成程解せたられて。しましはしたから大きに難儀を致し升。府中迄参れば。いか様共致し升が夫迄の所にこまり升。底で材は身の差合せとやら。どうぞ是を賣さう御座り升が。お買なさつて下さりませぬか(ト腰にさげたるいんでんのきんちやくを出しみせる)侍「ホウ夫は氣の毒途中で物を求めるは如何難かお身たちの難儀をあらば。求めてつかはらう。あたいな何ばじや 北八「ハイ。三百位に差上ませう。侍」夫は高直じや 北八「すこしはおまけ申ませう 侍」然らばうの市若共のあたひな

カント六十文の遣うふか 北八「夫はあんまり侍」六十一文の遣うふか 北八「もちとお買なさつて下さりませ 侍」しからば六十二文の遣ふか 北八「イエどうも 侍」左あらば清水ナウ舞臺もから飛だと思ふて六十三文の遣はふか 北八「イヤもうらんなに賣文ッ、お買なさつては御相談が出来ませぬ。こう致ませう丁度にお買なさつて下さりませ 侍」ヤア丁度とは何ばじや 北八「ハイ丁度と申は百に近づきました事を丁度と申升から。百文なら差上ませう 侍」ム、百の事を丁度といふか然ば丁度にもとめて遣はうふ 北八「夫は難有御ざり升(ト巾着を渡し百文とり) モシ是は安い物で御ざり升。捨置にしても根付ぐるみでは。四五百が物は御ざり升侍」イヤ身共俸共が兩人罷有が是は惣領への。よいみやげじやとて 北八「ハイおなははまだお若うお見へなさい舛にお子達がお二人とは。よいお楽しみで御ざり升無つけながら。もうおいつで御ざり升侍」あてにお見やれ 北八「ハイおなははコウト三十七八にもお成なされませるか 侍」身共當年己の年で四十二才にまかりなる 北八「夫はお若う御ざり升侍」コレハ御挨拶しかし身共相役の團原作之衛門。米木津甚太夫など。皆同年で罷あるが其内で身共がいつち若へくといふあるて 北八「さやうで御ざりませう 侍」夫に又家中内の若へおな子どもなぞが。身共が事を澤村宗十郎に似て居ぞと申す 北八「ハ、ア成程 侍」時にお手前はいくつじや 北八「旦那あてなごつて御ざりませ 侍」ムウお手前年なコウト廿七八にも成るか 北八「イエ丁度で御ざり升侍」ナニ丁度アノ百か 北八「イヤ是で御ざり升(ト眞二本をいたす) 侍」ヤア三百に

十七 膝

は若へ男だ皆々「アハ、ハ、ハ、ハ」(此所にはぎれてあゆむ共なしに小諏訪大すはを打過程なく原の宿につくこゝにて連の侍にわかれて)

未だ飯も喰はず沼津を打すきて、ひもじき原の宿につきたり

北八「エ、お目へ又うんな。しみつたれを云は今の錢で蕎麥でも喰ふべし 彌次「ソリヤアよかるふく(ト蕎麥やへ這入)北八「ナイニ膳敷升うばや「ハイ(ト頓て蕎麥を二膳出す)彌次「太い蕎麥だ喰でが有いしはへ北八もう一杯替ようか 北八「イヤもうようう一度きに錢を使てはならぬ又先へ行て何ぞやらかしやせう。うば湯でもおもしろいれ香なせへ 彌次「うんなら若者湯を一ッくんな蕎麥や「ハイ(ト彌次「ア、うめへへ北八香ねへかチイ(トもう一盃くんなチット(トアツ(ト口を焼けた。あんまりあつ。どうぞ蕎麥をちつと。うめてもらいてへもんだ 北八「コレ(ト若衆度々氣の毒だか薬を香からもう一ッ湯をくんな蕎麥や「ハイ(ト北八「コレたつぶりだよチット由しか私しが香薬はしたじの這入た湯でなければ。きかねへから迎もの事に若衆したじをすこし差てくんなチットよ(ト餅の水を香よふにぐう(ト香で)チア行ふ 彌次「でへふ心が儘に成た

今くひし蕎麥は富士ばど山盛に。すこし心も浮島が原

夫より新田と云る建場にいなる。爰けうなきの名物にて家とにあききたてるかば燒の匂ひに二人は鼻の先をびこつかして

蒲燒の匂ひを嗅もうとまじや。こちら二人はうんなぎの旅頓て元吉原を打すき柏橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見て裾野第一の絶景なるをみて取あへず

途地の名の柏橋とて旅人の足をさすりて休みあれ

やがて吉はらにつく。棒はなの茶屋女共。いづれも黄色なる壁(ト休みなさいやアせ酒をあげりやアし。米の飯をあげりやアし。こんにやくと葱のお吸物もかざりやアすおやすみなさいやアし籠かき「駕よしかな馬方「チイ旦那衆おまアとうだ。戻りだから安い 彌次「今迄乗詰に乗てきたからちつと。是からひろひやせう。ころびやせうがきいてあきれらア(夫より此をばづれにやふれあみ笠をきたる浪人者とおぼしく扇を持って)ウタイいざ(ト酒を香をよ儲お肴は何々ぞ頃しも秋の山くさ桔梗かるかや。われもかうしたんと云は何やらん。道中にわづらひまして難儀を致升何ぞぞ路錢の御合力を願升 北八「イヤモウわつちらア。夕べごまの灰に路用を取れて登文なした。どうぞもらい溜があらばこつちへ御合力願升 浪人「うんならコレつくなく(ト早々に行過る二人もおかしさ打笑ひつ。たどり行に村はづれに小屋掛けして觀音様のかけじを掛麻のやふれ衣を着たる坊様の睡りして居たりしが旅人を見ると俄かにりんを打鳴し(觀音經(妙法蓮華經普門品第終多聞 世間子息大分遊興每晚三味線。音曲滅多無正夜前大食翌日頭痛八百羅利古炊笑止千万近邊醫者早速御見舞 關合煎藥香多良久多良腹強多心經マイン(ト鼻の下

一十七 膝

二十七味

空殿の建立お心ざしをお願申升 北八「お経がおも白へから寄進に付やせう 坊主「ハイ夫は御苦
勞ふ名を記しませう 彌次「うんなら彌次郎兵衛ト付なさい 坊主「ハイ俗名彌次郎兵衛彌次「エ、
まだ死やアしねへはナ。坊主「ハイまだ死なしやらんか。イヤ是はお心ざしの戒名を記し升 北
八「チイらんならうけへ書くん。釋の急難取つめた佛果菩提の爲ソリヤ堂文（トなげ出して行
過る松原の中程に十四五の前髪土手を崩して樂懸掛菓子など並べ遊六片手に旅人を呼たつる）
お休みなませ〜 北八「サア彌次さん菓子でも喰ねへか 彌次「テト休まり（ト土手のうすべ
りの上へ腰を掛け二人ながら菓子をしてやり 北八「子僧此菓子はいくらづつだ 子僧「アイ貳文
ツ、彌次「五ツ喰たならいくらだ 子僧「わしはいくらだかしりまじない 北八「うんなら。こ
ろ五ツで二五の三文か。コレ〜に後ぞ 彌次「ヒヤアこいつは安い物だからも一ツ喰はう。コ
リヤアいくらだ 子僧「ソリヤア三文 北八「ドレ〜むめ〜 子僧先の錢はすんだぞ。跡の菓子
を四ツ喰たから三四の七文五分か。ニイは五分はまけろ〜 彌次「イヤ餅も有な 北八「それこ
いは味へ此餅はいくらだ 子僧「ソリヤア五文せりよ 北八「五文ツ、ならこつと二人りで六ツ
喰たから五六五文ソレ遣るぞ 子僧「イヤ此乗はモウ應却記じやア買まじない五文ツ、六ツ
喰なさう 北八「ヤア〜 錢が有かしらん 子僧「こ〜へ出なさう一ツ二ツ三ツ四ツ（ト五文
ツ、一ツ〜にかぞえて。めのことさんやうにひつたくられて） 彌次「こいつは大笑ひだ 北八「ど
んだ目にあつたサア行ふ（ト立上四五間も行過） 北八「ア子僧は知才のねへ奴だ。アノ餅が。ナ

ニ五文取な物かニ文か三文の餅だろふに。高買してよてのうんをうめやアがつた彌次「いま〜
しい今喰た餅がのどにつまつたケツ〜（トおかしさ半分子供とあなごつて直にむくつたど打
笑ひたどり行く） 夫より久澤の善福寺と云へるに曾我兄弟の石碑あるをおがみて北八
「いま曾我に奇縁を結ぶ我〜は。外に一家も一文もなし

富士川の渡し場にいたりて彌次郎兵衛

行水は矢をいゝる如く岩かきどに。あたるをいとふ藤川の船

北渡しを打越けるに早日も西の山の端にちらつき。おのづから道急ぐ馬土唄の竹にとまる雀色
無やう〜 蒲原の宿にいたる。此宿の御本陣にお大名の御着を見へて勝手は今膳の出る最中。北
八うどよりさしのをきてコウ彌次さん鳥渡風呂敷包を持って居てんな 彌次「どうする 北八「イヤ
ちつとの間だ（ト彌次郎に包を渡し御本陣へすつとはいり勝手のをさくさの中へ上りかたすみ
の方に居ると本陣の女だん〜膳を持はこび大せいへすへると 北八「チイ〜も一せん女」
ハイ〜トすへかゝるこんごつの中ゆゑ人も氣が付ぬゆゑ北八思ふさま喰てしまひ。すきまを
見て手ぬぐひを胸に盛たる飯を一膳やつと打明け手ぬぐひに引包み頼てう〜とにげ出
まごつく内彌次郎は向の軒の下にまちたいくつして北八が 北八「チイ〜 彌次「どこへ行た北
八「エ、おらア飯を喰や。奇妙か 彌次「エ、そこで 北八「本陣でさくさまされに五六ばいやら
かしてきた 彌次「ソリヤア。いゝとををした。しかして前も質のねへもんだ。なせおいらも連いか

三十七味

四十七

ないかねエ、北八「イヤあめへにみやげを持てきた」ト手ぬぐひに包し飯を出す。彌次「何だ飯か有がてへ。イヤ中々手ぬぐひがきいてゐるはへ。ア、うめへ〜」ト残さず喰てしまいかの手ぬぐひをふるつて「イヤ是は手拭に包で来たな。エ、きたねへ」北八「ナニきたねへ物か」彌次「夫だ」とつて手前の金玉や何かを洗つた手拭た物を、ア、おねがわるい。ベツ〜北八「ハ、〜」時に宿はづれへいつて木賃を出ようト「打つれて此宿の棒はなへ出るこらあたりをまご〜して」彌次「コウぞうぞいきな女のある内へ泊てへ」北八「ナニ木賃で泊内にいきもひやうたんもある物か。ハテぞうぞうかかれねへ」トあつちこつちの内をのぞきあちく軒下に寝て居る犬の足を踏て大さば喰つかれ」北八「アイ、アイ、大キヤン〜」ト「すし買の聲」鯉のすし喰のすし北八「コウすし屋さん。こらに木賃宿はねへかのすしやア、オイ向のこつばじの内よ」彌次「ア、お世話」トおじへられたる内の門口から北八「オト御免なせへ」トすつと這入見れば疊の四五疊も敷かれようといふ内にて佛だん一ツやふれつら一ツのじんだい。あるじは七十近き親仁。いろりのさわねあらしをなつてゐる。じざらにて。つるこもある。鍋に何かぐつ〜煮るうばに。六部が一人順禮二人一人は六十余の親父。一人は十七八の娘おひづるをきたまゝあかされたらけの足をのびし火にあたりてゐる。此家の婆々ア松の枝をへしおろりへへなながら。こつちへ這入らしやりませ。北八「わしらを令や泊てくんませへ」親父「あがらしやりませ。ソレをこに水が有なようゆすぎなさう」足を洗ひながら北八「彌次さん見ねへ〜」順禮が泊て居る。彌次「キニ。こらこ

五十七

只はおかれぬ。ひだるい時にやアまづい物なしだ」ト笑ひ足を洗ひて上へあがる。六部「サアこへ来てあたりなさう。北八「コウ彌次さんもつとろつちへ寄なト」娘のうばへ割込ですわるあさじの婆々はいろりの鍋をあろじば〜」サア粥ができた昔な喰なさう。彌次「ソレハ。あつたか」でよかろう。婆々「インチこんた衆のこじやア御座らぬ。コリヤア此衆の粥だアよ。順禮「イヤ今日もらつた米ア。しいなばつがしたんと有てをこして半分は石ころだアのし。こりをチ喰たら腹がおもたく成だんへい。婆々「六部さんのも三合ばかりやア。有だんべい。うこへ分て喰なさう」ト此内順禮六部もてん〜に碗を出し盛て喰内。だし合の米なれば彌次郎北八た〜見てゐる斗手もちなくつて煙草入の底をはたく六部は頓て喰しまい」二人のお衆は定めじお江戸の衆たろうか。おし共はお江戸でてんこちもない目に達たアもし。彌次「どうしなさつた六部」わしがハア。此六部に成た因縁のう。詰り申へいか。ヤレ倍人と云者なアはア。運が無ちやア。もち上へいにも。あんとしてうなづきやア上り申さない私がハア。若い時分にお江戸に居申たが其時あんでハア。夏のとつ〜きから。秋へふつ掛て毎日。〜つなく風の吹たとが有申た。其時分ハア。あんで金もうけのウ。すへいとつて色〜着さア。ひねくりまはしてをつけもない。を思ひついたアもし。彌次「はての六部、イヤサ箱屋をおつばしめ申たは。あにが箱だアの。箱箱だアの色を箱共を。つなく買こんで賣つてもだアもし。彌次「ハテ風が吹たによつて箱屋をばどういふあんたの六部」されはさア。私しがア思ひ付にやア。あにが箱屋い日〜。とひやうもない

六十七歳

風が吹て。お江戸では。がいに砂ほこりがたちますからおのづと人さアの目眼へ砂共が吹込で
眼玉のつぶれる者がたんと出来るたんべいと思つたからうとでハア。私しが工夫のウとして。せ
けんの 俄首が外にあせやうせうとはなしみんな三味のウ習はしやるたんべい。ううするど三
味線屋共が繁昌して世界の猫共が打殺されべいからうとで鼠共がづなくあれて。あんでも世間
の箱共のウ。皆なかじり亡すべいたア目の前だアもしコリヤハア。こし箱屋商賣のウ。お
ッ初めたら買れべいたア遠いはないと。あにがハア。身上あり切箱共のウ仕入たと思はつしや
い 彌次「コリヤアい、思ひ付た大方賣やしたらう 六部」イヤ一ツ毛賣まじない。うとで私しも
ハア。是れ迄に工夫のウとして。せつびまうかるべいと思つた事ははづれ申たから。しよせんハア。
あじやうしてもいか無こんだ。發起のウとして。六部に成申た兎角世界は思ふやうにヤア。なら
ないもんだアもし 北八「ハア。心なほ咄だ時に又順禮さん。おめへはどふ云事から思ひ付て順
禮にヤア。出なすつた順禮」コリヤハア私しも序にさんげ咄のウ。しますべい。此娘はコリヤア
ふどりの孫で御ざるが。わし共はハア。かはつたこんで佛縁のウ。結び申た。わたしは日光の方で
御ざるが。定めて夫とままだと。咄に聞て房やり申すたんべいが。わし共が國などは雷が澤山で
此二十年斗りも跡のどで有申たが。ふと夏でかく雷が鳴申て。わし共が唇口さアへ。おつこ
ちたと思ひなごう。ううするどハア。其雷殿が榎木の株つちいで。でかく尻をうち申て。疝氣
がもつた。と。わさやると。あにがうとで天竺のウへ。歸るべし事も出来なから。わし

七十七歳

其の内で養生のウして居る内。恥アかたり申さじやア。理が聞へ申さないが。其雷殿が私共の娘
と。がらいねんごうのウして。たがいハアはなれべいよふすもおさんないから。直に其雷
どのをむてに取たと思ひなごう。底でハア天竺の規方殿から夕立の時分は 手傳てくれろとつ
て。夏中はたのまれて行やり申たが。ふと夏土がたさアへかせぎに行くとつて出たなりけりて
誰らぬと思ひなごう。あまつさい其時わしが娘はあつぱらんではめるし。あにがハア案じをる
まい事か。大かた。きこつてつて腰骨が。ふんぬいて煩つて居るたんべいと思つたば
かして使聞べいにも。あつてつのはう也。コトヤハア。あんなるこんだと思つて居る内友達の雷殿が
来て。是のもて殿はハア。熊野捕へあつこちて鯨よ。がらゝ呑れたとの咄しヤレ。倍悲しこんだ
と娘も泣やる。わしもハア片脚のう。もがれたやうに思ひ。おろましたが。あんとすべい。せう早
がない。そんだいにヤア娘が。おとなり殿の種をおつ孕んだから鬼子でもうみをるべい。夫がは
ア親雷の跡をつかせいと。楽しんであんで鬼の子を産ようよと。氏神様へ願のう掛て祈た
所が因りなこたア。生れた子が此娘で伊座り申。そこでハアわし共も力のウをとして。これ程
祈たのよ鬼の産す。しかもこんなよまん足な人間の士を産と云はよく。な因果だとあきらめ
て罪亡しにこりよをつれて順禮と思立たアもし。わし共は因果な者ア無と思やア咄しよサそ
るさへ。胸が潰れ申は(ト涙ながらに嘶す内ハア夜ふければあるじの婆が夫へねわざなご
めてがいて)「アヤア昔なごべらしてやいませ内が。がいにせばいからわまを順禮の女の衆は天

順禮も共々口を添へて漸々とおさまり北八も浴衣一枚置まらなして天井のつくろい貸少少出し
さらりと済ませまいければ程なく夜が明て彌次郎北八はとうとうに此所を立出行道すがら彌
「北八へおぶぶぶのウ。小田原の泊は水風呂の底をぬいて二朱ふんだくられ。又夕六は二
階をふんぬいて三百とられたも。ちへがねへ夕北八「イヤ面目してへもねへ。いま〜まら
一昔よんだ

順禮の娘と思ひまのびしは。さてこそ高野六十の婆々

彌次「ハ、ハ、ハ、夕六戸まきひの云時をかしかつたが。ふんごまを鼠に引れたとは。いひこじつ
けた。イヤ夫で一ッ咆をあんじたがさうだ。北八「コリヤ面白へ聞てへの彌次「まづさうだ夕のよ
うに順禮や六部と一所に木賃泊をまやした時手ゆめへが夜中におきて。何かまてつぎやす。そ
するを替なが目を覺して。コリヤおめへ何をしなごまを云てゆめへが云「イヤわしてふんごし
を鼠よひかれやしたたか。二階の方へ引ていつた様だと云。順禮も六部もそつ云なされれば。
わしも枕元へ置たふんごしが見へぬイヤわしがの。こへ置たがない。コリヤ 替な鼠に引れ
たもんだらう。なんでも二階へ行て見やせうと。皆建立て階子を上りやす。さうすると二階の角
のほうで。三味線の音がする。イヤこいつはふじさだと上り口からすかして見れば。鼠共が大勢
奇て背のふじさしを廣げて見て。一疋の鼠が云「はあらがひらてきた六部のふんごしは振う
と三味線の音がする。さうしたとたやらがつてんが行ぬと云ながら。其ふんごしを口よ〜わへ

て振て見ると成程チ、ハ、ヤ〜〜なごとなりやす。うとで又外の鼠が云には六部のふんご
しにかきつて。三味線の音がするもふじさだ。物はためじ。おいらが引てきた順禮のふんごしを
も振て見ようぞをなしく口にくわへて振うと是もチ、ハ、ヤ〜〜と鳴やした。こいつは妙だ
と。又一疋の鼠が。おれば北八とやらいふ。男のふんごしを引てきたが。コリヤア越中だから短
い丈で動弓の音がするだらうと。くわへて振て見ば。ツ、ンツ〜と替太夫三味線の音がし
やすうとで鼠共が。こいつはふじさだ六部や順禮のふんごしは。皆かわいらしい唄三味線の音
がするにま。北八とやらがふんごしは替太夫三味線の音がするだらうと云と角つこの鼠がし
ばら〜考〜リヤア其替だはへ。ナせうの替だ。ハテ北八とやらは大かた太棒だらうよ。北八「ハ
〜〜〜奇妙〜〜（ト此咄のうち油井の宿につくと兩側より呼立ること。茶や女、お運入など
やアセオ物種精餅よを上りやアせしよッはいのも御座いヤヌお休なさいやアせ〜 彌次「エ
、やかましい女どもだ

呼たつる女の聲は髪うりや。さてこうこは髪由井の宿

夫より山井川を打越倉澤と云る立場へつく爰は鮑螺貝の名物にて饅人直に海より取きたりて商
ふ爰にてしばらく足を休めて

夫より藤定時を打越たよりゆく程に俄に大雨降いたしければ。半公羽打が二さ笠深く片かけ。各

二十八 におふ田子の浦清見が關の風景も降うつみて見る方もなく。砂道に踏込し足もおもげにやうや
く興津の陣にいたり爰にあやしげなる茶店に立寄 北八「チイ婆アさんソノきな粉をつけた團子
を二三本くんなせへ 彌次「借く久しぶりでお目への顔を見たいはいつも達者で目出度。とき
に。此子はちいさなとき見たよりかア。大きく成た姉様は達者かの 婆は「わしは子供はお座ん
ない 彌次「うんなら孫か 婆「インナ子か なげりやア孫もお座んない 彌次「ハテナお目への孫
でなげりやア健どこのか孫で有た 婆は「インナ馬士じやアおさんない隣の親屋の子でおざるに
彌次「ハアううか。コウあの子團子がニツ余つたソレ喰な 親屋子「うらやアだ 彌次「ナせいや
だ 駕や子「ナニ親アつけた團子はやアだ 彌次「ナニ親をつけた物か。コリヤきな粉だ 婆は「イ
ン子私らがそこじやア親アつけて賣申 彌次「エ、どうりで。さうくすると思つた。メツくう
んなら犬にやろふ ヨイくく 犬わんくく 彌次「コレヤ「やるはあんといへ 犬ああん 彌
次「ア、おしいもんだ（ト残らず犬にやつてしまし胸をわるくしてこゝを立出たさうり行になほ雨
はしきりに降り續きて一向しやれも。むだもいではこうたいとぼくをさゆみて程なく江尻の
宿を打過けるにこゝにてあめもはれて）
降くらし富士の根を打過て。江尻に雨の霽あがりたり
雨やみたればおのづから行かふ人の足もかろげに。からしり馬の鈴のおさもいさまじくシヤン
くく 馬方「よんベナア。このんだらアエ。おさんごなア。まづいイせさねていたから。ら

よなべの飯がすすぎて。つふしたア、へ引エ、此はてつばらア又バりをこきやアがる。序でに
うらもやらかすべしシヤアくく（先へ行馬方跡をふりかへり）次郎ヤイ。はしが馬アだが
おまだ（跡から行馬方）コリヤア下町の酒屋のおまよ。彼所の野郎めが。がいに無上。つかやア、
がつたんで。おまア強氣。さんにやうも清水へ四くら行て歸るを役が當つて府中迄をつばしらか
したア。駄賃は皆んなうらが呑でしまつてから。おまに喰せべし物アなし。丁場の脊戸につない
ておいたら。雪隠の家によチ。がらく皆なくらやアがつた（先へ行馬方）アノ酒屋の女房めは。し
よつばいやつよ。うらがあして居る時分にやア飯の中へすきを交て喰しやアがつた。夫にあ
んだかハア。うらを見るをむせうに字を書習へのイヤ。舞盤をかぢられの。といろくな戯言を
。つきアがつてうらをあしての作頭仕よう。いやアがつた其手を喰ものか業さらしなドウ
く 北八「馬士ごん火をかしてくんせへ 馬方「マイ、お前ちヤアお江戸だな。お江戸衆は氣
がづない。おんによ。うらが府中から江尻迄二百でのせた且那がお江戸衆でゑい且那よ。長沼
迄くると其且那が云にやア。江尻迄三百じやア安いから酒手を二百にしてやろう。其代酒はべ
つてつちから買て呑せると。小吉田の的場。たらふく酒を振舞しやつた。夫から又云しや
るにやア。コリヤ馬士。主やア一日かまを引てあゆんで草臥たろう。是からうらがかりて。に
しを此おまに乘せよう云はしやる。コリヤハアあんなこんだ。うらア乗てたアやアだ云
ても聞ない且那よ。せつびうらに乗つて。うんだい乗賃を二百やろうと梅の木立場からと

う／＼うらをばい乗て江尻へくると。興津迄かま取のなが草臥たろうから。あまあをつたふんで駄賃やろうと又二百下さした。あんなるい且那はめつたにやアないもんだ。一咄の内此馬に乗て居る旅人馬の上にてうらいびきをかく。ユウ／＼馬士、サイ且那あふない。目を覺しなごろ(旅人かこされて目をひらき)馬が癖があかぬから乗あけが出た。昨日三島から乗た馬はよい馬でもつた。うして馬士がとんだ氣の能男よ。三島から沼津へ百五十でねをして。乗た所が馬士が云には且那は。こんな早い馬に乗て今に隨ようか。イヤめつたにぬふりもならぬなご心遣して居しやるだろう。夫が氣の毒だから駄賃はモウもらい升まいといひある。夫から三枚橋へくると。且那に馬のくらで腰がいたみませうとをかりてか休なさい酒手はこつちから止ませうと。馬士の方から百五十くれて。沼津へくると。先の宿迄。送てあげたいが。わしが馬ははね升から外に馬は取て乗ていかしやれ。駄賃はわしが懸せませうと。又百五十たいくれたりあんな氣のよい馬士も無もんだ。一断の内此馬をひく馬方あるさながら。ユウ／＼ムニヤ／＼(此断に彌次郎北八も大きにけうに入り歩む共なしに府中の宿につく先傳馬町に宿をかりて夫より彌次郎がしるべの方へたづね行と爰に金子のさいかくと一のひ大きにいさみ出して宿へ歸りなんでも今宵は豫て附かよびし阿都川町へしけてまんど。北八も共其したくをして宿の亭主をまねき) 彌次「モ御亭主わつちらア是から二丁町をやらへ見物に行てへもんだが。さつちの方だね 亭主「阿都川の方で御座り升北八「遠いかね 亭主「爰から廿四三町か



しも有升何なら馬でも雇て上りか 北八「こいつはい、彌次「から尻に乗て女郎買もかもしろい、頼て爰より殺死馬に打乗行程に。かの安倍川町を云るは安倍川彌助の手前にて道筋よりすこし引込で大門あり柱にて馬をかり廊に入て見に兩側に軒を並べて引立るすがいさの聲賑しく見せつきのかもむきは京都の吉原町にかほよう似たり。客をかばしさが馬き木綿に紋の付たる羽織を着て手拭の先を結すしてかぶり。送りゆく茶屋の女は焼杉の駒下駄を引ずり。客人の神と見へしは、多くは股引草鞋にて何れも祖父にじよりなり。うり手やいに前垂掛の腕あれば棒の先に。もつこうなご。くしり付てかつき歩行ひやかし有。行てふ男女は開帳参の人の如く更に風俗定らず。又繁昌は云斗無(向方来る地廻を見て

膝肩の島から替りたる。さてらを見て山たしのしくき角下駄に竹の皮の鼻（鼻をはき晒の）手拭をい首にかぶり往來の人に往當りて「あんだイコノ。御ぢいは眼をはたけて通りやアがれ。六あせおれにぶつゝかつた（跡からくる地廻り）イヤ市イあんとした。そいつへこたらしてやらすい（之はへこませると云が如し）先の相手」開がりてツイから行合ました勘忍なさい（ト行通る夫より此手合格子先をのぞき）地廻アノ壁のきじに居る女のつらは磯間様の天の面のようだ。アリヤ立て行ア。せいのみじかい女郎だ。梶原のおまが喰た笹葉を見るように半分しかアうだ。ないは（今一人の地回り）この内の着物はみんな七軒町の覗ふたのようだナア（此梶原の馬が喰た笹の葉と云は。狐がさきの梶原堂の故事也又七軒町の覗ふたと云はきじろ色に油煮の書である駿河細工の覗ふたの事も着物の摸様を油煮に見たてのしやれ成べし）彌次「ナントぞこぞへあがるふ。北八」まちなよたじかにこゝは壹分と拾分と貳朱だけな。壁の方にしよう。大方拾文目たるふ。向の暖簾は何だ信濃屋こちらが丁子屋こゝが大和屋だ。しかしどうして上るのだか勝手がしれねへ（ト格子先をうろついで居る内容人一人り上るを見すまして）北八「よしよしッア爰にしやせう彌次さん見たてねへ。彌次」ナットきまつたサア上ろう（ト連立て）と暖簾の内へ這入と若者（是は能お出なさいました。先上へ）（ト二階へ案内する二人は見立た女郎を注文すると直に其部屋へ連て行あたりを見れば床の間には琴も有り花も生て有給て吉原小見世の部屋持の如しこゝは酒代別に掛るとみえ若者（御酒はどう致しませう北八）酒も出して貰な若

者「ハイ」とつて上ませう（ト此内彌次郎が相方名は小笹野。上田の小袖。縞縞子の帯。空色縞緋の打掛。北八が相方伊佐川。縞縞緋に金もうるの帯。黒縞緋の打掛。何れも皆紅裏也。坐に附と本地色の煙草盆をひかへて）小笹野「よく御坐いましたいさ川」エ、見たくでもない。アノがきやアまだ煙草も入ない。ヤア小さめヤア引。彌次「サアお目へ方。最とこつちへ寄なせい。若衆河を早く。若者。畏まりました只今（トいひすて）ゆゑ程なく盆の盛でうし覗蓋を持ち出し。か定まりの盃も夫ゝに濟でしまし（彌次）若衆「ツ香な。若者」ハイ。彌次「ツレ肴ト南條一ツはづむ若者」是はハイト（観き立て行き入替りてかむろ小さめ駈て來たりて）かむろ「アノヤ。今吉澤屋から磯次さんがおさいますして。お前に用が有升から。ちよくりささじやめなしとさヤア伊さ川今行すに小笹野「アレ小雨やア久能の仙さんはおさつたか。小さめ」インチ。小笹野「はあチャ。おちやだやア。こんぢうから行すゝゝ」と云てよこして。がいに人をつるくるヤア。北八。コウお目へ方ア。もつとこつちへ寄て一ツ香なせへいさ川「アイマアお前方あがり升（此内若者二人とやりてが連立八寸の上は何か重箱を乗持出）やりて「たゞ今は有難座坐り升若者。私金太と申升。是は權右衛門已後は伊勢中升（トていねいに禮を云て立）彌次「ハ、ア爰では花もひッぱらにもらう極とみへた若者に金太權右衛門と云名もめつらじい。北八「コノ重箱は何だ。ハ、ア阿部川の四文取か。是が二朱の返し。記の宇屋の盛と云物だの。ッゝゝゝ（ト此内廊下に何かさはがし大勢の聲にてすむのすまぬのとわめきて隣坐敷へ皆々這入）北八「うんゝゝゝい何だい

「川」何でもか坐りまじない。ア、リヤア性の悪い客衆をめしつけて。運ってきたのをか坐り升やア測次「こいつはかもしるい。ヤレ〜」トふす間を少し明て隣坐敷をのぞき見れば夫勢の女郎が客一人を中に取巻（女郎）か前此中からこつちへはなせきまさない（今一人の女郎）丁字屋へばかり坐るから。とて夏さんが腹ア。こつたつも無理じやア坐りまじない（此客人は山家の人ヤレ借わしは。ハイ一昨日も昨日も来す〜）と思たが。がら。用が出来てこられなくなつたッリヤアア丁字屋へも川鍋の伯父殿の附合で行すたア行たけれアニハイ衆の常夏あんねへどすかはしたたア有し。日天様掛て不味心じやアかざらないヤア女郎「バあチヤ。夫でも丁字屋の花山さんに馴染で行すたアちがひはか坐りまじ無〜」客「アニハイうんたてたア無こんだが。さうさう云々アせずとが無〜」トしをれかへつて居るここの内の姉女郎名は常夏打掛をつまみ上げ烟管烟草入を持添ゆう〜として坐敷へは入常夏「彌弟さんこん中から合まじないが誰かあつた客」よかアきまじ無。堪忍なさう常夏「何もかんにせずたアか坐りまじないわしもハイ。此内ではあんねい〜」と云はれる女郎でか坐り升。こんなア顔面をへつつぶされちやア。はうばい衆の前へ。立す様がか坐りまじ無逆も。ハイ是れ切の縁なら。か前ちの様な性根の悪い客衆は規せじめの爲わじがせずとを見まじしやいませ。ンレ夏菊さん先刻の剃刀を持てか坐りまじ客「ヤレうりやア。わじもさうさうと思て〜」とて夏「どうせすもんか。髪を切らずにヤア」剃刀を持て立かれば客はうろたへたたまをか〜つて客「ヤアレコリヤ。緒待なさう〜」

（新造共うちうち）またすとはございませない客「うんたアとつて此ちつばけなまげの。ちよん先さへ切ら無に夫よチ。ハイ切すたアゆるじなさう常夏「ナニゆるさすもんで」客「アレこりや常夏」ンレ切らずに客「ヤアレこりや〜」トにげ出すを取巻て。にがさばこ寄て掛つてあたまをむしりちらかす。いつたい此客人はけんつうにて皆附髪なれば。まげもびんも落てしまひ客はあたまをなでまはして「ヤアこりやアハイ。あたまをむしり無したは（女郎みな〜）ばあチヤ。チホ、〜」客「ヤレ笑所じやアない。コレわしはハイ丁字屋へは行まいからあたまを出してくれなさう常夏「わしやア。しりまじない客」アレハイ。夏菊殿がかくした。サアあたまか早く出じなさう常夏「かまい。ハイ是でも丁字屋へいかすか客」モウいかない〜常夏「ほんとうにかヤア客」天照皇太神宮様掛て行ない常夏「すんなら夏菊さん出して上さつしやい升」ト常夏のさしつじかくしたる附髪を出してわたせば客「ヤアまだ。たら無。夏菊」モウ夫ばつかし客「アニハイまだ片小びんがうらにやア無か尋てくれなさう女郎「コレカ有ヤア客」夫だ々々（トじしんにあたまをさぐりまはしてまげ先をよこちよにくつ付留いさをついて客「ヤレ、あすい目にあつた皆々」チホ、〜）ト是より中直りの酒に成て色〜あれ共事長ければ略す彌次郎北八は腹の皮をよじり彌次「何くのうらでも有やつたが。よつばを面白かつた丁度去年の春一九が中田屋の勝山にじばられた時あんなさまで。有たごうさらしな」ト此内若者來（モウお床に致しませうチトあつちら〜）ト北八は自分の相方の部屋へ行と其内若者床

十九味

を取て二人乍ら引別れて暫らくまどろむに斯て一睡の夢は覺て。あかつきの名残りをおしみ彌次郎床を起出れば北八も目を摺ながら。爰に來りて打連立ち階子をかりるに皆々送り出て挨拶うこくひき別れ。傳馬町差て急ぎ歸り來りければ早くも宿には朝飯の用意と一の膳をかけるに支度あらまじにしてやがて。此驛を打立けるが。今もどりし道を具すぐに程無彌次と云るにいたる。爰は名にあふ阿部川餅の名物にて兩側の茶屋いづれもされぬに花やかなり。茶や女「名物餅を蒸がりやアし。五文どりをあがりやアし。彌次「おいらアタベ貳朱が餅を喰て來からモウ爰では食めへ北八「ううさく。ト此内阿部川の川越道に出むかひて。旦那衆を登りかナ彌次「チイ貴様何だ川越川越で御座り升安くやらすに頼ん申升北八「いくらだ川越昨日の雨で水が高いから一人前六十四文北八「ううは高い川越ハレ川をまアお見なさぬト打連て川端へ出る彌次「成程どうせいな水せいだコレ落すめへな川越「チニおまいサアうつちよをつん向なさろト二人をかた車に乗せ川へさぶくと道入る北八「ア、南まぬだ々々々目が廻るようだ川越「しつかり。わしがあたまへ取つきなさろア、コレうんなにわしが。目をぶさがつしやるな向が見へない彌次「成程深いは。コレかとして下さるな川越「アニ落すものかへ彌次「夫でも。ひよつと落したらどうする川越「ア、落した所が。たかでお前は流てしまわしやる分のとだ彌次「エ、流てたまる者かイやもうきたぞくヤレく御くろうくトかた車よりかりて貨錢をやり彌次「ソレ別に酒手が十六文ツ、川越「ハイコレハ御機嫌ようト川越は直に川

上あのみさい方をわたつてる端北八「アレ彌次さん見ねへかいらをば。ふかい所を渡して六十四文ツ、ふんだくりやアがつた

川どしの肩ぐるまにて我くを深いところへ引廻したり

夫より手越の里に至るに。又もや俄雨降。出てたちまち車軸を流しければ半合羽取出し打かつぎ足を早めて程なく九子の宿に至る爰にて支度せんと茶屋へ道入北八「コウ食を喰が爰はとろ汁の名物だ。彌次「そうよ。モシ御亭主とろ汁は有やすか亭主「ハイ今出き矣彌次「ナニ出氷ねへか。しまつた亭主「アレヒツきに拵へすに。ちつと待なさろトにはかに芋の皮もむかすしてさつくとおろしかり亭主「お鍋ヤイ、此いそがひしひにぬによすして居るちよつくりこい。トせはしく呼立るに裏口より小言を云ひながら来るは女房を見へ。髪はかきろのよふにふりかぶりたるが。脊中に乳呑子を背かひわらさうりひきすり來り今彌次「アとの。おばアぞんと咄しよをして居たにやかましひ人だヤア亭主「アニハイやかましひもんだ。コヒヤ。うこへ。お膳を二膳拵らへろ。エ、ソレ前垂が引すらア女房「お前い箸のあらつたのウ。しらずか亭主「アニおれがしるもんか。コリヤ、イ其箸よチよこせヤア女房「是かい亭主「エ、箸でいもが。すられるもんか。拵て木のとだハ、コリヤ拵まごつくな其膳へ附るのじやア無は。こへよこせと云ことよ。エ、うちのおかない女だト拵て木を取てごろくと芋をする女房「レおまい拵て木がさかさまだ亭主「かまうな。おれがことより。うぬがソリヤ海苔がこびらア

一十九味

二十九 膝

女房「ヤレくやかまし人だコノ又がきやア。かんなじ様にへらア亭主「コリヤ摺鉢をつかまへて呉ろ。エ、うらもちやア摺られなは。かへなぬひやうたくれめた女房「アニこんたがひやうたくれた亭主「イヤ此あまア「ト摺こ木で「ツくらはせると女房やッきを成て「此野郎めは「ト摺鉢を取てなぐるをそこらあたりへ「とろ「がこぼれる「亭主「ヒヤアうぬ「トすりこ木を振回して立か「りしがとろ「汗にすへりて「あつとろ「とろ「女房「こんたにまけて居るもんか「ト「かみか「りしが。是もとろ「にすへりてける。向ふのかみ様かけて來たり「ヤレチャ又見たくでも無ひいさかひか。マアしつまりなさう「兩方をなだめにか「り是もすべりころんで「コリヤハイあんたるこんだ「ト三人がからた中とろ「たらけつる「こてあつち「すべりてつちへ「ころげて大さはぎとなる「彌次「こつはははは「先へ行ふか「トおかしさをこらへてこゝを立出で「北八「とんだ手やひだ。マ「とろ「汗で「一首よみやした

暗嘩する夫婦は口を尖らして。蒸とろ「にすべりころすれ

夫より宇津の山に差掛りたるに。雨は次第に篠を亂し蕨の細道心ばそくも。杖を力に十四子の茶屋ちかく成て。彌次郎思はず坂道にすべりころびけれ

降りさる雨やあられの十四子。ころげて腰を宇津の山道

〔岡部の宿の宿引待受て〕お泊で御座ますか 彌次「イヤわつちらア今日川を越さばやアならぬへ宿引「大井川は留まりました 北八「南無さん川がつかへやしたか 宿引「さやうで御坐い升。先

へお出なごさつてもか大名が五ッ頭ら島田と藤枝にお泊で御座の升からあなれた方のお宿は御座りませぬ。先岡部へお泊なさいませ 彌次「うんならうしようか 北八「お目へ何屋だ 宿引「相良屋を申升。直にお供致しませう「ト打連ていうぎ行はせに早くも大寺河原の阪道を打越へて岡部の宿にいたりければ

豆腐なる岡部の宿につきにけり。足に出来たる豆をこぶして

〔先此際宿をとりて川の明までしばらく旅のつかれをぞやすめける〕

〇第三編

三十九 膝

名にしおふ遠江灘。浪たいらかに街道の並松。枝をならさず。往來の旅人互に道を讓合泰平を。咽ふつら。馬の小室節聖に宿場人足其町場を争はず。雲助駄賃をゆすらすして。盲人かのづから獨行し。女同士の道連。ぬけ参の童盜賊かぞわかし。愁にあはず。かゝる有難き御代にこそ東西に走り南北に遊行する雲水のたのしみ。ゑも云はれず。爰にかの彌次郎兵衛北八は大井川の川支にて岡部の宿に滞留せしが。今朝御状箱渡り。一番越も濟たる由。聞とひとしく。うこく「に支度して旅籠屋を出立けるに早諸家の同勢往來の貴殿櫛のはを引がごとく問屋廻ちうをかけり。小荷駄馬飛で走る街道の賑わひいささしく。二人も共にうかれたどり行程に朝比奈川を打越八幡鬼島を過白子町に至る爰は建場にて兩側の茶屋女お茶ア参るはア。一膳飯よを参るはア。お休なごさませし「馬士の唄「うらがが長松のか「アは。たてよ。チャあせと蛸だとももしゆるへ。

四十九膝

八間真中に足だらけ。しよんがへドウく(馬ヒイン)馬方旦那しゆか馬アいらなにか二百
 だが安いもんだア。何なら錢さへくんなさりやア。たいでも行すに北八「エ、二百出やア夜るの
 馬に乗アくうたれめが馬方「ヤイくうたれたイ。あんだイ。うらがいつくろをく(馬ヒ、ヒン
 く)彌次「ナントちよつぱり呑で行か。コウ姉さんい酒があらちつと斗出してくん(ト
 茶屋へ這入)茶屋の女「ハイかんをして上ゲずかヤア彌次「ううさ時に肴は何が有やす亭主「ア
 イねぶかどまぐろの煮たの斗かし北八「イヤねぎまの風呂吹ソレよかるふ亭主「インチ風呂吹
 じやア御座らない。たんだ醬油で煮たのだアのし(ト云つ)てうし盆を持出まぐろを皿に盛て
 持来る)彌次「ハ、ア葱まど云から江戸でするようたと思たらコリヤア雄子焼を煮たのだなよ
 し(北八「初めようマツくく)イヤこの肴はかた佛だせ。コリヤ昨日のまぐろだよ亭主「
 インチハイ昨日の魚じやア御座らないは彌次「うれでもさつぱり喰ぬ(亭主「ハアきんに
 ようのがわるかア一昨日のを進ませうか。うんだいにやア酔こたア請合申す北八「エ、酔て
 たまる物かうして此酒は半分水だ。ベツく時にいくらの亭主「ハイ肴が六十四文酒が廿八
 文彌次「味くねへ替りに高ひもんだ。サア行ふと錢を拂ひ袋を立出早くも錢が淵と云ところ
 いたり例のすきの道なれば彌次郎兵衛取あへす
 こ元は鞍の淵なれど
 踏またがりて通られもせず

五十九膝



夫より平嶋口田中を打過藤枝の宿近く成て
 街道の松の木の間に見にたるは
 これ紫さきの藤枝の宿
 (此宿の入口にて風呂敷包を。ちよいと肩に掛
 たる田舎の親父馬のはねたるに驚き逃るひや
 うしに北八へ突當ると北八水溜りの中へこ
 けておぼさにあつくなり起上りて田舎者をひ
 つとらへて)北八「コレ親父の眼が見にねへか
 寒鳥の黒焼でもくらやアがれ親父「コリヤハイ
 御免なさい北「ヤイ御免なさいじやア。濟まね
 いはへ。コレ野郎は小粒でも。さアつと云から
 金の虎魚をにらんで産湯から水道の水をあひ
 た男だ親父「インチ。ハイ水をあひたならよ
 うござるが。うんなのとけた所はお馬の小便
 溜りだア北八「エ、其小便の溜つた所へな
 せつこかじやアがつたへ親仁「うりや。ハア

六十九 膝

わしも。がらひを馬につくばねられて。うたにに行やつたのだ。せうもせずとがな。かんにさ
つしやい。北八「何だ堪忍しろいやはや。ほんのこつたが。大江山の親分が銀棒引渡りにこよう
が。石畳様が猪のくまの似づらを書せた。灯籠で路次口から滑板の上へ。はいかゝんで。きかぬへと云ちやア。久米の平内を居さぬうに。やつたよりかア。又びつくとせぬ奴様だ。親
仁「ソリヤア。ハイあに七六かしひことを云つしやるが。私にやア。ハイがひもくにしれ申さぬ
。わしも。ハア此近在の長田村ぢやア。名主役も助た家筋だんで。今でもか地頭様の年頭にやア。上
席のウせる男だ。あにもがいに心れなく雑言のウしめさるこたア。御座んないやア。北八「エ、悪
くしやれらア。尻がかいしはへ頭の缺でもひろはせてやろふか。親仁「エ、うんたア。づない人
だヤア。私にもハイ荒神様がついてぬすにがいにおとがひのウ。たしかしやんな。北八「エ、此摺
こ木め「トくらはせに掛る彌次郎兵衛見かねてやうくひきわけ」彌次「北八もう了簡しろへ
。親父お目へが。せんでい。籠相しながら気がつこ。もういひから行なせへ」北八をなだめる内
親仁は面ふくらかしふせう「ト」に行過ると彌次郎」

頭に乗て北八に今たかれし。藥籠あたりの親父へこんだ
打笑ひつゝ、瀬戸川を打越夫より志多村大木の橋を渡り瀬戸と云所にいたる。茲は建場にて染敷
の名物なれば
親物の名にあらう瀬戸の名物は。緒ころ米も染附にして

七十九 膝

斯て此町はづれの茶屋に先刻の田舎親父休めたりけるが二人を見つけて呼かけ親父「コレく
先刻にやア無恥のウしました。わしもハア有ようは一盃呑だ元氣さづなひ事も云申したが其方
衆が了簡のウしてくれさつたから。へこたらずに歸村のウしますは。マアあんでも禮に酒ウ一ツ
進ませせう。こへ寄らつしやぬまし彌次「ナニわつちら酒も呑で來やした親父「エレチャア折
角わしが思ひだアのし。せつひ一ツよからずはコリヤ「御亭主味よい酒ウ出さつしやぬまし
北八「イヤお心ざしは忝なひサア彌次さん行ふ。親父「ハテコリアじやうのとわぬ人だヤア。ヒ
ツきにやらすに。ちよつくり寄てくれされやア「トむりに彌次郎北八が手を取て引摺込二人もな
る口ゆる酒を聞て少し心ひかされて。彌次「ゑいは北八「一盃やらかそうか。然し親父さんお目
への御ちうじやア氣の毒だ。親父「ハテコリヤよいと云のに御亭主「肴アヒようにつん出し
てくれさい。時にコリヤ「ハイ爰はあんまり端つばだ奥座敷へ行すかヤア。茶や女「サアあつちイ
御座らしやぬまし「ト出し掛た銚子盃を奥へ持て行と三人も中庭から廻り奥座敷の椽側に草鞋
の儀あぐらをかき彌次兵衛「サア親父さん初めなせへ。親父「アイすんだら毒見のウしませす。
ナト、くよからずして先若いのへ進ませせう。北八「アイわつちや酒よりか腹がへつた。親父「
アニ腹がへつたソリヤア飯を喰つしやい。じつぎによくなる。北八「イヤ先酒にしよう。ナト有
升「時此此吸物は何だたいみ饒のせんば煮か大かたこの跡じやアかぼちやの胡麻汁か。藤原
芋のよこしが出るだろ。彌次「サア悪く云せ。コレ此海老を見や。こをはねかへつた所はごう天

八十九膝

井の天人と云身がある北八「イヤ豊後節の。とかアいなア、引といふ所も有やすハイ、
、時に親父さん上やせう親父「インチへ。さいましやう今着がこすに。コリヤあん姉、先刻か
らハイ。へし折るは腕をたぐくにあせ着アつん出さなない茶やの女。ハイ、只今上すにトよ
うくと大平と鉢着を持って来る。彌次「やらやつと持て来。平は何だア玉子のふは、か彌次
をうひ筈だ今産のを待て居たを見へた北八「こいつは無難だ奇妙々々親父「たんと香でくれさ
つしやいらんたア私が爲にやア。命の親だ。よく先刻ヤイ了箇のウしてくれさつたのし北八「イ
ヤわつちもツイ虫の居所が悪くつて云過しました真平御免彌次「うこは且那殿も野暮じやアね
へ。若ていつはせうせ味増べつたり焼せうがといふ男だから。じやう度はなじさトたい香酒ゆ
るつめせうだら、闇裏に引掛る此内勝手よりも色々持ち出し膳も出て彌次郎北八すこしは氣
の毒ながら是も喰てしもうと親父小便に立て行跡にて北八「ヨウ彌次さんお目へこの割合を
おれによこしなせへ。おわらがアノ親父をぬじめたればこう。お前どうてきにやらかしたせ彌
おきやアがれうう云ても方ざらじやアねへ。アノ親父のこね内後に吞分もやらかさう北八「おら
ア此茶碗にツイでくんナットきた、きたさの、。讀岐の金昆維高が高瀬の船頭の子
じや者。おさへてどうするロヤン、彌次「エ、引山に切りころはし松の木丸太の様でも
妻と定めたら。萬ざらに、もあるまわし。やとさのせ、面しろ、時に此親父の。べら
作めはだらした北八「オンニ長め雪隠だ。モシ女中茲に居た婆様は何所へ行たの茶や女「たし

九十九膝

か外て、方へ彌次「ハテナこいつ何かへんちさだはへトまでをもよめて共此親父何所へ行たか
一向に歸らす雪隠をさがせ共行方しれず北八「モシ女中今の親父が爰の拂をして行たか茶や
女「イ、エまだいた、きませぬ彌次「ヤア、北八「一、赤飯にかきやアがつたな。追駈
てぶちのめそふトとんで出たれ共さちらへ行じやう一向雲をつかむが如く殊に親父は此近在
の者故脇道へ入しやさらに行へしれず北八しよげて立歸り彌次三どうもしれぬいとんだ目に
あつた彌次「仕方がねへ手めへ。拂をしやアノ。親父めがくやしん棒で。手前に意趣返しをし
たのだけはな北八「うれでもナニおれヨリかふるもんだいま、しひ折角酔た酒が皆んな。さめ
てしまつた彌次「次郎殿の犬と太郎殿の犬と皆な嘗てしまつた北八「エ、しやれなさんな其
所じやアねへ。マア何にしろいらだね亭主「ハイ、九百長五十で御座り升北八「かたりは
合たと思つて往生して拂ひやせう。云ア云程ちゑのねへ咄だ彌次「うう云てもかつな親父だい
ト事をしやアがつたコウ北八手めへの顔で一首うかんだ
御馳走と思ひの外始末にて。腹もふくれた顔もふくれた
北八「へ、こら腹な生馬の目を抜やアがつた
有がたい忝じけないと體云て。一盃たへし酒の御馳走
斯よみて北八も笑ひをもようし田舎者をあなをりて。とんだ意趣返しを。しられたるもおかしく
爰を出てゆく程に大井川の手前なる嶋田の驛に至りけるに川越共出向て且那兼川ア頼ん升彌

貴様川越か二人いくらで越川越、ハイ今朝がけに明た川だんて。肩ぐるまじやアあふん無遺堂
 でやらすにお二人で八百下さぬませ彌、とはうもねへ越後新道じやアあんめぬし。八百よこせ
 もすさまじい川越、すんだらいくら下さるヤア彌次、何程も摺木もいらねへ。おいらがじきに
 越は川越「チ、川流れやア二百附て寺へやるから。何ならううさつじやぬ流た方が安くあがら
 アハ、くくく彌次「馬鹿アぬかせ問屋へ掛つてお越なさるは、ト、い、捨て足早に行過彌次「
 ナント北八あいつらに。からかうが面どうだから、つろのを問屋へ掛つて越ふ。手目への脇差を借
 じやれ北八「なせどうする彌次「侍に成は(北八が脇差を取て差。おのれが脇差の引はだを跡
 の方へ延し長くして大小差た様に見せかけて)彌次「ナント出来合のお侍、よく似合たろう。此
 風呂敷包を手めへいっしよに持て供に成てきや北八「こいつは大笑ひだ、くくく(ト
 彌次郎兵衛か荷物を一しよにして。北八肩に引掛やがて川問屋に至り彌次郎兵衛お國詞のこわ
 いろにて)コンリヤ問屋共身共大切な主用で罷通る川越人足を懸むぞ問屋「ハイかしこまりま
 した御同勢はおいくたり彌次「ナニ同勢な問屋「さようで御座り升。旦那はお駕かお馬かお荷
 物は何駄ほど御座り升彌次「本馬が三疋。駄荷が都合十五駄程ありあるが道中邪魔だから江戸
 表におめてきた。其替り身共六尺が八人うこへ記めさる問屋「ハイお侍衆は彌次「侍共が
 十二人鎗持鉄箱ぞうり取。よいかく合羽籠竹馬つがう上下卅人余りじや問屋「ハイ、其御
 同勢は何所にあり升彌次「イヤサ江戸表出立の節は残らず召連たが。途中で追く、疵疹をいた

しあるから宿へ殘し置た。うこで只今。川を越ふといふ同勢は上下合せてたつた二人じや、
 越に致うう何はじや問屋「ハイか二人なら連盛で四百八十文で御座り升彌次「夫は高直じやち
 とまげやれ問屋「此川の賃錢にまけると云ふはないヤア。鹿馬云々と早く行がよからずは彌次
 「イヤ侍に向つて馬鹿云などは何じや問屋「ハ、くくくがいに頭ないお侍だヤア彌次「
 こいつ武士を嘲弄しある。ふと、いき千両な問屋「こんだ武士が刀の小尻を見さつじや(ト云は
 れて彌次郎兵衛ふり、流りうしろを見れば刀の小尻につかへて引はだ斗の所ニツに折てぬる音々
 く、とつと笑ひ出せばさすがの彌次郎面目無くしよげ反てだんまり問屋「刀の折たのを差武士
 が何所に有者だ。こんな衆問屋をかたりに來たなんでは。ハイ濟せないぞ彌次「イヤ共身は三
 保の谷四郎國俊の末孫だから。夫で刀の折たのを差かると問屋「たわごと云とく、し揚るぞ北
 八「コウ彌次さんお納らねへ早く行ふ(ト手を取て引づられ彌次郎兵衛夫をしほにところく、に
 げ出す)問屋「ハ、くくく、とはうもない氣違だ彌次「ツイ。やりうこ成たいま、くしいはハ

出来合の生くら武士の印とて。刀の先の折てはづかし
 此狂歌に双方大笑ひとなり。彌次郎兵衛北八爰をのがれ。いろぎ川端に至り見るに往來の貴賤
 すき間もなく此川の先を争ひ越行中に二人も直段取極めて連盛に打乗見れば。大井川の水さか
 卷。目もくらむ斗。今や命をも捨なんと思ふ程の恐し。譬ゆるに物なく。さてや東海第一の大

二百膝

河。水勢早く石流て。渡るになやむ。難所ながら。程なく打越て連登をかり立婚しさいわん方なし。連登に乗しはけつく地獄にて。おりた所がほんの極樂。斯打興して。金谷の宿に至。雨側の茶屋女お休なきいまし。駕やもどり駕乗ていじや御座い。北八「コウ彌次さん。駕わどうだ。彌次「ヤア。氣がない手前乗なら乗ていかつし。北八「うんなら日坂迄乗うか。ト駕の直段極て打乗たるに折節雨降り出しければ。古どさ一枚駕の上から打かぶせかつき出して早くも菊川の阪に掛ると順禮が二三人ふだ樂や岸打浪は御熊のよ。アイお駕の旦那壹文下さい。北八「附なく。順禮「彦道中御繁昌の旦那此中へたつた一文。北八「エ、附なと云にべら棒め。順禮「夫にべら棒が入もんか。うつちがべら棒だ。北八「コノ食食めが。トリきむはづみにいか。しけん駕の底がすつはりぬけて北八とつきりしりもちをつき。北八「アイヤ、く順禮「ハ、くく。駕屋「エレ、怪我さつアしやりませぬか。北八「コレ手めへたぢやア。なせこんな駕に乗た。駕屋「ゆるさつしやりませ。あんせせろもんで。北八「何所ぞへ行て。い駕をかりて来さつし。駕屋「こかあ阪中でありす。所が御座らない。イヤよいとがある棒組。主のへこをはづせ。棒組「アせ。どうせる。駕屋「ハテおれがせるとがある見され。ト自分のふんどしをはづし棒組のふんどしと二つ筋にてござの上からかこのどう中をくよりて。サア乗ていじや御座れ。北八「そんな事をする。是で乗られるもんか。駕屋「ハテ外にせる事がない。うんだい。にやア。寝た度ならしやつても。此へこで落す様か御座らぬ不肖して乗つしやりませ。ト氣の

三百膝

毒うらに云。北八もおかしく是も咄の種と打乗は彌次郎兵衛ハ、くく。白いふんどしで駕の胴中を。結つた所は。しつかいふ屋敷の非禮と云物だ。北八「エ、いまくしいうんな事を云なさんな。彌次「ハ、ア駕の内。物を云から佛でもねへ。こいつ聞へた科人だや。北八「エ、猶いまいましい。おらアもうおりて行う。トこより駕をかりて爰迄の賃錢を拂ひ駕を歸したぞり行に。雨は。頻りに降出しければ阪道すべりてやうく。と佐夜の中。山建場に至り。爰は名にあふ踏の餅の名物にて白き餅に水飴をくるみて出す。此二人酒呑たればやうやく。一ツ二ツ喰ける内雨つよくなりたるに。こゝ元の名物ながら。我くは。降出す雨の餅あましたり。傳へ聞無限の鐘は其寺に名のみ残りて今はなしと。此寺に無間の鐘もつきて無し今は晦日に嘘やつくらん。夫より此坂を下り日坂の驛に至。頃雨は。次第につよく成て今は一と足も行れず。あたりも見へわからぬ程。しきりに降くらしければ。或旅籠屋の。軒にたすむ。彌次「いまくしいうてきに降はく。北八「花屋の柳じやア有めへし。いづ迄人の門に立ても居られめへ。ナント彌次さん大井川は。越し最此宿に泊らうじやアねへか。彌次「ナニ。そんな事を云まだハツにやア成めへ。今から泊てつまるものか。宿や婆々。此雨じやア。行まじない。泊らしやりませ。北八「イヤこりや泊たくな。成た。彌次さん見ねへ奥にたばが大分宿て居る。彌次「チャドレ。こいつ咄せるはへ旅籠ばく。

一生咬や。くはす。寒く成ても拾一枚着せてくれ
 れた事はなし。寒の冬も單物一ツ。ア、うらな
 しゃく。彌次「勘忍してくれ。おれもろの時
 分はめんくが惡くて。かわへううに苦勞を仕
 死に、死やつたが。有り多ひ北八「チャ彌次
 さんおめへなくか。ハ、くくくこいつは鬼
 の目に涙だ。巫女「わすれもせない。其方が
 を煩はしやつた時わしはあやにく。ひつをか
 く。瓜の雙の次郎殿は。よいく病ひたつた一
 人りの子實は脾胃腫して骨斗に瘦こける。米
 はなし日なしはせがむ。大屋殿の店賃やらね
 は路次の犬のくうに。こつても。こごとは云は
 れず。彌次「もうく云くれるな。むねがさけ
 るやうだ。巫女「夫に私が奉公して折角ためた
 若物迄其方故直なくしたかくやしい。質はさ
 かさまにヤア流れ申さぬ。彌次「其代り手め
 は結構な所へ行て居るだろうが。おれは今だ



に苦勞がたへぬ。巫女「ヤアレ。ハア。何が結構で御座らふ。友達衆の世話で石塔は建て。下さつた
 れど。夫成で墓参もせず。寺へ附届もして下されねば。無縁同前と威今では石塔も城の下の石が
 げど成たれば。折ふし犬が小便を。しかける斗りついに。水一ッ手向られた事は御座らぬ。ほん
 に長死をすれば色くなめにぬい开ぞや。彌次「もつともだく。巫女「其つらい目に合ながら。
 草葉の影で其方の事を片時わすれぬ。さうぞ其方も早く冥途へきて下され。やがてわしが向に
 来ませうか。彌次「ヤアレとんだ事を云遠ひ所を。かならず向に來るにア。およばぬ。巫女「うんた
 らわしが願をかなへて下され。彌次「ナ、何成とく。巫女「此巫子殿へお錢をたんとやらつしや
 りませ。彌次「ナ、やるともく。巫女「ア、名残おしや。かたりたひ事。とひたい事敷かぎりはつ
 きせねど。めい途の使しげれば彌陀の淨土へ。トウつむきて巫女はあづさの弓をしもふ。彌次「
 コレハ御苦勞で御座り升た。ト鳥目二百文ばかり紙にくるみていたす。北八「くら闇の恥を。と
 うくあかるみへ。ふちまけて仕廻たハ、くくく。時に彌次さんおめへ。とんだふさぐの。ナン
 ト一盃呑じやねへか。彌次「うれもよかるふ。ト手を叩き女をよび酒肴を云つける。巫女「今日は
 お前様方ア何所からお出なさりました。彌次「アイ岡部から來やした。巫女「夫はお早ようお座り
 ました。彌次「ナニわつちらア歩行事ア草駄天様さ。サアト云と十四五里宛は歩行きやす。北八「
 其代り跡で十日程は役に立やせぬハ、くくく。此内酒と肴を持出る。彌次「ちと上りませぬか
 巫女「わたしは一向下さりませぬ。北八「あちらのお方はどうだ。巫女「かゝさんお出サアお登さ

んもお來なさいまし北八「ハ、アおめへのおふくろか。エ、ていつはめつたなこたア。云れぬはア先上やせう」ト是より酒盃となり。さいつおさへつ此巫女共思ひの外にくひぬけにて。いくら呑でもしやア〜として居る彌次郎兵衛北八は大きに酔が廻り色〜おかしきしやれぬ共餘りくだ〜しければ略す北八巻じたにて「何とおふくろさん今夜おめへのお娘をわつちに貸てくんませへ彌次「イヤおれがかりるつもりだ北八」とんだ事を云。お前こつ今宵は精進でもしてやりなせへ。可愛ううに死なぬ衆が。あれ程に思てどうぞ早めい途へとい頓て迎にこようぞ深切に云じやアねへか彌次「ヤレ夫を云てくれるな向ひにこられてたまるものか北八」夫だからお目へは由なサアおふくろ此方にさまつた」ト巫女の娘にしたたれるときはなしてにげる」巫女およしなさりませ 巫女のば〜娘がいやならわたしでは北八「最ふこつなつちやア。だれかれの見さかひはない」ト夢中に成てしやれる此内勝手より勝手も出て色々爰にもあれ共略す。早酒もおさまり彌次郎北八も次の間に歸り日が暮るやいなや床をとらせ寝かける奥の間にも草臥にやもう寝かける様子北八小聲にて「何でも巫女の新造めがいつちこつちの端に寝た様子だ後に這掛てやろふ。彌次さんお目へ寝たふりなどは通り者だせ彌次「おきやア がれ。已がしめるは北八」氣のつ〜大笑だ」ト云つ〜兩人ながらぐつと夜着をかぶりぬる」すでに夜も五ッ過四ッ廻りの柏子木の音枕に響臺所に明日の支度の味噌摺音もやみければ只犬の遠叫のみ聞へて物淋びしくふけ渡るに北八時分は好とうつとおき出かくの間を馳へバ。行燈さへて。ま〜つ〜ら開。うら

〜と忍び込。さぐり廻しかの巫女のふところへにじり込と思ひの外此巫女の方よりものをも云々北八が手を取て引摺奇る。北八こいつは難有と其ま〜夜着をすつぱり手枕のころびぬに假のちぎりをこめし跡は。二人共前後もしらす鼻つき合せてぐつとね入。彌次郎兵衛一トね入して目をさまし。をさめかりて「最ふ何時だしらぬ手水に行ふ。コリア真つくらで方角が知ぬ」ト小便に行ふりにて是も奥の間へ這込北八が先を越たとは露しらすさぐり寄て夜着の上から。もたれか〜りくらがり粉れにかの巫女と思ひ北八「ムニヤ〜いふ唇をねぶり廻し。わんぐりとかみ附く北八きもをつぶし目を覺し」アイタ、〜、彌次「北八か 北八」彌次三かエ、きたねへ〜」(此壁に北八と寝て居る巫女も目を覺して)「コリアハアおまいちは何ださう〜し〜静にしなさろ。娘が目を覺すに」ト云聲は婆々の巫女北八は二度びつくりこいつ取違たかいまいまし〜ト這出てう〜と次の間へ逃歸る。彌次郎も逃んとするを巫女手を取て引づりながら「お前此年寄をなぐさんで今逃るとは御座らぬ 彌次「イヤ人違へだかれではない 婆々ア。インチろう云はじやりますな。私共はこんなを。商賣にやアしませぬぞ。旅人衆の伽でもして。ちつと斗しの心附を貰ふが世渡り。はらさん〜なぐさんで只逃るとはあつかましひ夜の明る迄私のふどころでねやしりやませ 彌次「是はめいわくな。ヤイ北八〜 婆は「アレハイ大きな聲をさしやい升な 彌次「夫でもおれはしらねエ、北八めがとんだ目に合しやがる」トやう〜むりに引はなして逃んとすれば。又とりつ〜をつきたをして。がたびしとけちらかしらう〜次の間へ

二十百藤

く小言を云ながら着替を出して着替へくさつた上着は絞て引さげ出掛るを程なく掛川の宿に至る。梅島の茶屋女お召よチ上り。ヤアし終とこんにやくと。干大根のお吸物も御座りませう。朝のせんば羨もおざりませう。お休なさいやし。長持人足の唄。吹バナア。吹程ナア、ンエ。持もナかるいナン、ンエ綿をサア入たやナア長持ニ綿をナア、ンエヨウしつたかだうだか。馬のいななきヒイン。彌次「チャ北八見さつし先刻の座頭めらが。あうこに香でけつかるは北八」こいつはいし事が有。おいらを川へはめた意趣返しをしてやろふ。トつくり聲にて。かの座頭の酒を香で居る茶屋へ還入。北八「チャ御免なせへ。茶や女」お出なせへまし。茶を汲でくる。北八「かの座頭のわきへ腰を掛る」茶や女「お支度でもなさい升か。彌次「まだ。腹かばんばこなた。先きの座頭二人此所に休み酒を呑み居たるか二人とはきもつかず。犬市「ハアねつから酒がたらぬようだ。もう二合やらかうう。猿市「いか様なア御亭主。もうちつと頼升。茶や女「ハイ。犬市「時に今の川へはまつたべら棒共はどうしたろふ。猿市「夫よ、くく。先替り目をやらかうう。ト猪口に一盃づめで。ト口香。下に置と。北八「うつと手を出し猪口の酒を香でしましちやつと元の所に置く」猿市「イヤふといやつらで有た。ちやんとおれにおぶさりやアがつて。其代り。水を喰やアがつた時は。たすけてくれろとかなしおとほねを出しおつた何でも。かすりを取事斗り。心掛てぬるやつだから。大方おいつはさまの灰だろふよ。犬市「うふ。もうでろくな者じやアない。あーいふやつは。こんな所へ来て。あては喰迷をして。ふちのめられる

三十百藤

者だ。イヤ時に盃はどうした。猿市「カ。ニ。すられた。ト猪口を取揚て香うとした所が酒は一すいもなし」チャとほしたううな。トうこらあたりをさぐりませし。ハテめいよふな。改めてさうう。ト又一盃つぎ一口香で下に置と北八又とつと引寄せ香でしもふ。犬市「かうして居る所へ先きのやつらが来たらおかしからふ。猿市「なにぬいつらは大方着物を蒸りたり。干たりしてまだあつちになつて居るだろふ。智慧のないべら棒共だ。ト云ながら盃を取揚た所が又酒は一すいもなし。猿市「是はどうだ。犬市「又たこぼしたか。いくじのない。猿市「イヤこぼしはせぬが。ハテ奇妙う來な。犬市「イヤ手めへろん茶事斗り云て一人で呑な。ト此内北八銚子を取。自分が香だ茶香茶碗ニツに明てうつと。銚子を元の所に置く。犬市「コリヤ猿よ。酒盃を廻さぬか。トひつた。くり銚子を取てついで見て。ヤア此猿市一人でのでしまやヤがつた。猿市「ナアニとんだ事を犬市「夫でも銚子がさつぱりた。猿市「何だ銚子がないイヤ。此所の御亭主。くわしらを盲とあなどつて。こんな横着をさつしやるが。二合の酒がたつた二三口香ともうないはさうしたもんだ。亭主「ハイ夫は二合しかもたつぷりついで上ましたに。大方こぼしなかつたもんだんで。猿市「ナアニこぼすもんだ。商人に似合ぬ事をさつしやるから此酒代は拂ひませぬぞ。ト大きに腹をたてる此とき門口に遊でいる子もりが最前より見ていたりしが北八のほうへゆびさしをして子もり「ワアイ。座頭殿の酒ウ皆なあの人が茶碗へ汲でしまつせいた。北八「チャ此子はとんだ事を云。コリヤア茶だ。ト云ながら香さした茶碗の酒を香でしもふ。亭主「イヤお前。酒くさ

六十百藤

道細に開く櫻の枝ならで。皆めい〜におれる花ごの
程なく袋井の宿に入るに兩側の茶や飯はしく往來の旅人各〜酒肴食事などして居たりけるを
彌次郎兵衛見て

爰に來て行きの腹やふくれけんされば。布袋の袋井の茶屋

此宿はづれより。上方者を見へて棧留の布子に銀拵への脇差を差。花色羅紗の裝束掛し合漢を着
る男。供一人連れて跡になり先になり。上方者「モシお前方はお江戸じやな。彌次「左様さ。上方もの
「わしも毎年下る者じやがお江戸は。氣味とは繁昌な所じやワイの。アノ吉原へも。ちよこ〜さ
うはれて晝三とやらいふ娼婦を買たが。いつも人に振る廻れて行さかぬ。何程か〜つたやら。こ
ちやしらんが。お前方も定めて買なさるじやあるふが。アリヤ何は程掛るぞいな。彌次「わつちも
女郎買では。地面の五ヶ所と十ヶ所はなくした者だがナニ。晝三位では。わずかな事さ。マア平の
晝三なら片しまめで。壹分貳朱。茶屋が壹分か。藝者が一組で又壹分。うして。一ツ斤〜でもと
れば。其代が貳百づ〜掛る分の事さ。上方もの「ハテノわしも大見せは所々へいたが其一斤〜
と云は何のこつちやいな。彌次「ソリヤア酒一斤肴一斤など。内の酒が肴ぬから別に外から取
寄る事さ。上方者「ハテわしが行た内では其様なことはなかつたワイな。うして何も香酒は出し
ませんワイの。あるふい酒で有たワイな。彌次「ナニうりやア飲る酒でも飲めぬ〜と云て別に
取が江戸ッ子の氣味さ。上方者「うして上方では皆借てもとるが。お江戸の女郎は現金掛じやう

七十百藤

うな。彌次「ナニサあるこでも附馬を連れて歸りさへすりやア。いくらでも貸てよこしやす。上方者
「ハ、〜〜〜。コリヤお前は。大見世のお客じやないワイの。うの附馬とやら云事は。わしら
が店の職人じゆの咄で聞て居并が。晝三賣に。うんなをば有やせんワイな。彌次「なくつてさ。
ほんにわつちらア尻に四ツ手總の蜻の出來た程がよつた者だ。ナニねへ事を云やせう。上方者
「ハ、うんならか前のかなじみは。何屋じやいな。彌次「アイ大木屋さ。上方者「大木屋の誰じやい
な。彌次「留之介よ。上方者「ハ、〜〜〜。うりや松輪屋じやワイな。大木屋にうんなかやまは。な
いもの。コリヤお前さんとやくだいじや〜。彌次「ハテあすこにも有やすナア。北八「北八「エ、
さつきからたまつて聞て居りあア。彌次さんお目へさひた。ふうだせ。女郎かいに行た事もなく
て人の咄しを聞かちつて出方だい。つかり。外聞のわるい。地者の面よこした。彌次「べら稀めお
れだぞていかねへ者か。じがも〜手め〜を神に連れて行たじやアねへか。北八「エ、あの。大屋さ
んの葬ひの時か。〜、神に連れてますまじい。成程貳朱の勤を。おぶさつた代り馬道の酒屋で。む
きみのぬだ〜から汗で香た時の錢は。昔なをいらが拂ておいた。彌次「うろをつくせ。北八「うそな
もんか。じかも其時おめへ。さんまの骨を咽へ立て。飯を五六。盃九吞にしたじやねへか。彌次「馬
鹿アいふ汝が田町で醜酒を喰つて。口を糞とした事ア云すに。北八「エ、うれよりお目へ。土手で
いし紙入が落ちてある。だの〜をつかんだじやアねへか。葉さらしな。上方者「〜〜〜。い
〜早ま〜い。方は〜ん。や〜だいな。葉じやワイな。彌次「〜、やくだいでも。あくたいでも。うつ

八十百騎

ちやつておきアがれ。龍つべこまどしやべる野郎だ上方者「ハア。こりや御免なさいドレ。お先へ参ろう」トきもをつぶし。うらうらに挨拶して。足早に行き過を彌次「いまくし。うぬらに一番へこまされたい、くくく」(此咄しの内美賀の橋を打渡り大窪の坂を越て早くも見附の宿に至る。北八「ア、くたびれた馬にでも乗ふか馬士」おまいち。お馬アいらしやめせぬか。わし共は役に立たおまだんて。早く還りたへ安くないかす。いサア乗らつしやりまし彌次「北八乗らねへか北八」安くば乗べい「ト馬のううだんが出来て。北八これより馬に乗。此馬方は助郷に出たる百姓ゆゑいんぎん也」彌次「コレ馬士とん爰に天龍への近道が有じやアねへか馬士」アイ其所から空へあからしやると。一里斗しも近くおざるは北八「馬は通らぬか馬士」インチから道で御座るよ「ト爰より彌次一人近道の方へまはる。北八馬にて本道を行に早くも鴨川橋を打渡り西坂境松の建場につく」茶や女「お休なさりヤアしく」婆は名物のまんぢう。かわしやりまし馬士「婆アさん異な日よりでおざる婆ア」おはやうおさいました。今新田のあんにいが。どうしに行す。さすつてめたアに。コレコレ横須賀の伯母とんに云ついでくんなさい道樂寺様に御説法が有から遊ながらお坐いと云てよサ馬士「アイく」又此頃に来すい。ドウく北八「此馬は静な馬だ馬士」女馬でお坐るは北八「どうりで乗り心がよい馬士」旦那アか江戸は何所だなアし北八「江戸は本町馬士」ハア。あいとこだア。おしらも。若い時分。お殿様に付て行かつたが。其本町と云所は何でもづない。商人斗り居るとこだアのし北八「チ、夫よおいらが内も家

内七八十人斗りの暮した馬士「ソリヤア御たいううなわかつ様が助を焚も。たぬていのてんではない。アノお江戸は米がいくらしおり升北八「ア、一升二合い」所で一合位よ馬士「ソリヤアいくらに北八」しれた事百にさ馬士「ハア本町の旦那が米を百つゝ買しやるうふだ北八」ナニとんだ事を取で買込は馬士「うんだら兩にいくらします北八」ナニ一兩にか。ア、こうと。二天作の八だから二五十二八十六で踏附られて。四五の廿で帯とかぬと見れば。無けんの鐘の三斗八升七合五斗もしよふか馬士「ハア何だかお江戸の米屋はむづかしい。わしらにやアわからない北八」わからねエ管だ己にもわからねハ、くくく」川咄しの内程なく天龍に至る。此川は信州諏訪の湖水より出。東の瀬を大天龍西を小天龍と云船渡しの大河也。彌次郎此所に待請て。共に此渡した打越るとて

水上は雲より出て鱗浪のさかまく天龍の川船より上りて、建場の町に至る。此所は江戸へも六十里。京都へも六十里にてふり分の處なれば中の町と云る由

九十百騎

けいせい道の道中ならで草鞋掛け。茶屋にどだへぬ中の町客夫より。かやん坊樂師新田を打退島居松近く成たる頃。濱松の宿引出向かひて宿引「モンあなた方アお泊ならお宿をお願ひ申升北八」女のいゝのが有なら泊やせう宿引「随分おざり升彌次泊から飯も喰せるか宿引」上げませいで北八「コレ菜は何を喰せる宿引」ハイ當所の名物鱈漬

明長鴨る見うとひ類の心の入の中世も北流き早の川此



でも上げませう 北八「夫が平か。夫斗りじや
有めへ宿引「ハイ夫に推背くわいの様な物を
あしらひまして 北八「汁が豆腐にこんやく
の白あねか 彌次「マアかるくして置がい。
其代り百ヶ日にはちと張込つせへ宿引「コレ
ハ異なををおこしやる彌次ハ、くくく時
もう参りました 彌次「イヤもう濱松か思ひの
外早くきたはへ

さつくとあゆむに連れて旅衣

吹つけられし濱松の風

(宿引先へかけ抜て) サア、お着だアよ 宿
亭主「お早くお坐いました。ソレおさんお茶と
お湯だアよ 彌次「イヤうんなに足はよこれ
せぬ 亭主「うんなら直にお風呂におめしなさ
いまし 北八「湯澄場は何所だ 彌次さん「ア先
へやらかしねへ 彌次「いまくしことを

ふ男だ手ゆへ先へ這入 宿女「とつちイ。お出なさうまし(ト直に湯殿へ案内する此内荷物も坐敷
へはこせ 彌次郎兵衛奥へ通る) 錢屋「ハイ兩替はようおざり升か あんま「お療治をなさい
せんか 彌次「サットもんで下さいイヤ貴様眼が有か あんま「ハイ仕合と片つばは能見へ升。十
年ばかりも跡に風眼とやらを類らひおろして、兩眼共に、かいらくつゝおして仕まい居まし
たが、夫からとつちイ。色々を療治をしてやつとこの間。左りの方が能成ました 彌次「久し振で
眼が明ひたら皆んな。しらぬ人斗りだろ、うあんま「サアやうでお座り升 彌次「見へない方も随分
療治をなささい。なをりさへすりやア見へるもんだ。時に北八湯はさうだ(北八風呂より上り)ア
、い、湯だあんまりあつくて、體が半分水引の様なつた 宿女「ハイ御膳を上げませう(トこゝに
て膳も出。色々あれ共略す順で膳も濟。彌次郎湯に入て仕舞ひ) 彌次「サアあんまさん。やらかし
てくんな。イヤ時に今湯殿から見れば。こゝの内のかみ様かしらぬか病人と見へて取乱して居
が中くうつくしひしろ物だ あんま「ソリヤア氣違ひでござるはのし 北八「氣違ひでも。大事
ねへの あんま「イヤ聞なさい今に念佛がはじまり升は、ト此内勝手の方にてチャム、と鉦の
音して百貫通始まる(あんま「ソレお見さい。あの氣違ひはこゝの下女でお座つたが。御亭主が
ふつと。手を附られたを女房様がひき焼餅焼で。あの女をぶつたり。はたいたりして。とさく
さちけ出し居ました。が。兎角御亭主は不便がつて。夫から脇に。かこつて置おりました。猶さか
し。女房様が。やか間敷云てさうく。氣が違ひ。首をくつて死にやりました。ううする。と御亭主

は又いことにてあの女を内へ入ると。其晩から女房様のゆう霊が。とつゝいてあの女が又女房様のように氣違に成たもんだ。夫であんなに毎晩百萬遍をくりおき升(ト)ひろく吐すに。彌次郎北八も口は達者なれ共しやうは。かくびやうもの。北八「何だ幽霊がとつゝいたとは。この内へ其幽霊が出るのか あんま」出るだんか 彌次「ううをつくせ あんま」ナニううじやアおさらぬ。毎晩此の屋根の上へに白い者が立て居るのを見た者がか座升 北八「ヤアコリヤ。そんな所に泊り合せた あんま」夫にうの女房様が首をくつた時の顔色と云物は目眼をくるりを明て青鼻翹をたらし齒を喰しつて夫はく生て居るような顔であつた 北八「ソリヤアここで あんま」しかもソレお前への後の椽先で 北八「ヤアコリヤアたまらぬ。どうか。首筋がぞくぞくするようだ 彌次「あいにくじよぼく」雨が降出したは。なさけない あんま」今夜ななはきつこ出ううなこんだ 北八「イヤコレあんま殿もう寝つて下さい 彌次「アノ又たさ錠の音で一ぱい氣が引入るようだ 北八「何にしてもしまゝくしい宿を取た あんま」エ、臆病な衆だハ、く彌次「もう仕めへか。北八はどうか 北八「からアもうねよ あんま」左様はら御機嫌能(ト)あんまはいとまごひして立て行此内女夜具を持って床を取て行二人共にいつになひ。じやれもむだもでればころ。たいまじくそね入もやらす(彌次「エ、いろつのと北八今から立うじやアねへか 北八「ナニとんだ事を云ふ。今の咄でどう夜道があるかされるもんだ 彌次「夫にこの内は何だか。だ。びつろいばかりで人が少ぬから。うす氣みの悪い内だ(ト)目斗りばちくとし

て居と鼠が天井を駈る音がらくくく(ト)チウくくくく(ト) 北八「エ、鼠までが馬鹿にしてやアがつて。小便を仕かけた 彌次「其鼠がうら山しい。からア先刻から小便を仕度てもたらへて居るにヤア何だかやはらかな物が足にさはつた 北八「何だく 猫ニヤン 彌次「コノちく生めシツく(百萬遍の錠の音)チャアン(軒に落ちるあまたれ)ぼたりく(折もく)とまひ子をたつねる聲まよひ子の 長太ややい。チャアンく(二人共其夜着の内へもぐり込北八夜着の袖から差のぞき)どうだ彌次さんまだ生ているか 彌次「南まいだく。ア、時にこまつたとがあるもう小便があるようだ 北八「おたがいだ。なんぎな目に合た 彌次「何を思ひ切て一所に行ふか 北八「雨戸を明てやらかすべ(ト)二人いつ所に。こはく起いで。ろろくを障子をあげ(北八「サア彌次さん 彌次「イヤ手めへ先へ 北八「何が出るもんだ(ト)雨戸をさらりと明けた所が何か庭の隅に。白い物がちうとにふはく 北八。きやつと云てたをれる(彌次「ヤアどうしたく 北八「どうした所かあれを見ねへ 彌次「あれとは 北八「白ひ物が立てぬらア。ろして腰から下が見へぬ 彌次「ドレくトふるへながらこわい物は見たくなり。雨戸の外をうつとのぞき。是もきやつと云つて。坐敷へ這込たをれる(北八「コリヤ彌次さんどうしたチ、イヤ彌次ヤイ(ト)此さばきに勝手より亭主かけきて此体を見様々介抱して漸々彌次郎正氣ぶきければ(亭主「ヤレどうなされた 北八「イヤ小便に行た所が。あうてに何か白い物が居て夫で。此通をくびやうな人さ(亭主様先へ出是を見て)イヤあれは襦袢で盛り升コリヤくおさんやいく日が暮

四十二百驟

たに矢張り物をなせ取込ぬ。ううして先刻から雨がぼろついで来たにちもないなをんな共だし
かしコリヤお氣の毒様でござり升彌次「オニサ。わつちらアこわいと云こたアしらねへもんだ
がなせか今夜は虫の居所がわるかつたらうふな亭主ハ、お休みなさいまし」ト勝手（行く）彌次
「エ、いまし〜しひ大きに肝を冷した」トやう〜に心おちつき。様先へ出て見れば。成程女が襦
袢を取込で居る二人共小用をたして坐敷へ歸り夜着引かぶりて

初めて笑ひを催ふし。心おちつきて色々と一睡の夢を結ぶに程なく八聲の鶴の聲家毎に唄ひつ
る。いよ〜しよ。早出の馬の鈴の音シヤン〜馬士うた「晩に御座らばナア。裏から御坐れよ
マ」表くろ〜戸で音がするよサエ、馬「ヒイン〜」鳥が板家根をつ〜音「コト〜」

彌次「もう夜が明けたらうな」ト北八も共におき出れば。頓て勝手より勝手もいで急ぎ支度して立
出。此宿場在る諏訪明神の社をおがみて
梅干の飯筋の社を聞からに。守らせ給へ飯の寄まで
斯て若林の郷を打過篠原の取つきにて北八「サヤ味ううなばた餅が有サット婆アさん一ツくん
な」ト立乍ら見世先のばた餅をつまんでかつちり「ヤアコイツハ〜へぬ婆ア」ソリヤアばた餅の
かん板でおざるは北八「イヤはんは木でこしらゑたので有た。どうりでかたい婆ア」いくつ進
せまず北八「サニニツ斗りくん」ト錢を拂ひばた餅を喰ながら呼かけ「北八」チ、イ〜彌次

さん〜彌次「何だ味へ物ならちつとくれろ」北八「どうきに味へ」彌次「ドレーツ」北八「イヤ夫
から御らうじろ」ト手の平へのせて差上ると齋が来りちよいとさうらつて行く彌次「ハ、〜」
北八「いま〜しひこ〜らの癖は昔下戸だらうな」トうらめじううに空をながめて
明た口ふさがれもせぬ其上に鼻を明かせし齋のにくさよ
程なく蓮沼壺井村を打過舞坂の驛に至る。是より荒井迄一里の海上。乗合船に打乗り渡る。げに
も旅中の氣さんじは船中思ひ〜の難談高聲にかたりあひ。笑い罵り打興じ行程に頓て中ば
渡り乗合の人〜も咄草臥めい〜柳ざりに肘をもたげて居ねむりをするも有又此風景に只
とれて只黙然として居もさう（此乗合の内は年の頃五十斗の罷むしヤア〜としたる親父。いか
にもあか附たる布子を着たるか。何をか。うしなひけん。居ねむれる人〜の膝の下をさぐり。又
はうすべりを持ち上げ。しきりに物をさがしもとむるやうすにて。彌次郎か袖の下をさぐりまわす
彌次其手をとらへて）彌「コウ貴様は何だ。ととはりなしに人の袂をさぐりて何とする親父」ハ
イ御免じなされまし。私はハア。サ斗い。なくならした物が御坐るから北「あめへなくなつた物が
有なら断てたづねるがい。此船の中をこ〜も行とではな。何だ煙草入か吉世るか親父「イ
ンニイエんものじやア御坐らない北八「イヤうんなら錢か金か親父「インニヤたづねると。もう
能御坐る彌次「たづねずとよい物なら人の居寐ふりをして居る内。うとらア。さぐり廻すとアね
〜乗合人々「サア何が見へぬ。云なさい此中で物が見へないではすまぬ親父「インニヤもら

五十二百驟

たに矢張り物をなせ取込ぬ。ううして先刻から雨がぼろついで来たにちもないなをんな共だし
かしコリヤお氣の毒様でござり升彌次「オニサ。わつちらアこわいと云こたアしらねへもんだ
がなせか今夜は虫の居所がわるかつたらうふな亭主ハ、お休みなさいまし」ト勝手（行く）彌次
「エ、いまし〜しひ大きに肝を冷した」トやう〜に心おちつき。様先へ出て見れば。成程女が襦
袢を取込で居る二人共小用をたして坐敷へ歸り夜着引かぶりて

彌次郎北八も舟を上り

舞坂を乗出したるは今切と。またくひまも荒井にぞつゝ
さるにても腰の物の流たるは前未聞の咄しの種とみづから打笑ひつゝ北八
竹籠を捨て仕舞し男より。こくつふしとはもういはいれまい
夫より二人は此荒井の宿に酒汲かはして足を休めぬ

○ 四編

由縁貞柳の狂歌は。螺貝の出し昔はしらぬ其今吹は能き追風なりけりと讀しは東海道に名だ
たる今切の渡しになん。其かみ明應の頃山の奥より螺貝あまたぬけ出。夫より海上あしく成たり
もを。元祿年中公の命によりて海上に數萬の杭を打。蛇籠をふせ。往來渡船の難澁をすくひ給
はりし。御惠の有難さは。風和らぎ。浪低く成て。渡るに難なく。かの彌次郎兵衛北八。爰を打渡り
て。荒井の驛に支度とものへ。名物の浦焼に腹をふくらし。休み居たるにげにも。往來の貴賤絶間
なく。舟場へ急ぐ旅人は足も空に。出舟を呼ぶ聲に連て走り。問屋へ掛る幸領は口やかましく。課
役に觸る馬差についで罵る。旅籠屋の棧は横ちよに曲て走り茶屋女の前垂筋逆ひに引つゝ
飛ぶ長持人足。横に立てうたひ。馬士後を向て。ひよぐりながら。行道すがら唄うらが生松は浪
名の橋よ。今はとたへてエ。音もせぬヨエ。アウ。茶や女。お休なさりませア。コレ馬士
どんお下申さつせへ。馬士「サット旦那様ッリヤおつむりが浮雲（ト茶屋の軒下へ馬を引入る

此の輕尻に乗たるは。方綿の鼠小紋に。ひうちちの所。黒細子を當たる。ぶつさき羽織を着たるお侍
馬よりかりて。北八と彌次郎が休で居る向のしやうぎに腰をかける（茶や女「お茶あがりませ（ト
茶を汲て来る。お侍女の顔をじろりと見た跡にて茶碗をとり）侍「モウ何時じやろふ茶や女「九
ツ半でもお坐りませう馬士「さんによりの今時分じやろふが侍「支度致さう何ぞ有か茶や女
「おなきの浦焼がお坐り升侍「何じやお内儀の浦焼か馬士「御亭主の泥船表はなぬかな。ハ、ハ、
ハ、ハ、時に旦那様お荷物は是に置升。お小づけと丁度五ツ侍「其買差はこれへたもれ馬士「ハ
イ、モシ旦那様ちとお願がお坐り升へ、どうぞ御酒を一盃たべさうお坐りませ侍「ホウ
御身酒がすきか馬士「ハイ飯よりはすきでお坐り升侍「遠慮のなぬとじや勝手は香やれ。身共
たべうづならバ。ふれまをふものを。かにもく下戸じやから。せひがなぬ馬士「ハ、旦那様はあが
らぬとも。ハイどうぞ。頂戴たふお坐り升侍「ハ、ア解せた。お身酒手をつくせと云のじやな。イヤ
罷ならんぞ道中御定法の賞錢共。相拂つて罷通る。別に酒手などを云とは。決してならんぞじや
馬士「左様ではお坐り升か。どうぞ底を侍「イヤたつてといはい。遣はらふが。賭取書をしやれ。
身共歸國の節。問屋共へ相届る馬士「いつたい輕尻のお荷物には。重過てゐるから。どうぞ御
最箇なされまして侍「然はソレ八錢も遣はらふ（トくわんざしより八文ぬいてやる）馬士「ハイ
せめて十六文下さりませ侍「然ば身共了箇の以て今四文遣はらふ（ト錢四文はふり出してやる。
馬士「ふせう、に取て馬を引行侍「コレはさて、南無三寶あやの最ふ何處へか行おつたらう

な。身共大切の草鞋を。馬に附て置たが。以て行かたううじや。残念な。江戸迄はかれる草鞋じやものをトぶつくと小とを云ふ北八おかしく) 北八「モシあなたは江戸へお下りて御座り升か侍」左様く、北八「今承り升れば。草鞋一足を江戸迄おはきなさんと見へましたか。けしからぬ道がお上手で御座り升の侍、イヤ身共手作に致した。草鞋じや程に。一足有といつも。江戸迄行戻りはきををり升、彌次「ほんに草鞋の切るは。あるき下手で御座り升が。あなたは路がお功者なとだ。然し私、此草鞋は一昨年松前へはめて着たか。此迄何共御座りませなんだから。しなつておめて。去年長崎へもにめて参るし。うして又今度はめて出ましたが。御座りませ。まだ何とも御座りませぬ侍」ハテ扱て手前は身共より道が功者じや。いかい致せば其よふに久しく草鞋がはかれ升な、彌次「ナニサ草鞋ははき暗にしても切れませぬが其代り、私はどうも脚程が切て成ませぬ侍」夫はどうして、彌次「私は旅へ出ますると馬に乗つめに致ますから北八「おきやアがれハ、くくく」彌次「サア行ふあなた御ゆるりとアイお世話」トこの勘定をして立出。此宿はづれより二人共二川迄の駕を取て打乗り。行程にハヤ高師山。橋本の北に見ゆれば彌次郎兵衛れいの狂歌を口づさむ)

此あたりにて。向より来る二川の駕に行合、二川の駕かき「どうじや親方。かへていかすにこちらの駕かき」なんばおこす、二川の駕「げんこやらすに。夫でいじや御座り、こちらの駕や」まーよ

榎組まけてやらアす(ト駕の相たんできて雨はうの駕かき) 且那樣方駕を替へ升から乗替て下さりませ、北八「二川迄打越だがい、か」と此内二川の駕に乗来る男。こちらの駕に乗すれば。北八も彌次郎も先の駕に乗移と。北八をのせたる駕かき) 且那仕合じや、「コリヤア宿屋駕でお坐升からし浦團がしめて有丈。お前方に替さしやつたが。お徳といふ物じや、北八「ほんにううだ」トいつ、駕に。したじきの浦團高くつり。いたるに心づき。何心無く浦團のあいだを探り見れば四文銭一本有。借は今迄乗て来た男が。袋に置て忘れたと見へた。何でもこいつせしめうるべしと北八うつとかの一本をふのがふところへちやくばくして。うしらぬ顔をして居る。此内早くも白須賀の驛に至るに這入口の茶屋女。表に出づ呼たつるを見て彌次郎兵衛

出女の顔の黒も名にめて。七なんかくす白須賀の宿

此宿を打過。程なく汐見坂にさし掛るに。是なん北は山ついきにして。南に若海漫々を見へ絶景まこと云斗りなし

風景に夢敬あつてしをらしや。女が目元の汐見坂には

(北八が口づさみたるを駕の先棒きつけて) ハア且那は多し歌人じやな。アレ向ふの山を見さしやりますし。鹿が居かり升は北八「ドレ」是は面白い先棒「めいよふお江戸の且那方があんな面白ふもない。ちくせうめを珍らしがらしてやつて。きんにようも發句とやらを言つしやれたか人が有た北八「おれも今の鹿で一首よんだ。貴様たちに云て聞せたつて。馬の耳に風だろ

ぶこういふ歌だ。奥山に紅葉踏わけ暗鹿の聲聞時を秋はかなしき。何と奇妙か。後棒且那
 はゑらひ者じや。わしどもはかいもくしらぬが。何にしされ。歌が直にひゆつと出るといふもん
 じやからゑらい。北八鳥渡した所が此位な者よ。イヤ貴様たち。あんまり説いて呉たから酒が
 呑し度成た爰は建場か。先棒猿が此場でお坐り升。サア棒組一ふく吸ていかアサ。ト茶屋の門
 口に親をゑろして休。北八皆な一盃つゝ呑つし。コレ女中うこへ酒を登升でも二升でも味へ酒
 を附て出してやつてくん。彌次郎駕の内にて。サヤ北八どうした大分おうふうなとを云な。北
 ナニ鳥渡呑せるが何所でも此位な物だ。ト先刻ひろいし四文錢一本を出して見せかける。彌
 手めへ夫を皆なゑごるか。北八しれたとよ。彌次面白へおいらも御馳走にならうふ。ト彌次郎
 駕を出て見世先にすはると頓て女が酒肴を持出る北八を乗たる駕の先棒。是は有難お坐り升。且
 那いたいき升。ヨリヤ。棒組何所へ行たヤイ。皆な来されの。先刻の猿丸太夫様が御座を下さ
 れるは。ト親かき四人寄こぞりて呑掛る。彌次郎もかしく。おもはれ呑掛る北八は一番へこま
 されてだんまり也。彌次「サア。御亭主いくらだの。御酒代は駕の旦那がお拂ひだ亭主ハ
 イ。酒と肴で三百八十文でお坐り升。北八「ヨリヤ。どうてきに食やアがつた。トふせう。に
 かの錢を拂てしもふ。親かき心付き。ヤほんに棒組先刻の一本の錢はどうした。棒組「サ、夫々
 モ。旦那あなたに乗てお坐らしやる。布團の間に四文錢壹本入て置升たが有か見てくだされま
 せ。トいはれて北八びつくりし。ナニ爰にか。イヤ見へ無はへ。駕か。ナニ無はあるまい。

に入て置ました。彌次「先刻見りやア北八手目へが布團の下から出てひねくり廻し居た錢じやア
 ねへか親かき。夫でお坐り升。ト北八心の内にいま。しひとを云と彌次郎をにらむ。彌次郎か
 かむく脇のほうをぐつとふり向てゐると北八仕方なくふどころから一本だして布團の下へうつ
 どいれ。北八「サ、爰にあつた。親かき「サア棒組此元氣でやらかうふ茶や。よふお
 坐りました。ト親をかき出す。彌次郎おかしうこは猿が番場にてかしは餅の名物なれば。
 ひろふたと思ひし錢は猿が餅。みきから左りの酒にとられた
 斯打突て。行程に境川と云ふに至る。爰は遠江三河の境にて橋あり彌次郎地口にてよめる
 遠州へつき合せたる橋なれば二かわの國と云へかりける
 程なく二川の驛に着。此所家毎に強飯を商賣ふ家見ゆれば
 名物はいはねどしるき強飯や。これ重箱の二川の宿
 兩側の茶屋とぞに旅人を見掛て呼たつる女。お休なさりませ。あつたかなお吸物もお坐りま
 す。無糖の肴で酒でも。お飯でもあがりませ。此茶屋の門口に居る雲助北八彌次郎を乗たる
 駕かきを呼掛て「ヒヤア八兵衛。替てうせれたな。畜生め。早う行か。が番をされ。密夫めがしけ込
 でけつかるわ。彌次郎を乗たる駕かき。あはうめおせれが所の親父めが首釣てをるこたアしらす
 にくうたれめ。ト。ト。ト。を打過き問屋のすこし手前に親をゑろす。彌次郎兵衛北八こ
 ちよりおりて行と。此宿は何れの殿様にや小休と見へて。御本陣の前に乗物たてつゝ。數多の

御同勢馳せ違ひ問屋袴腰をねじりて。盛廻り。野村ふん込のか侍衆御本陣へ相つめるを見て北、ハ、アお屋敷だけ大屋様も二本差でゐるな。彌次「馬鹿ア云な踏込さへはいて居ると大屋だと思つてけつかるううだ北八「アノ乗掛を見な。どうきに布團がかさねてあらア彌次「其等だ乗て居る人の天窓を見や。叶ふ福助と云もんだハ、くくく。ソレ馬が来たア馬ヒンくく彌次「アイヌ、くくく。わりの所に台羽籠をひきやアがる（トけつまついて小言を云とお雇の仲間体のみゆる）男コノ野郎め。台羽籠に土足を踏掛やアがつてふてへことをぬかしやアがる。横面アかぶりかくア彌次「ハ、くくく。大江山の飯時じやア有めへし。顔アかぶりかくも氣がつる。仲間「何だこいつ。ぶちはなすぞ。彌次「貴様たちの赤筋でナニ切る物か。仲間「ううぬかしやア切にやアならぬ。コリヤ角助お身の腰の物を鳥渡借しやれ（トほうばの角助が腰の物を取に掛る角助）コリヤく切ならばお身の刃物でなせきらぬ。仲間「ハテ喧ましい。どれできつてもいじやねへか角助「イヤよくない。仲間「ハテしはひ男だ鳥渡かしやれな角助「イヤお主も氣がさかぬ男だ。おれがほんどうの脇差は鎧持の樋右衛門へ二百の方にとられたを。お身様もしつて居るじやアねへか仲間「キニううだ。エ、コリアおのれ打はたすやつなれど。ゆるしてくれう早く行。彌次「イヤ行めへサア切く（トつゝかゝる。皆々此喧嘩をおかしがりて引分もせず見物してゐるとかの仲間）エ、ううぬかしやア了箇がならぬ突殺してなぐれふ（ト引抜てつきに掛る竹光を彌次郎引つかんでねじたをせバ件の男）仲間「ヤアレひと殺（ト此内早

殿様のお立と見へて押へのひやうし木）カッチくく（うりやか供揃へと。さわぎ立。御同勢に連て喧嘩も。夫ざりとなる彌次郎も是れ幸に北八もろ共にこゝをのがれて足早に行過）彌次「ハ、くく大笑ひの喧嘩だ。脇差の扱身は竹と見ゆれ共。喧嘩にふしはなくて目出だし。夫より此宿を出て。たどり行に。早くも大岩小岩を打過岩穴の觀音を。ふしおがみて。行掛の駄賃におがも觀音も。尻くらぬとは岩穴の内。げにも旅のきさんじは差台くらす。高聲に咄物して行うちにも。さすがに退屈の欠しながら北「ア、草臥たちつと斗りの風呂敷包や紙ノ羽も。中く邪魔に成物だコウ彌次さんお目への荷とわつちの荷と一所にして坊主持にしようじやアねへか彌次「コリヤア面白へさいはひ爰にい竹が捨て有る（トひろひ取て二人の荷物を竹の先にくくしつけて）彌次「サアく北八「手前へから持てい北八「年役にお目へ始めさつせへ彌次「うんなら狐拳でやらふサア。こい。ヒイッウミノ。おつとめた北八「エ、いめへまじひ（とひつかだけて行く向から来る旅僧法華宗とみねて）僧だぶくくくだぶだぶだぶ。フニヤくくくだぶくくく。北八「ソリヤ彌次さんわたしだぞ。彌次「ナット取取。其次の坊様はぞうた早く来ればいいに（ト又向よりくる乗掛馬の鈴の音）シャンくくく。馬士唄「高い山から谷底見ればエ。お萬かはいや。布さらすナアエぞら。彌次「きたぞく。お船符は勸願所ソレ馬の上に御出家由か北「あんまり早いな（ト請取て

ひつかつき行。道の片はらに「いざり」御らんの通り足のかなはぬ。ぬざりに御はうしや北「イヤアこいつ坊主だ一文やれ 彌前のから見ると。坊主のようだが。後を見やほんの羅に毛が有は北「おきやがれい、くく」(此内跡より。びくはが三人づれてゆびにつけし管をならしてうたひくる)「明身をやつす腹が思ひを夢程にしらせたヤゑいろうや。夢程にしらせたヤサアサさんからへく北「あだやいな聲がする(トふり歸り)ヒヤア比丘尼だくさア彌次三。渡しやす「彌三、いめへまじい北「人に荷を持せるは。中くい物だ。是でお供を連た心持だ。ヤアくやていつらアなんざらでもねへ。彌次さん見せいこちらの比丘尼がおれを見て。アレいつらにこと。愛敬がこぼれるようだ畜類め 彌次「愛敬のいひのヒヤアねへ。アリヤア顔にしまりのねへのだは北「悪く云せ(ト此内跡になり先になり行く比丘尼はまだ年も廿二三今獨りはとしは十二三の小比丘尼と共に三人途中にも若い比丘尼が北八のうばへよりて)若あなた。火はお座りませぬか北八「アイく今打てあげやせう(ト摺火打を出してかちくく)北八「サアお上り。時にお前方アどけへ行なさる 比丘尼「名古屋の方へ参り升北八「今夜一所に泊りてへの。何と赤坂迄行なせへ。一所にしやせう 比丘「夫は有がどうお座り升。モシどうぞお煙草粉を一ツぶく下さりませ。とんと買のを忘ました北八「サアく煙草入を出しな皆な上よふ 比丘「夫ではあなた。おとまりでお坐りませしよ北八「ナニわつちやア。山さ時にお目へ方のような。うつくしい顔でなせ髪を剃なごつた。ほんにううして置はふしひ物だ 比丘「ナニわたしらがたどへ髪が



有たさて。雖も撰人はお坐りませぬ 北八「有だんて。わつちらア一番に撰氣だ。何とかなはしてくんなざらんか 比丘「サア、くく北八「早く一所に泊りてへ 彌次さん此先の宿へ最ふ泊ろふじやねへか 彌次「馬鹿ア。ぬかせ。あやにく坊主のくるがさされた(トこいといながら行程に。火打妙を打過。二軒茶屋に至ると此所より比丘尼はわき道へ這入る 北八「コレくおめへたちやアどこへ行。うつちヒヤア有めへ 比丘「ハイ是から分れ申升。わし共は此在郷へ廻て参り升から(ト野道をさつくく)と行過る。北八あきれて見送ると彌次郎兵衛おかしく吹出し「くく。北八手めへ今日は夫分つけがはりいせ北八「エ、どんだ目に逢た。どうはらな(トうつかりしてぬる後からはつたり行あたる往來の人北八「ア

つん透申た。夫からハア名主殿へ寄合付けて最ふ此村へ江戸役者ア入るなと談合のめして私共が其筋のどやアで自言のウおつばじめ申たが。江戸芝やよりかア。ふち潮る石流行川した(トいさせいはつて。とはすがたり自慢らしく咄おつて行まゝに。いつの間にかは大雲寺に至る。此所は甘酒の名物なればかの人々は打連て此茶屋に休む彌次郎兵衛北八は急ぎこゝを打過るとて)

いや高き御寺の前の名物わ。是も佛になれしめまざけ

斯て此渡りより早日も傾き暮に近ければいさや急がんとて草臥し足を早めてたどり行道すがら北八「どうだ彌次さん母が明かねへの彌次「大きに草臥た北八「何と夕べの宿りは中位の宿で有たが今夜はこうしやせう赤坂迄わつちが先へ行てい宿を取やせう。お目へ草臥たなら。歸から徐かに來なせへ。宿から向ひの人を出せて置やせう彌次「夫はよからう。しかし宿はさうでもないから。たばの有ううな内にしやれ北八「呑込山(ト此所より駈抜けて先へ行彌次跡よりたどり行に。程なく御油の宿に入たる頃。はや夜に入て雨側より出來る宿の女何れも血をかぶりたる如く塗立たるが袖を引てうるさければ彌次郎兵衛やうくと振切行過ると)

其顔で泊だてなさは宿の名の御油るされいと逃て行や

彌次郎兵衛。餘りに草臥ければ。先此所。はづれの茶店に腰を掛たるに主の婆やア茶ア茶ア升せ彌。モシ赤坂迄は最少したの。は。アいたんだ十六丁を座るが。おまへ一人なら此宿に泊し

やりませ。此先の松原へは。わるい狐が出をて。旅人衆が能化され申は彌次「うりやア氣のねへ話だ。しかし爰へ泊りたくても。連が先へ行たから仕方ねへ。エ、氣ついこたアねへ。やらかしでいれやう。アおせは(ト茶代を置き此所を立出行に暗さは暗し薄氣味思く眉毛に唾をつけながら行くはるか向にて狐の啼聲「ン引(彌次「ソリヤ啼きアがるは。おのれ出て見ろ。打殺してくれふ(トりさみ反つて。たどり行程に。北八も先へ駈ぬけ。此所迄來りしが。是も爰へ狐か出るぞ云咄しを聞てもしも化されてはつまらぬと彌次郎を待合せ連立行んと思ひ土手に腰を掛け煙草を吞居りけるが夫と見るより)北八「チイ(彌次さんか彌次「チャ手前なせ此に居る北八「宿取に先へ行と思たが爰へは悪い狐が出ると云とだから一所に行と思て待合せた(ト云に彌次郎心付。こいつ。さやつめが北八に化たなと思ひければ態とよはみを見せず彌次「くろをくらへうんなで行のじやアねへは北八「チャお前何を云ふうして腹が減たろう餅を買て來たから喰なせへ彌次「鹿馬ア拔せ。馬糞が。くらはれる物か北八「ハ、(コレおれだはな彌次「おれだもすまじい北八に其まいた能化やアがつたちく生ぬ北八「アイマ、(彌次さんコリアをうする彌次「何するもんか打殺すのだ(トうつかかりした所をぐつとつきたをして彌次郎の上へ乗り掛かりおさへ)北八「あいた(彌次「いたかア性体をあらはせ(北八「コレ尻へ手をやつてさうする彌次「さうするもんか。尻尾を出せ出さずばさうする(ト三尺手拭をさき北八が手を後へ廻してさける。北八おかしく北八わざとしばられてぬると彌次「アサ(先へ立

水風呂へも這入めへ、北八「エ、お前もい、かげんじな。さうとは執念深へとつた彌次、ヤイ、くめつたに油断はならぬ。此硯もな。こんな味ううに見へても性は馬の糞や犬の糞だろふ。北八」キ、ニ。さうだろふから。おめへは見て居なせへ。こいつは有がてへ。おじぎなしにやらかしてせう。ト北八手酌にてさつと香掛る彌次郎は、じがきたなくさすが見ても居られずまじくして、彌次「いめへまじい氣を。わるくさじやアがる。北八」きつげへはねへ。一盃香なせへ。彌次「イヤ、馬の小使だろふ。トはほひをかして見せや。ムウ、こりやアほんどうの様だ。さうもさうへちれぬ。ト、さうもさうかせ。ト一盃ついで香み舌打しながら、酒だ、ト、さつと香ア。ト、此玉子はさうも色相が氣にくわねへ海老にじよう、カリ、こいつは本さうの海老だ、ト引かけ、さつと。さつと。さつと。と香掛る此内勝手の方はわんがくの音。がたびとさわがして取込さし、中別座敷には早婚禮の盃事始りしと見へてうたひの聲する。四海浪靜にて國も活る時津風枝をならさぬ御代なれや。相に相生の松こそ目出たかりけれ。北八「ヤシヤア、彌次」コウやかまじひわへ北八「やかまじひは、い、が。お目へが先刻から盃を放さねへ。ちつとこつちへ廻じな。キ、ニ馬の糞だの小使だの云かと思やア聞ても一人で喰やつさへ。く、彌次」やらア正直化された氣に成て居たが。今思やア。さうでもねへ。とんだ苦勞をさせやアがつた。北八「エ、お自への苦勞したよりがアからア縛れて、さうな目に合た、ト、此内勝手より隨も出使をする内奥の座敷にて又唄ひうとさ。千代も替はらして幾千代も衆に染ゆる松梅

の二葉の竹を夜をこめて老と成道と結を樂しかりける。目出たひく、三國一の嫁を取すまわた。しやん、ト手を打た、さうもめき渡る。此内勝手より女來り、あなた方最ふお床をとりまじよか。彌次「うんなどにしやせう。北八」コレ女中祝言は最ふ濟やしたか。定めて嫁とはうつくしからふ。宿女「アイサ。もて様もよい男の嫁の様もあらひきりやう由でお座り升。お氣の毒などはあちらの座敷に寝やしやり升から。おつ事が聞へまじよ。彌次「何だうんな手合と割床はあやまる。北八」こいつは大變、宿女「モウおじぎまりなさいませ。ト出て行。二人も其ま、ねかけると早ふすまひとへ隣の座敷にむこを嫁がねるようす。ひうくと咄しするを聞はしたじから。御事にて貰ひし嫁と見へて中、初たい面とは見へずぶつたりつめつたりして。いちやつく様子手に取るように聞へ。彌次郎北八はねもやらす。彌次「エ、とんだ目に合しやアがる。北八」ホンニわるい宿を取た。人の心も知らず。何んだかおろろしくもつまじぬ畜生め彌次「サア咄聲かやんだからむづかし。ト段々布圍からのり出隣の様子を聞耳立て。ねられぬまじに彌次郎ろつとおき立。さうさうの間から差覗く北八もはだかのまじはひかけて。北八「コウ彌次さん嫁はうつくしいか。おいらにもさつと見せてくん。彌次」コリヤ靜にして肝心の所た北八「ト、見ねへ。彌次」コレ引張な。北八「夫でもさつと退なせへ。ト彌次郎が夢中に成てのぞきいるを引のげんと引張てもめかじとぬちばるはみだ。はつたりふすまが、あちらの間へたをれると一人共にふすまの上へこぼひる。もても嫁もあしらうたれてさうさつと。トもて「あいたく、

コリヤをやつじやいなんせ唐紙を打こわいたトはねをかきた所か。行燈もひつくりかへして。具くら開彌次郎は。ちやつとにげておのがね所へ這込。北八まごくしてかのむこにつかまりせん方なく北八御免なせへ手水に行とつて。ツノ戸まごひやしやした。せんでへ爰の女中がわるい。夜座敷のまん中に行燈を置から夫にけつまづいてお氣の毒だ。ア、小便がもるようだ鳥渡行て来やせうこをはなしてくんなさへ。むこいや早あされたお人達じや。夜着も布團も汕だらけになつた。コリヤおさんく。だれぞ早う。おこしてくれぬかト呼たつる聲に勝手より下女が火をともして来りそこら片づけるに北八も手持なくはづれしからかみをはめて引立やう／＼にことばり云て。元のねをころへ歸りすく／＼とね掛る彌次郎おかしく)

北八も夜着打かむりながら

寝て聞ばやたらおかしや唐紙と。共にはづれしめこの掛がね

御嫁の寢屋をむせうにかささとし。我は面目うしなひしとて
 斯打興して。夜も更け行まゝに。双方際まり。只めびきの聲のみ高くなりぬ。鶏の聲萬戸に響きて引つる。裸役の馬の嘶さいさましく。すでに夜明ければ彌次郎兵衛北八もおき出。あら増に支度とこのへ。早くも赤坂の宿を立出けるに。此の宿の出端より跡になり先になり行三人連の旅人。是も江戸者と見えて。少し頭み肌の色舌にて咄行を聞ば。一人の男「コウタへの泊はおかしかつたな今一人」ソレ何だか奥の間に泊つて居た。やつらアさのきかねへ野郎共だ。宿の細道が有



を羨ましがりやアがつて襖の間から覗き居て夢中に成。そう／＼襖をぶつこかしやアがつた。大笑ひな。べら棒共だ今一人」夫から其聲にめやまるさア。あの騒ぎでおいちもろくに寝られなんだめへまじい一人の男、ろしてアノ一個の野郎めは何だか宵に宿の亭主を呼やアがつて。この家は亂搭場じやアねへかと云やアがつたが。あのべら棒めはどうでも氣が觸て居ると見へるト此手やい夕へ彌次郎北八が泊し家へ一所に泊たて見へて此咄をするを彌次郎聞て大きにあつく成足早にかけより詞を掛(彌次「コレ貴様達やア先刻から棒たア何のこつた先の男、ナニこんた衆のとじやアねへこつちのとだは彌次」こつちのと云とがあるもんか夕べの宿でのをぬか

すたろふ其徳をぶつてかしたべら棒と云たアおれがまだは旅人「ハアこんだ其べら棒か彌次、
チ、其べら棒だ旅人」ハ、くべら棒だからべら棒と云たがいひじやアねへか彌次「イヤ、こ
いつわるくしやれやアがる旅人」糞を喰へ彌次「何だ糞を喰へコリア面白へ喰へひから持てう
しやアがれ」ト彌次郎。真黒に成てりきむ。されど合手はけつき盛のいさみのてやい馬の糞を杖
の先にかけサア持てきたからくらくらへ。彌次「イヤ馬の糞はさらひだ旅人」さらひと云とが有
物か是非喰せにやアおかぬ」ト三人掛て彌次郎を手込にする北八おかしく中へ遣入」北八「イヤ
最う御免なせへ。たまたも同前で御坐りやす三人」ハ、アかんじんしてやろふ」ト行過彌次郎迎
も叶はぬと見て只口の内にぶつくさく」此内桐の木。中柴を打過山中に至る。爰は麻の細袋早
繩などを賣賣所なれば北八

御佛の招ひと見へて寶藏寺。南無阿彌陀はこゝの名物

斯て藤川に至る。棒鼻の茶屋。軒毎に生着をつるし大平皿鉢見世先に並べ立て旅人の足をどくむ
彌次郎兵衛

湯で蛸のむらさきいろは軒毎にぶらりと下る藤川の宿

夫より此宿を打過。出はなれのあやしげなる茶見世に休みて北八「何だか業てきに出が。かぶる
婆アさん素湯は有めへか婆」ハア素湯は御ざらぬ水をしんせませすか北八「エ、薬を呑の
だは。コリヤたまらなく成た。時に雪隠は何所にある。彌次「何所にとつて。うんなに家を見廻

しても雪隠か壁の上には有物か裏へいかッし北八「ヒヤアつきたあたりに見へるはく」ト表へ出
。雪隠へ。行しぱらく用達て出てあたりを見れば此裏に物置を住居とせし一ツ梁有り内に十八九
の娘髪は取みだしぬれ共中くの上しる物。只一人居る様子。北八れいのはるじやれにて。すつ
と此内へ這入笑掛「北八」モシ御無心ながら。水を一ツ」ト手を洗ふ内娘はけら、笑て居る」北
八「コウ姉さんお目へ何を笑ひなさるうして一人爰に居なさるのか無用心な」トあたりを見れ共
外に人はなむ北八腰を掛てたばこすい付へ」きみのわりい何を見て笑ひなさるコレサ何を笑
ふのだよウ」ト娘の手を取て引張にさすが振切もせず。やつぱり笑てゐる。北八こいつは有難。
もうしめたものだと。ぐつと引寄る。いつの間にか子供が見附」ワァイ」あの人は氣遣と色
事をせる。ヤアハ、ト大聲を上げて笑ひ駈出す北八びつくりしてにげのかんとするに娘はつかみ
つめてはなさず」娘「エ、此男め。はなさんく」北八「是は情けない」トむりに引放さんとする
所へ此娘の親父立歸りて」コリヤ我徒は若いお女子をとらへて何するのじや北八「イヤ何にも
しませぬ親父」せんものか。何條女一人ある内へ這入うつせた。コリヤ承知ならんわい北八「ナ
ニサ今用達にいつて。ツイ水を賣た手と親父」オンニヤあれは氣遣で御座る。こなさん氣の遣つ
たものをとらねて。なぐさみ掛さつせへだに違ひはあらまい北八「ナアニとんだを親父」イ
ンニヤ。すまんく氣遣とあなごつて。ひゆつとこなさんが。やりからかめたに違やしよまい兎
角云つせるな此分ではすまんぞ」トわめきちらかし大さわぎをやらかす。此内彌次郎表の茶

見世に待たたりしが。北八手水に行て歸らぬゆゑ跡から見に來たり。先程より此ようすを影に見てゐてかかしさこらねられずしかしもう出掛てやらふトのうく出來り彌次「御免なせへわつちやヤこの男の連の者だがいさめ聞やした。こいつめもあのように見はてても。有やうはちつと氣がふれてゐやす。了簡してくんなせへ。エ、此野郎め能世話をやさせる。アノ顔はよアレ見なせへきようくくする顔が証據。娘子は女丈まだしも。イヤモ此氣遣にはこまりはてやす親父「イヤくううではあるまい。ナニあの人が氣遣な者か彌次「ハテサあの顔付を見なせへ。アリヤくあの通りだ北八「何だをれを氣遣へた。コリヤ面白。ハ、ア降はく。アレく。花のふぶきが散やたらり。うんきんたらり。かんきんちりり。ちりかゝるよふで。かいとじゆてねられぬと。ト、ハ、ヤアろこに居る女房共か。イヤ好女房じゃにく。コリヤのはひはひ。さんなわろかいなヤンヤア彌次「アレ御ろうじろあの通り其くせあの面で色氣遣さ夫だから女と見るとびろくして。ほんに恥を云はにヤア理が開へませぬが。こいつめは。わしが弟でイヤモこんな困果なこたア御坐りやせん親父「ハアこなさんが。うう云はせるとわしもかなしひ。見さつせる通りたんだ一人の娘が此病でわしは。おつきな苦患で御座る彌次「さつしてをり升。エ、此馬鹿野郎め。何をげらく笑のた。時に親父さん。おやかましう御座りやした親父「マア茶でも呑で御座らつせへ彌次「最うめへりやせう。サア氣遣めうせおれト彌次郎がちらくらにやうくと納まり。彌次郎北八を連れてこいそのがれ出掛け。果は大笑ひと成て)

言譯たる娘はほんの氣遣ひに。こちや間違ひとなりし目違ひ
 斯打興じて。こいを立出行道すがら彌次「コウ北八手めへもそんな者だ。氣の遣た娘をどらめへて。どうしやうと思て業さらしな男だ北八「へ、面目次第もねへ。しかしわつち迄を氣遣ひとは彌次さんありやアお前へ一生の出來だせ彌次「酒でも買ひやれ時に夫に附て咄が有る丁度手めへのよな氣間ぐれ者が。氣遣ひの女をとらへて。じやらつきを掛ると其女の親父が見附て腹を立て。ヤイ此野郎めは人の内へことばり。なしに牛込やアがつて。娘をちよろまかうとか。ツリヤ赤坂へいだはへト云ト。手めへもまけぬ氣に成。イヤうぬ何だ口ばしを。とんがらかして四谷鷹のようだと茶かすと先の親父かサ、おれが四ッ谷鷹なりやア。うぬは八幡様の鳩だと云ふコリヤおかし。此北八がなせ八幡様の鳩だと。云と親父がハテ貴様は氣遣の豆を喰ふと。したじやアねへかど。ハ、く、北八「何だ市谷の地口はわられる。ハ、く、打笑ひッ、行程に小豆坂を過。岡の江遊泉寺を打越て大平川に至る

岸に生ふ芹の青みに小帳まで。水にひたれる大平の川
 夫より大平村を過行程に。岡崎の驛に至る。此は東海に名たる。一勝地にて殊に賑はし。雨側の茶屋いづれも奇麗に見へたり茶屋「お休なさりませアし。お飯をあげりませアし。よい諸白もお座りませアす。お遣入なさりませアし。彌次「ナント眼が少し御座つたじやアねへか北八「いかさま此でお小休とやらかうふトある茶屋へ遣入内の女「ようお出なさりました彌次「姉さん

お飯にしよう何を味へ物はなしかの 茶や女「ハイよい餅の着がが升北八」ナニ餅の生酢だ 茶屋女「チホ、く」ト笑ひながら頼て餅の煮びたしをつけてせんをもち来る。彌次「ドレ、こいつは味へ。ううしてどうてきに白い飯だ 北八「エ、外聞のわるいを云アレ女が笑て行ア。あいつめは顔ぢうが。然だはへ 彌次「隠なら宜が。ほうべたが窪んで。踏返しの馬蹄石と云もんだ、く」ト例のわる口だらくしやれてゐると此の内。奥座敷には近在の客三人斗。此宿に居續けし歸り掛を見へ合方の女郎。此所迄送り來りしと見へて。別れの酒盛大さわぎにて此宿の小浮節うとふ聲にぎやかに聞てゆる。唄「菊に聞せ垣結こめられて。今は忍ぶに忍ばれず。チツテレトツテン」ト大騒ぎをやる故北八彌次郎奥の方を覗見れば一人の客の聲として「コレ、太兵衛酒盃はどう爲のじや 太兵衛「イヤ仁兵衛の側はあらアす 仁兵衛「ドレおらひらをふ 太「あらためていこしやれ 仁「サト、く」 此様に歸ては兎角はあらまい。ンレううふかい 太「チツト餅た。ひゆつと。やりからかいて。是からいもつこふへ。もどろうまいか但しは枳屋か丁子屋へいこふまいか 女郎「くの「なんじやいしア。太兵衛さんはナア。酔なるとナア。あの様など云てじやナア。外へやり升とはナアならまいわいなナ 太「イヤ、くかゝる折柄櫛屋で。手形請取たじろ物が有から。いかざならまい 女郎「ムウううかいし 仁「ううともく」 仁「チツテレトツテン」かねて手管とわしや知ながらだまされて咲室の梅、く」ト此内輕尻の馬三疋をつ立來り。此茶屋の軒につなぎて馬士共中庭より奥へ通る。且那方に向ひに参りまじした 三人「御ん

義くか名残を惜が。是でわかれざならまい 女郎「ひさしふりて。是から又鳴海の小鶴さんじやをませんかいな 太「ハ、く」サアいかうまいか 茶や女「御機嫌よう」トうれく」に挨拶する。内三人の客は各々輕尻馬に。打乗暇乞して乗出す。女郎送出て様く」のじやれもあれ共略す彌次郎北八しばしこのていを見て女郎買の輕尻馬で歸るもをかじひと打笑ながら」
 三味線の駒に打乗歸るなり。岡崎女郎衆買に來れば
 斯て二人も此所を立出 宿外れの松葉川を打越矢矧の橋に至る
 欄干は弓の如くに反橋や。是も矢矧の川に渡せば
 夫よりうたふ坂町尾崎の郷。今村の建場につく 茶やば「名物砂とう餅を召さりまアしお休なさいまアしく」北八「チイ此餅は幾ら宛だ餅や」三文で御坐り升 北八「こいつは安い。こちららうづら焼はいくらだ 亭主「夫も三文 北八「イヤ是は三文では高ひようだ。ナント御亭主こうしなせへ。是を二文にまけてくんなせへ。其替りうちの丸の餅は四文に買やせう」亭主「こいつはへんちきなをを云と思へをもちらにしてもうんのいかぬ事故」亭主「アイよう御坐り升お取なさりませ」北八煙草入から錢二文取出して「四文あらは。丸いのを買ふと思つたが二文有から此うづら焼にじやせう」ト鶴焼を取りて打喰らひ乍ら行く 彌次「ハ、こいつは北八出かした。さすかの亭主も肝ばかりつよして居やアがつた 北八「ナントちゑはすさまじかるう 彌次「へへべら締め。かれも其位ぬなを仕衆るものか、く」

わづかでも欲には耽る鶴焼き。三文程のちぢきふるいて
 かく興じ笑ひ連て西田海道より半里斗北の方に名にしあふ八橋の舊跡を思ひて
 八橋の古跡を讀もわれくが。かよはぬ恥を杜若なれ
 程なく池鯉鮒の驛に至る馬士宮で泊ろうかお龜にしやうかナア。但しや岡崎能女郎衆ナヤ
 ウく彌次「いぬへましい草鞋で足をいためた。ちつとの間だ草履で行ふ。モシく此草履は
 。いくらだね亭主「アイく十六文でお升彌次「こいつは安い（この亭主は伊勢者にて商な
 ひは巧者なり）亭主「アイお安うおますはひな。わたしの所のぞうりは。しゆつと丈夫で。ねから
 きりや致しませぬ北八「根からア切めへが。先のほうから切るだろふ亭主「イヤおはきなされ
 てはたまらまいが。しまつて置なさると。いつ迄もおますわいな彌次「ううだろふうして手前
 への所のぞうりは鼻緒が有て重寶だ北八「鼻緒のねへぞうりが何所に有物だ彌次「何しろ。安
 ひ物だ（こつとして有草履を引切取つて見）イヤ此草履は。ちんぱだはかたくは大きくて。こ
 つちらはちぢさいようだ。コリヤ八文宛にしちやア大きな方は安ひが。ちいさい方は高ひ物だ。
 ナント御亭主片つばの大きなほうは九文に買やせうから。こつちらを七文にまけてくんませへ亭
 主「アイようお升お召なく彌次「南無さん錢がたりない。一足買ふと思つたが。たつた七文計
 ちやアねへから。アノこつちらの片々の方をばかり買やせう北八「ハ、くこいつは大笑ひだ
 。おいらもまねをしようと思つても餅ならいゝがぞうり片々が何になるものだ亭主「お左様で

お升一足お召なさりませ。ぞうりも片々はなしては上げられませんわいな彌次「ナニ片方はらねへ
 か。とすがは田舎文物が不自由だ北八「エ、江戸だもつてナニぞうりを片々賣る物が有もんか
 亭主「何なら是になされませ。是じやと一足で七文にして上ませうわいな彌次「エ、馬のくつ
 がはかれるものか人じらしな北八「一足買なお目へ片ッ方買て。ぞうりするつもりだ彌次「又先
 に行て片方買ふ亭主「ハ、く十四文にませう登足を召なされ彌次「貴様をつくらう云バ
 い（トやうやうのとにてぞうりをとりのへ草鞋をぬきすては替ゆく）斯て此宿を打過早く
 も八丁細手左名毛明神をふしおがみ。今岡村の建場に至る。此所は。妹川と云麴類の名物いたつ
 て風味よしと聞て
 名物のしるしなりけり往來の。客をもつなく妹川の蕎麥
 夫より穴生村。落合村を過行て。有松に至り見れば名にしあふ絞りの名物色くの染地家毎につ
 るし。かざり立て商賣賣ふ。兩側の見世より旅人を見掛てお這入くあなたお這入。名物有松絞
 りお召なされサアサア是へくお這入く彌次「エ、やかましひやつらだ
 ほしいもの有松染よ人の身の。油絞りし金に替ても
 北八「ナント彌次さん浴衣でも買はねへか彌次「おも入見たをしてやろふじやアねへか北八「
 よかろふ。たんと買ふ顔をしてなぐさんでやろう（トあちこちを見廻す内。此町のとつばづれに。
 小見世なれ共染地色々表に的しある内へ這入）彌次「コレ此絞はいくらします（ト云に此内の亭

六十五百膝

主と見へて將基を差てぬるがよねんなくうてうてんとなりて(亭主)「サアしまつた時にお手は
何じやいな彌次」コレサ。こりヤア、いくらだと云に(ト)すこは高に云と亭主肝をつぶして
「ハイ」夫かな彌次「いくら」亭主「コウトあなたはいくらだとおつしやる。うこでかやうに
致すかい彌次」エ、小じれつて「コレ賣らねへのか。直段はいくらだと云に亭主」ハア借やか
まじい人じやうちらの方へ引替して符牒を見せなされ。たしれる物じやないわいの彌次「こ
いつはとんだ。商人だ符牒にウのシとエの字が書て有亭主」チ、ううじやあつ。コウト三分五厘
切じや彌次「高ひくまげなせへ亭主」ナニ。まけいイヤならまじ。此下手將基に(將基の合手)
治兵さんマア商ないをしまよいか。あなた方が待て御座らつせる亭主「好はいの逆も敵等はふ
う買やしまよいハテ買いたうても金銀はあらまじ。ない管じやわしが手におはしますじやて彌
次「何だべら棒め金銀が有まじい人を見くびつたを云アがる有から買ふ是はふんぞし丈で幾等
だへ亭主」何じやふんぞし買ふ。イヤぶしつけせんバんの彌次「こいつはあいらを。てうじやア
がる。賣物買物に無付も何もいる物か鼻つたらしめが(ト)大きな聲する。亭主はつと心付早うう
將基をやめて出で「ハイ」是は粗相申ました。何なとまけて上ませすにお召下されませ 北八「
うう云なさりやア。こなたま買つて上すに。彌次さんお前へお袋や。かみ様への土産には。あれが
よからふ。いくらだの亭主」へい十四分八分でお升彌次「コレうちらのは亭主」是は十五分彌
次「もつと」のはねへか亭主「あり升共へい是がなア廿登又づ」こつちらが廿貳分下のがハ

七十五百膝

十九分宛でお坐り升彌次「もつと是よりいのがはしい亭主」イヤ最う音かやうな物でお坐り
升彌次「ム、うんなら大事にしまつて置な誰ぞか買ひやしやうわつちやアいつち初手に見てか
めた。此三分切を手拭丈切てくんなせへ亭主」へい左様かな(ト)肝を潰し二尺五寸切て出す彌次
郎此代を拂てこいを立出)とんだやつらだすでにいひ三太郎にしようとしやアがつた。肝を潰ぶ
しなハ、時に大分道くさをした。ちと急ぬでやり掛よう(ト)是より道を早め行程に早くも鳴海
の宿に着ければ
旅人のいろげは汗に鳴海。こゝも絞りの名物なれば
斯よみ興じて田ばた橋を打渡り笠寺觀音堂に至る。笠をいたしき賜ふ木像なる故に此名ありと
かや
執着の涙の雨にぬれじとや。笠をぬけたる觀音の像
夫より戸部村山崎橋仙人塚を打過。やうやく宮の宿に到りし頃は。早日暮前にて。鼻棒より家毎
に客をといむる出女の聲轟し。あなた方アお泊じアおませんか。お湯もちんと涌ておます。お合
客はおません。お泊りなされませ。彌次「泊は何所にしよう。錢屋か。瓢たん屋か 北八「向ふ
の内は何だ錢屋か 女」モシお泊りかな 北八「チイ泊やせう旅籠はいくらだ 女」チホ、くく
ようひますお泊りなされませ 北八「何だいひか。只で泊るか 彌次「出のい」(ト)笠を取て這入る宿
の亭主「お湯をあげらう。お足がよされて。なげらにや直にお風呂へお召なされませ」(ト)荷物を座

八十五百膝

敷へ運ぶ此内彌次郎北八も草鞋をぬぎ奥へ通る女茶を持来り。お茶あがりませ。按摩「お療治をなされませぬか。北八「療治もしてへが。マア腹がへつた。彌次「うんでも食てきや。この名物だ。あんま「左様なら後に来ませう。ト立て行跡より二三人連にて弓張提燈をともして。ハイお泊でお座り升か。是はけ當驛の御子様。手水鉢建立お心ざしをお頼み申升。彌次「ハイ北八。うけへ上てくりや。北八「是は少しながら。ト錢八文出してやる。と帳に記して行入替て坊様が一人。ハイ私に六十六部でイ碑を建升。お心持次第お施主に。つかつせへて下されませ。彌次「何だ石塔の施主に。附いめいましぬ事を云て来る。ンレ持て行なせへ。ト同八文ほうり出してやる。入替りて此内の亭主ひより顔を出せば。彌次「エ、又八文か。貴様は何の建立だ。亭主「イヤ明日は船でお座り升か。又佐屋廻をなされ升か。北八「直に爰から船にしやせう。彌次「船は宜が。おいらア。どうも船ではなせか小便をするがこわくて。うしてねつから出ねへにはこまる七里乗と云もんだから。こらへては居られずせうした物だろう。佐屋へ廻ろふか。ウ北八「亭主、イヤ夫にはよい物をあげうす。左様のお方には私しがいつも竹の筒を切て上から。夫でか小便なさるがようお座ります。彌次「うんなら夫をお頼み申やす。亭主「ハイ。先御膳をあげう。ト立て行。此内女膳を持て来る。こゝにても色く。あれ共略す。願て膳も済たる所先程のあんま来たり。旦那方致まじよかいな。彌次「サアやらかしてくんない。ト是より彌次郎あんまにもませる。此内隣坐敷に泊合せしとせ二人がなぐさみに三味線を出して伊勢音頭を歌ふ聲する。花もうつろふ仇人のうはさきも想と岩の結び服紗のときを解。アリサコリヤサ。能く。能となア。ツテナレ。北八「イヤ。こいつ。い。聲だ。ナントあんまさんわしは。踊が上手だ。お前へ目が見ゆるとあの唄で。一ッ踊ッてみせてへもんだがな。あんま「わしもすきだがな。おどらッせる。音をきかアす。一ッやらつしやらまいか。北八「やるは。やろふが。ほめて貰はにやア張やいがねへから。こうしやせう。わしが踊りしまつた所でお前への頭りをちよいと撫ようから。夫をきつ掛に。やんやアをほめてくんない由か。ンレ踊ぞ。鄰の歌「解ぬ思ひは二ッ箱三ッ四ッ。い。つ。泊船夫が苦界ひの行違ひ。アリサコリヤサ。ト三味線に合せて北八手をたしき踊るまねをして。北八能く。能ヤサア。ト踊仕舞座頭の頭をちよいと足にて撫るとあんま「ヤン。く。ゑら。い。く。ハ。く。北八「何と面白うらも。一ッやろうか。又隣に歌。差手引手に私何所迄も浪の浮寐の梶枕。北。能々々よいやなア。ト又足で座頭の頭を撫る。按摩ヤンヤ。く。北八「ハ。ア。面白く。ト此内宿の女。お湯にお召なされ升。北八「彌次さん。最ふしめへか。しめへなら。湯に入なせへ。按摩さんが踊をほめて呉た替りに。是からわつちも。もんでもらをふ。彌次「ヤレうんなら。這入てこよふ。ト彌次郎は湯に入に行。跡にてあんまは北八をもみに掛り。あんま「時に旦那方は。ち。當宿のお鶴でもお呼なされ。北八「イヤ夫よりか。隣りの三味はこの娘か。何人だの。あんま「あれは二三日前から爰の内に泊りて居る舞女でお升が。能聲だなもし。しかしまんだわしがじんくを旦那方へ聞せたい。北八「コリヤ善ろふ。やらかしねへ。あんま「うの替りわしもほめて

九十五百膝

敷へ運ぶ此内彌次郎北八も草鞋をぬぎ奥へ通る女茶を持来り。お茶あがりませ。按摩「お療治をなされませぬか。北八「療治もしてへが。マア腹がへつた。彌次「うんでも食てきや。この名物だ。あんま「左様なら後に来ませう。ト立て行跡より二三人連にて弓張提燈をともして。ハイお泊でお座り升か。是はけ當驛の御子様。手水鉢建立お心ざしをお頼み申升。彌次「ハイ北八。うけへ上てくりや。北八「是は少しながら。ト錢八文出してやる。と帳に記して行入替て坊様が一人。ハイ私に六十六部でイ碑を建升。お心持次第お施主に。つかつせへて下されませ。彌次「何だ石塔の施主に。附いめいましぬ事を云て来る。ンレ持て行なせへ。ト同八文ほうり出してやる。入替りて此内の亭主ひより顔を出せば。彌次「エ、又八文か。貴様は何の建立だ。亭主「イヤ明日は船でお座り升か。又佐屋廻をなされ升か。北八「直に爰から船にしやせう。彌次「船は宜が。おいらア。どうも船ではなせか小便をするがこわくて。うしてねつから出ねへにはこまる七里乗と云もんだから。こらへては居られずせうした物だろう。佐屋へ廻ろふか。ウ北八「亭主、イヤ夫にはよい物をあげうす。左様のお方には私しがいつも竹の筒を切て上から。夫でか小便なさるがようお座ります。彌次「うんなら夫をお頼み申やす。亭主「ハイ。先御膳をあげう。ト立て行。此内女膳を持て来る。こゝにても色く。あれ共略す。願て膳も済たる所先程のあんま来たり。旦那方致まじよかいな。彌次「サアやらかしてくんない。ト是より彌次郎あんまにもませる。此内隣坐敷に泊合せしとせ二人がなぐさみに三味線を出して伊勢音頭を歌ふ聲する。花もうつろふ仇人のうはさきも想と岩の結び服紗のときを解。アリサコリヤサ。能く。能となア。ツテナレ。北八「イヤ。こいつ。い。聲だ。ナントあんまさんわしは。踊が上手だ。お前へ目が見ゆるとあの唄で。一ッ踊ッてみせてへもんだがな。あんま「わしもすきだがな。おどらッせる。音をきかアす。一ッやらつしやらまいか。北八「やるは。やろふが。ほめて貰はにやア張やいがねへから。こうしやせう。わしが踊りしまつた所でお前への頭りをちよいと撫ようから。夫をきつ掛に。やんやアをほめてくんない由か。ンレ踊ぞ。鄰の歌「解ぬ思ひは二ッ箱三ッ四ッ。い。つ。泊船夫が苦界ひの行違ひ。アリサコリヤサ。ト三味線に合せて北八手をたしき踊るまねをして。北八能く。能ヤサア。ト踊仕舞座頭の頭をちよいと足にて撫るとあんま「ヤン。く。ゑら。い。く。ハ。く。北八「何と面白うらも。一ッやろうか。又隣に歌。差手引手に私何所迄も浪の浮寐の梶枕。北。能々々よいやなア。ト又足で座頭の頭を撫る。按摩ヤンヤ。く。北八「ハ。ア。面白く。ト此内宿の女。お湯にお召なされ升。北八「彌次さん。最ふしめへか。しめへなら。湯に入なせへ。按摩さんが踊をほめて呉た替りに。是からわつちも。もんでもらをふ。彌次「ヤレうんなら。這入てこよふ。ト彌次郎は湯に入に行。跡にてあんまは北八をもみに掛り。あんま「時に旦那方は。ち。當宿のお鶴でもお呼なされ。北八「イヤ夫よりか。隣りの三味はこの娘か。何人だの。あんま「あれは二三日前から爰の内に泊りて居る舞女でお升が。能聲だなもし。しかしまんだわしがじんくを旦那方へ聞せたい。北八「コリヤ善ろふ。やらかしねへ。あんま「うの替りわしもほめて



がなからにや。強合がな。歌ひしまつたら旦那はめて下さるかな北八「 Chatt 承知くあんなま「ドレやりからかさう」ト北八がつむりをもみながら柏子を取て頭をびしやく」あんなま「ヤン」く「エ、く酔た」く「五句の酒に一合呑たら様またよかる」ト歌ひさして北八が耳の中をぐつと指ををつこみ「こいつがさい前。我が頭お足げにひろいた。はつ、け野郎め。かつたい野郎め。うぬがよな野郎はろくでは行まい揚くの果には首でも釣じやろ」ト云として耳の穴よりゆびをぬけ「耳はボントなる」あんなま「やとこのせ」く「北八耳の穴をふさがれてうぬが事を悪く云はれたをも知らず」北八「ヤンヤ」く「あんなま「シヤ」く「シヤン」く」ト拍子に係つて北八が頭をびしやくと叩く北八「顔をしかめて面白く」

んま「最一ッやろうかいな北八「イヤもう奮免だ頭がたまらぬあんなま「ハ、く」あろう面白かつた」此内彌次郎風呂より揚り此の様子ちらと見て「彌次「利荷もつとやらかしね」北八「イヤかいらはもう湯に這入てこようあんなまさん。最ういひによ」トいひすて風呂場へ行。あんなまは眼をこして歸ると。宿の女床を取に來り布團を敷て勝手へ行彌次郎は早其健ねかける此内北八風呂場より歸り來て「チャ彌次さんもう寝掛たの。時にお前降り座敷のしろ物を見たかさんだうつくしい替女だせ彌次「替女なら眼があるめ」北八「眼はねいが。あんなま「らじやアねへ。今湯から揚つてくる時。一人の替女めが手水場にまごついて居たから小當りにあたつて置た中く」やばでねへしろ物は彌次「ドレ」く」ト道起て乗出し襖の間からさし覗き「ハ、後ろ姿は中く」いきな風俗だコリヤア。此ま、ではおかれねへ北八「イヤうはならぬ」ト云つ、夜着を引かふり心の内には。おのれ今に這掛てやろうし。わざとねるふりにて横に成と直に空ぬびさかく。此内隣座敷もひろまり二人の替女もねた様子夜もしんく」と更渡り後夜の鐘「ゴチン」く「彌次郎うつとおき上り見れば北八は本とうにね入し様子してやつたりとろろく」道掛。襖をうつと明て隣座敷へ這入見れば。替女二人は前後もしらすね入ばな。彌次郎とせのころへ這入らんとせしに。さすがは眼のみぬ物とて用心きびしく風呂敷包を兩手にしつかり抱てねて居るゆゑ是がじやまに成て這入にく、彌次郎うろく」此風呂敷包を取退ようとする替女目を覺し片手に包を抱へ片手にて彌次が手をつくと捕へて」とせ「替人よく」お宿の衆く」トわめきちらとせ。彌

次郎はあてが違ひ禰禰一ツの此本を見附られてはごうざらじと替女が手をたしきはなして早々にこなたの座敷へ入り。夜着をかぶりうしろぬふりしてねて入。北八はとくより目を見しつゝと笑て居ると此内勝手より亭主かけつけて「替女様さうさつせいましたとせ」わしが此抱て居る包をいんま。誰やらさうさつせいました。雨戸でも明て有か見てくれなされ亭主「イヤ何所明てはいりませぬとせ」夫でもいんまの盗人は何所から来たり升たろうな亭主「イヤ孰か明て有モシ」お隣のお客様方によつて御座らつせるか彌次「ア、ワ、ムニヤ」亭主「ハ、こゝに落て有は何じや。イヤふんせしじやううな。モシお客様方はあなただけではござりませんか」ト大きな聲するに彌次郎はつと思ひ。うつと頭を上て見れば。わが禰が替女の枕元から敷居越に我枕元迄長く成て落て居る故かかしさもかしくさうがに。れが共云れずもじくして居ると北八態をいじ悪くおき上り「何だへさうくしいふんせしが落て有とはドレイレ。夫がコリヤ彌次さんお前へのふんせしじやアねへか彌次「エ、なまげないをぬかしやアがる」ト北八が夜着の袖を引。亭主もさてはと承知し心の内にかしく思ひながら「イヤ最ふ旅のせでおどりますから。おたがひに氣を付けて御用心なさるがよい。替女様もう。お休なされとせ」おみやわるとねつかれませぬ。よふめて入て下さりませ亭主「左様なら」トうてら立廻して出て行。彌次郎うつと手をのばしてふんせしをたぐり寄す北八かかしく吹出しながら

替女どのに思ひ込は是もまた戀に目のなき人にとりあれ

すでに夜もいたく更渡れば昔くようやく一すかの夢を結あかつきの風樹木をならし浪の音枕に響て。つき出す鐘におどろき目醒て見れば。早明方の鳥カア〜(馬のいなゝき)ヒーン〜(長持人足の唄)坂ハなア照々ナアエ鈴鹿はくもる(チアレエ)とつてひ〜(出船を呼ぶ聲)船が出るやアイ〜(此時宿屋の女おこしに來たり)モシいんま一番舟でお升。お膳を上げまじよ。彌次「チイ〜北八サアおきや」ト二人はかき出て手水遣ふ内膳も出喰しまひ。彼是する内。宿の亭主「お支度はどうござりまするか。御案内致しまじよ」北八「夫は御苦勞サア彌次さん出掛やせう」トう〜に支度して表の方へ出掛る宿の女房。女「御機嫌よふ又か下りに彌次「アイか世話に成やした」ト暇乞して船場へ行く亭主爰迄送り來り「船頭衆か二人様じや頼み升ぞ彌次」時に忘れた御亭主さん夕べお約束の彼小便の竹の筒は亭主「カンニちんをさうして置ましたに。ドリヤ取て参まじよかい」ト亭主は彼竹の筒を取に歸る此渡し舟七里の海上一人前四十五文宛けへなけ升ぞ北八「何だ火吹竹か彌次」是をあてがつてサとうやらかすのだ好〜イヤ御亭主さん大きにお世話サア是で大丈夫だハ、〜

おのづから漸らす迎も神います。宮の渡しは浪風もなし

折く船しければ乗合皆〜勇み立やがて船を乗出して順風に帆を揚げ海上を走る事矢の如くされど。浪平かなれば。船中思ひ〜の難談にどの掛けがねもはづ〜三り高聲に笑ひの〜りし

行程に商賈船。いこううとなく漕送ひて酒のまつせんかいな名物浦焼の焼立。四子よひかな。な
ら漬て飯くわつせんかいなく。彌次「ア、能ねたは。いつの間にかやちうきに來たぞ。時に小便
がもるようだ(ト宿屋の亭主がくれたる竹の筒を出し此でころと前へあてがへ小便をする。此竹
の筒は火吹竹の如く先の方に穴を明たるものなれば舟のふちにもたせ掛て小便をするつもり
の所彌次郎の心には穴の明て有には心付すしゆびんの様だ思ひ。竹の筒へ小便をしこみて跡で打
明る事と心得舟の中に直に竹の筒へしこみければ先の穴より小便が流れて舟中小便だらけと
なり乗合皆々肝をつぶし)「コリヤ」何じやひな。水が流るう流れる。乗合「たれか土瓶を打。こ
かぬたううな。ソレ」煙草入も紙入もびつしよりじや。コリアたまるんハ。ヤイお前小便じや
な(トとがめられて彌次郎竹の筒をかくす所にうろたへてまどくする。北八「エ、彌次さんど
うした物だ。お目へ小便をするなら。そけへ揚つて竹の筒の先のほうを。海へ出して仕込のだは
ナめつううな。舟の中が小便だらけになつた。エ、きたなへ」彌次「おれは又こいでし込で跡
でふちまけるのかと思つた。乗合「イヤ早とほうもない。コリヤア。くさくてならんわい。船頭衆
へ」最ふ敷物は外にはないか。船頭「だれじやぞい。小便をしたのは。舟玉様がけがれる早ふコレ
ふかつせいな。北八「エ、氣のきかねへ人だ。船頭「エ、ソレまだ竹の筒から落る。夫も投してし
まはつせへな。彌次「イヤ是はうちへやうふ。火吹竹にならふから。北八「エ、お前へが小便し
た物をナニ火吹竹に成物だ。早く拭なせへらちのあかぬ(トいぢめられて彌次郎ふんどしはづし

うこらをふく内。北八はうすべりをひつくり返して引直し)「サア」是でいゝとなたもおすは
りなせへ。彌次「コリヤ皆様御免なせへとんだばんくるはせを致しやした(トつゆになひしよげ
かへりて。うこらを取かた付る乗合皆々)にが笑してだんまりで居る。此内早くも舟は桑名の岸
に至る(乗合「きたぞ」小便にころ。ぬれたれ。船はつゝがなく桑名へきた目出たい) (ト皆
く是より上りて此宿によろこびの酒汲かはしぬ

○五編

宮重大根の。太しく建し宮柱は。風呂吹の熱田の神の慈眼す。七里の渡し浪ゆたかにして來往の
渡舟。なんなく桑名に着たる。悦びの餘り。名物の焼蛤に酒汲替して。かの彌次郎兵衛多八なる
もの頼て爰を立出。たどり行程に。此頃旅人のうたふを聞けバ。流行唄「時雨蛤土産にさんせ。宮
のお龜か情所ヤレコリヤよチシ」よし馬士「コレ且那衆戻り馬。のらんせんか。彌次「よし
よし馬士「安ひに。たんだ百五十でやらまいか。彌次「よしよし北八「せうろく四文で乗べい
か馬士「其様よチせよせ馬「ヒイン」長持人足「舟はナア追手に帆掛て走るナアンエ早くサ
ア熱田に泊りたやナアン。アエ八兵衛どうした馬でも呑だか。何だかはらねアとつておく北八
「何と彌次さん何もなぐさみだに。こうしようじやアないか。かめへの荷物とわしがのを一ッ所
にして一人が。引かついで。半日替りに且那と家來の。しうちはごうだらう。彌次「コリヤ面白
夫よかるふ先已らから且那を始めるぞ。北八「うりやアいゝが今日は最ふ八ッだから七ッ替りに

八百六十八

ふく道中廻には。あきはてた北八是からあるぬて行ふ草履があらば買てくりや。はきつけぬ鞋草でコレ見や。足中が豆だらけに成た北八「ほんになア今日初て草鞋をはきなさつたから古ひあかぎれが再發した彌次」そんなとを云是はあんまり足が。やはらかなから草鞋の紐が喰へ込だのだヤ時に。蛤は女「ハイ只今上ケ升（ト大皿に焼蛤をつみかさねて出し飯を二膳持來てずねる）北八「コウ彌次さん見なせ（色男は違つたもんだらう。コレ／＼茲の娘か前への飯は些と盛ておめらがのは此通り山盛。飢鬼道の一里塚と云もんだ。ア、厚味／＼彌次「へべらぼうめアノ娘が杓子當りの船のをはれたのだと嬉しがるもかかし。ソリヤア手めへをやすくするのだは北八「なせ／＼彌次「すべて此街道では上下の者や供の者へは飯を山盛にして出すと云とだ。夫だから他が目にもおれが旦那手めへはお供と見へるから北八「イヤうかいめへまじい彌次「ハ、蛤をもつとくんなせへ女「ハイ／＼（ト又焼立の蛤大皿に盛て出す）彌次「お前の蛤ならなは味かろふ（ト女の尻をちよいとあたる女「オホ、旦那様は。よろはたへてじや北八「おれもはたへよふ（ト同じ尻をつめりにかくれ）女「コレよさんせすかぬ人さんじや北八「さうでもおいらをば安くしやアがる（トぶつ／＼と云ふ内あたりの寺の鐘がコチン／＼）北八「女中あれば何時たへ女「最ふ七ツで御座り升北八「しめた／＼約束の通り。是からおれが旦那様だコリヤ／＼彌次郎兵衛おれは最ふ馬にも駕にも乗あきた。是からうろ／＼ひろめませう。い草履を買て來やれ。はき付ぬ草鞋でコレ見や。豆中が足だらけだぞ、

九十六日曜

馬鹿を云成程手めへ。は足だらけだ。一つの止がいくつにも削て居るから北八「イヤ旦那向つて手前へとは何の事だ。此荷物もううちねやさふ彌次「ハア現金な男だ。マアうちには貴やれ北八「イヤううはならぬ（トつきつけるを。彌次郎兵衛突戻す。はづみに蛤を盛てある皿をひつくり返す拍子に。焼蛤が彌次郎兵衛のふところへひよいとはいると）彌次「アツ、／＼蛤の汁が酸てアツ、／＼北八「アレ／＼（ト懐中へ手を入れて蛤を押へ北八「アツ、（ト取落せば。蛤の下へ落る北八狼狽て彌次郎が股引の上から金玉と蛤を一所に握む）彌次「ア、ハッ、ハッ、ハッ、金玉がこげらア（ト云うちゆう／＼股引の前の合せ目を廣げると蛤はばつたりと落る）北八「ハ、ハ、ハ、先は御安産でお目出たい彌次「しやれ所じやアねへ。そんなためにあつた女「おけがは痔座りませぬか彌次「けがはせぬが。まだ腹の内がびりびりする北八「ハ、ハ、ハ、

蕎麥はまだ入らぬぞも蛤の。焼をに附てよむたはれ歌
夫より此所を立出。初村八幡を打過。七ツ家あくら川に至りし頃。四日市の宿引出向ひて是はか
はよう御座り私しお宿をお頼み申升彌次「わつちらア帯屋へ行やす宿引「イヤ今夕はお大名様
お二頭お泊で帯屋は兩家共。お差合で御座り升から。私方にお泊下さりませ（ト云はうろ也御小
身様のお宿で下宿は。わづかなれ共夫を云たて宿引我方へ泊んとの計路なり二人共ぼんくらな
れがまと思ふて）彌次「うんなら貴様の所はいくらで泊る宿引「ハイ夫はいかやう共彌次「夕

へは宮の斧屋に泊たが。とんだ町噺にした。百五十で燗酒を附て飯を喰せるが。ろして酒も菓子も出したから。コリヤアだまつても居れぬへと別に茶代を二百遣つもりの所やつ張やらんだから大きに安かつた貴様の所も其つもりで馳走するが、宿引かじこまりました(ト段々咄ながら打連て行ともなしに四日市の棒鼻にいたれり宿引かけいだして)サア是で御座り升。コレお拍様じや(宿の女房)おはやうお着なさいました(ト挨拶の内二人は草鞋をどきながら見廻せば至つてむさくろ敷宿にて入口にすけかへつて横にいがみたる膳棚とこわれ掛りしへつこのある内なり) 亭主「今晚は私し方も込合ましたか氣の毒ながら奥のお客と御一所になされて下さりませ 彌次「すいぶんよしさ女房「左様なら是へ(ト案内して奥の間へ連行く令宿田舎者二人有)彌次「御免なさい 田舎者「お早う御座らつせへた 北八「ア、草臥た。ねいとこな宿女「直にお風呂に召ませ御案内致ませう 北八「ドリヤお先へ參ふ(ト手拭を提て湯に行く此内十四五の前髪風呂敷包の箱を提て)お煙草は入ませぬが。楊枝齒磨お湯紙は宜う御座り升か 田舎者「久ぶりて吉田の大竹へのたり込で山に淺柄の煙草を貰つたが。皆吸てしもふた(今一人田舎者) 四文粉はあらまいか 商人「ア、イ夫は御座りませぬ。是を上げて御らうじませ 田舎「ドレ〜(〜)こりやねつからたわいがない。こつちらのは。どうじやい(トさせるに詰てバツ〜)商人「夫がよう御座りませう 田舎「イヤ是もねから火が附ぬ見んせ吸て居内消らかいた 商人「ソレあなたも膝にもねてかり升 田舎「ヤアコリヤ〜 大事の着物を燃らかいたアツ〜イヤこな

ひに膝の焦る煙草はいらない持ていかんせ 商人「ハイ左様なら(ト小言云乍ら出て行北八湯も揚りて)北八「彌次さん湯に這入らね〜か宿女「あなたお召なさいませ彌次「イヤ大分あだな奴らがちらつくせ(北八小聲に)今のやつを風呂敷で。ちよひと繋つて置は早かろふ 彌次「ソリヤはんとさうにか。さうして〜 北八「おれが湯に入て居る所へおねるくはお坐りませぬかと。云てうせかつたから。直にうこて約束した。まだ一人いゝ年増が見へるからおめへ湯に入て待て居なせへ。大方うこへ来るには違へばね〜からうこで口を掛るが、彌次「承知〜ドレ入て来やせう(ト彌次郎は湯に入又登入り商人)「ハイ焼酎は入ませぬか。白酒あがりませぬか 北八「チャット其焼酎を少しくんな。チャ、〜よし〜(ト茶碗につがせて錢を拂ひかの焼酎を足に吹掛)よし〜是で草臥が安まるだろふ。おなたも御免なさい。ヤアゑいとこな(ト横に寝掛る此内彌次郎は湯に入て女のくるのを待てども〜一向にせず。手足のゆびを一本〜に洗ひてしばらくの内。待ぼうけと成り餘り長湯をして湯けに上り。風呂場のはめにもたれて。ぐにやりと成居る。北八は余りに彌次郎が長湯なるゆへ風呂場へ覗きに來たり此体を見て(ヤア〜)彌次さんさふした〜コリヤ大へんだ(ト彌次郎が顔へ水をう〜)彌次さん〜 彌次「サ、〜ウ、ウ、〜 北八「能か〜どうしたのだ〜 彌次「どうした所か手めへおれを。ゑらいめに合した 北八「なせ〜 彌次「湯に入ながら最ふ女が来るか〜と思てあんまり長湯をしたから北八「夫で湯氣に揚つたか、〜ちゑのね〜咄した 彌次「手めへのかかげでまだ足がひよろひ

八がじやまをしてやらんと。ね入し振じて考へてゐる内二人共。旅づかれにや思はずや〜と
 一トね入し。じはらくすると。彌次郎ふと目を感じ見ればあんどう消て真くらがり。あたりもひ
 つそりしつまりたるに。自分はいしとぬけがけし北八に鼻わかせんと。うつと起き立。さし足に
 て次の間に出。兼て開置たる通。さぐり〜壁をつたひて行内。彌次郎兵衛余りに手を上へのば
 したるにや。釣たる柵板に手がつかへると。どうしたはづみやら。がたりをいつて柵がはずれた
 るを見て彌次郎大きに肝をつぶし〜こいつはへんちぎだ。あんまりおれが手をのびしたから柵板
 がはずれたらうな。手をはなしたら。落るであらうじ。何かがらくたが。しこ玉あげてある様子落
 たら皆なが目を覺すたらふこいつは難儀な目に合た〜ト両手を柵につしばつて立てぬてもねか
 らつまず。手をはなせば柵が落る細絆一ツで寒くは成るしコリヤなさげない目に合たどうぞ
 仕様は無いかと。立はだかつて考へて居内。斯く共知らず北八も目を感じかき出。是も段々壁をつ
 たひくる様す彌次郎夫と透し見て小聲に成り「北八か〜北八」誰だ彌次さんだの彌次「コリヤ
 静に〜早くこ〜来てくれ北八」何だ〜彌次「是を鳥渡持てくれ〜だ〜北八」ヤレ
 ン〜ト手を延して。何かはしら落か〜つた柵の下をおさへると。彌次郎はうつと手をはなし北
 八に持せて脇へはつしたるに北八おどろき「コリヤコリヤ」彌次さんどうするのだ〜ト手をはな
 したらする上柵が落か〜るゆゑ北八「ヤアヤア〜」コリヤ情なめめに合せる「コレ〜
 彌次さん何所へ行ア、手がたらく成コリヤ最ふどうする〜」トうろ〜して居る。彌次郎は



くらまされうろ〜と先の方へ。ゆきこし壁
 をつたひて勝手の方へ出るに。庭の向に見ゆ
 る有明の火影はのかに透して。見ればかの行
 當の襖の傍に一人ねてゐる者あるゆゑ。偕こ
 う北八が約束の代物しめこの兎こいきなり手
 を遣てさぐりみれば。こはいかに石の如くひ
 へてをりし人たをれ居たり。さながら生たる
 者共見へず。是れふしきと。こは〜撫廻せば
 荒どもにぐるみて有ゆゑ彌次郎はつとおさろ
 きにはかにかきみが悪く成て。がた〜とふる
 め出しやう〜に。北八が居る所へ這戻りは
 の根も合ぬ標へ聲にて「彌次」北八まだうこに
 か北八「チ、彌次さんおめへ何所へ行た。あ
 う鳥渡こ〜へ彌次、イヤうこ所ろではないあ
 うこに死た者へ扱が掛て有から最う〜うす
 氣みの悪るひうちだ北八「ヤ、とんだことを

六十七百藤

云ふ彌次「ナニ本をうけに。ア、あうごにア、とんだ内に泊り合せたあうごじや〜」トうろ
くは這出しにけ行。北八「是々〜おれをこゝに置いてどうするエ、夫にとんだを云アかつ
て。さうやら氣味が悪く成たコリヤたまらぬ〜」トがた〜振ねる柏子に。手がゆるみて上の
棚がぐわら〜。こりやアかなわぬぞ。北八逃出世しが。うろ堪て戸まどひをし。一向わから
ずまどつく内。此物音に勝手よりは亭主の聲としてあんど提て出くる様子。奥の間よりは田舎
者が出てゐるていゆゑ。愈々うろたへ。見せの方へ這出る。手元に箠一枚有しをさはいはい引取り
て息をこらしか〜みゐるぞ。亭主ゆかりを持出てきもをつぶし「ヤアヤア〜コリヤなんせ棚が
落た。膳箱も何もうりこくたいに成た」トうろこ取片付る内。何事やらんと田舎者二人ながら。か
き出て「ヤ〜あら〜音がせると思ふた。道理こりコリヤ地蔵様の傍に込箱共が飛ちつてゐるが
ヤアヤア〜お鼻が打かけてしもうた。今一人の田舎もの「ドリヤ〜」本に地蔵様の鼻ア。
なくならかひた。うろこにやないか。イヤ〜に寝て居るは。だれじやい」ト箠をまくれば北八は
はつと斗り顔を上げて見にうばにはこもに包じ石地藏有り借は彌次郎が死だ者の有しと云しは此
地藏ならんと思ひ居る内。亭主北八を見て「ヤアとなさんは。こちへ泊らせへたお客じやないか。
夫に今時分。なんせ此様な所ろに。コリヤ合點がいかにぬわい。さうじややら。となさんたちの。な
りうぶり。うさん臭いと思ひなつたが。もしや護摩の灰じやないか。何ぞまだ。しよしめるつ
もりか。有様云つせへ。田舎、イヤ夫斗じや御座らまい。大方となさんが。此棚を落したも

七十七百藤

んで。なんせ地藏様の鼻ア打かいたコリヤわしともが村で今度建立せる。地藏様じや。さん
のふ石屋殿から請取て翌日は早々長深寺様へ納めにやらぬかお鼻が打かけては持て行れぬ。
元の通りまどめつせへ「是は近在の人々村のお寺に納むる地藏也石屋より持て歸る所おろなわ
りしゆゑ。今宵は爰に泊ると見へたり亭主御やつとさとなり」お地藏様の鼻もお鼻じやが。お
前方のお荷物何ぞなくなりはせないか。さうでもかてんのいかぬやつらじや。有様に云ふりまい
か北八「イヤわしらはうんな。者じやアねへ。めつたなを云なさんならさうさてうめんの旅人
だ田舎インチ。うろじやあらまい。又夫でなけしにやア。なアせ今時分うこにねて居さつせへ
た北八「イヤ是はのウ手水に行とつて亭主、戯けたををつくさまい。手水場は座敷の棟先にあ
る物を定めし。宵にもいたであうにうないな。問合は喰せんわい。北八「うろ云れちやアわつち
も面目なぬが罪を云にやア。理が開ぬ。有体に云やせう亭主「サ、サ。云いでどうせるもんじ
や北八「イヤさうもかはずかしが。今頃わつちがこゝにまで附ておつたと云ふわけは。ツイ
夜這にきて此棚の落に。うろたへたので御座りやす。田舎「ナ、夜這にきた。イヤ早となさん
はたわけ者じや。何所へ國にか石地藏様の所へ夜這に來てどうせる積りじや。亭主「云は云程ろ
くなはぬかしからぬ。北八「コリヤとんだ災難に合をだ彌次三〜」ト呼たてる。先刻より彌次
郎は立聞して。腹すぢよりぬたぬけるが最ふいし時を立出「コリヤア何方も氣の毒な。あり
やアわつちが請合。うろたな者じやア御座りやせぬ。了簡して選てくんなせへ。又地藏様の鼻と

八十七百膝

やちがかけたと云なざるが。さうぞわつちに而じて跡では何共致しやせう(ト色く茶くらと断を云ちらし。亭主も今は詮方なくさながら悪者共見へぬ手合一ト通は云た者の今はなつとくして済しければ)

這かけし地蔵の顔も三度笠。またかぶりたる首尾のわるさよ

斯即吟の彌次郎兵衛が。狂歌に各々ぞつと笑ひを催ふし。やうくいさくさ納まりけるにぞ。いまだ夜の明るには程もあらんと。各々處所に這入りたるが。しばらく有て早一鶴の告げ渡る聲を馬のいななき。表に聞へ彌次郎北八急きおき出で支度調へ頼て此宿を立出るぞと

やうく東海道も是からは。花の都に四日市なり

夫より。濱田村を打過。赤坂に差掛りたるに。往來殊に賑はしく。男女大勢こゝかしてにつどゆ集まりたるは何とにやと彌次郎兵衛北八も片寄り行つゝある親仁に向ひて。彌次「モシく何で御座りやす親父」あれ見さつせへ。北八「喧嘩でも御座りやすか親父」インチ天蓋寺の騎樂師様が桑名へ開帳に行しやるので。今こゝを通らせるから。彌次「ハ、アなるはさ向へ見へるく」(ト此内段々人足繁くなり。講中とおぼしく真先に村の名を染たるのぼりをかき立。何れも大聲にて)「講中」なアアアアア(ト)北八「騎樂師様ア湯でたのじやねへ生だと思へる。講中」なアアアア(ト)彌次「のぼりを持って行くやつ。面ア見さつし知恵のねね面だせ。講中」お賽銭は是へ(ト)是は海中より芋畑へ出現んし給ふ所の天蓋寺騎樂師如來御信心の方は。お心持次第上さつしやりませう

九十七百膝

のサア(ト)お心持は能く御座り升かな。北八「今朝程は中がさで三膳程たべました。彌次「ソリヤ騎樂師が御座つた(ト)此内みづしに入たる。樂師如來大勢にてかつき通。跡より天蓋寺の和尙乗物にて來るところ。かじこにあつまりいる婆々唄共十念をねがいはけるに)若侍「お十念く(ト)云と乗物をかろす。若侍觀の戸を。引あげれば和尙は湯で蜷の如き赤ら顔にて。大あばた髭だらけのでつくり和尙さもじかつめらじく)なちあみ 皆々「南無阿彌 和尙「南無阿彌 皆々「南無阿彌 和尙「南無阿彌と段々となへ。十念の仕舞にさうしたはづみから鼻の穴がむづ(と)し)和尙「ハアくつしやみ(ト)云と皆々十念の跡ゆゑ是も口まねする事と心得 皆々「ハアくつしやみ(和尙小聲にて)「葉をくらへ 彌次「ハ、とんだ十念だ。アノ和尙は。くつ沙彌から長老だ。ハ、講中「なアアアアア(ト)さうめき立て行過る彌次郎北八は。かかしく跡見送りながら)

十念をもふしながらの口懸は。有たら口に風を引せし

斯よみ捨て打興し行程に。早くも追分に至る。此所の茶屋まんぢうの名物あり茶や女「お休みなさりませ。名物まんぢうの。ぬくどいのを上りませ。おぞう煮も御座りませ。北八「右側の娘が美しいの。彌次「鑓屋の小ぢよくめらも相きやうらしい(ト)茶屋に這入腰を掛る)女「お茶上りませ 彌次「まん中もやらかして見よ。女「今上ませう(ト)頼て盆に盛て來る此内金比羅参りと見へて布子の上に白き單の半天を引張たる男同く此茶屋に休み雜煮餅を喰掛る彌次郎具中を喰仕舞ひ)もつと遣ろふか。幾位でも這入やうだ。北八「チャお前へも雨風さうらん能かげんに

もなせへし金比羅もまた方々か江戸かな些八左様さ金比羅もさ江戸へ行く時本町の鳥飼のまんぢうを掛ひとして廿八喰たことが御座りましたが。又格別の物で彌次「鳥飼は。わつちらが町内だから。前日茶受は五拾宛は喰やす金比羅「夫はさういふさきじや。私しも餅すきで御らうじませ此どう羨をいさ無し五膳たふました彌次「わつちやア今このまんぢうを十四五も喰たろうが。また其位はいけるださ。ねつから喰たらぬ様だほへ金比羅「イヤ然し悪あまひ物は最う其様には上られませぬ。十四五もあがりやア關の山だ彌次「ナニまだ喰やす金比羅「どうして。あなた口ではさういふじやるが其様ははくへぬ物じやて彌次「ナニへぬとが有るものだ。しかじつひだから喰やせぬが誰ぞ喰せると。また。幾らでも這入やす金比羅「コレハ面白イモヤ無様乍ら何ぞ私じがが舞出ませう。もう夫丈上つて御らうじませぬか彌次「喰やせう共金比羅「若し上らぬとあなたのがたをれじやが能ふ御座り升か彌次「うりやしれたとさ。トかつに乗てまふぢうを取寄て喰掛りしが十斗喰て跡はもふおびに出る位なれどおの私金比羅鼻明せてやらんとむりに押込み喰て仕舞ふ金比羅「コレやたまらぬ。えらい。もう。私しはがなませぬ彌次「おめへもやらかしてみなせへ。こんなちいさな。物はいくらでも喰れる。金比羅「イヤううは参りませぬ。然し私しも餘り残念な。十を斗喰て見ませう彌次「デニ十斗位二十喰なせへ。其替り一斗も残さず喰なすたらば。まんぢうの代は勿論外に百文金比羅様へお初穂を上げせう。金比羅「うりや有難う。見ませうへト。

假頭廿取寄せ只もじ。と見て斗りたりけるが頼て喰掛るとはつり。十を斗喰て仕舞掛は。いやううな顔付にてやう。と残らず喰て仕舞ふ彌次「てが違ひ。コレヤ恐れる。金比羅「お約束の通假頭代は差引てお初穂の百文下さりませ。彌次「今上やせう。然しあんまり見ごたか。ら。もう二十喰なせへ。今度はお初穂の三百文あげやせう其替り喰ねへ。こつちへ三百取つてだごうだ。金比羅「面白イ。何も欲徳腹のさける迄遣て見ませう。彌次「サア。今度は現金だ。御前も貳百うけへ出して置きな。ト彌次「三百文をつぎ出し何でも今とられたお初穂の百文に利を附て取氣になり。よもやもう喰はれぬへと思ひ込で。假頭をまた。二十取り寄せ金比羅へすもめるやいなや。此度は何のくもなくたちまち二十喰て仕舞ひ早くかの三百文を若くして。金比羅「是は有難い假頭の代も宜しくお願申升。ハ、ハ、ハ、思ひ掛なぬ御さうさ。に預りました。ハ、イゆるや。是は。お御神酒箱を尊なにか。跡をも見ずして出て行たるは。彌次郎は。あきれ果て居る。北八「ハ、ハ、大方そんなことなるうと思つた彌次「いま。目。に合じやアがつた。初めの百がおしく成て上乘をした。さう腹ナ。ト此内下の方より響かきぶら。く。と来り。且那方はお総はいらしやいなせぬか。彌次「惣所じやアなへ。あらいめに合た假頭の喰つてをして。銀三百只取られた。響かき。ハ、ア今の金比羅めじやな。てめめはあないな。ぶ。うをこめてあるさ。アリヤ汰津の釜七を云ふら。手づま遣ひじやげな。今中の坂のむな。餅の喰くら。七十八とやら喰た。見せて。銀は人に掛はせ餅を。皆な袂へさら。込でうせ。

たと云こんだが且那も一盃はめられさうへせれたのハ、〔此咄の内伊勢参りの子供二人饅頭を三ツ四ツ、手に持て喰ながら此門口に來り〕ハ、且那様ぬけ参に御ほうしや北八「コレ手めへたち其ア其饅頭を誰に貰た伊勢参、ハイコリヤ此跡で金比羅参の人が袂から出してくれまして彌次「エ、うんならさういづめが。喰らつたと見せやアがつて。おいらをだまくらかしやアがつたか。いまくしい。おつがけて打のめさふか北八「能はなをいらも神参りだ。かんにんして遣りなせへ。皆なこつちが聞ぬけだからよ。ハ、ハ、ハ、彌次「夫だどつて。あんまり業が表へかへる北八「夕べの泊でをれをあらいに合した其報いだと思ひなせへ。ほんに能さうさうした

増補 訂正道中膝栗毛上編終

増補 訂正道中膝栗毛下編

整人に退分なれや饅頭のあんの外なる初穂とられて
彌次「エ、面白くもねへ。洒落やんな。もしくまんちうの代はいくらだね女「ハイ、残らず
二百三十三文で御座り升彌次「せうとがねへトふせうくは錢を拂ふと認かき且那まん
直しに安く石て下さりませ彌次「いや、認かき酒手で参りませう彌次「貴様酒を香か認か
き「ハイ酒はすきで一升酒を下さり升彌次「又酒の香くらしようと思つてか。もういやだくサ
ア北八「出掛よふト是より伊勢参宮道へ這入〇神風や伊勢と都の分れ道なる追分の建場より
左りの方の町をはなれて。野道をたどり行程に。向ふより來る農家の馬に横乗したる男肝張聲に
て聞見てもぬくさうふなヨか方を寝たりや、ナア手織布子一枚ねつこにっんぬけたア、ア、
、エ彌次「コウ見さつシア、向から乗て來る馬士をさうして見せよふかト脇差をぐつとぬき
出して差し。合羽の袖を前の方へ折て刀の柄に持添たるていに見掛て行と。馬士頓て馬よりちや
つと下て行彌次「ナントさうだく、又向より横乗の馬士、晩に泊りにヨ。いこそてやめたナア
なんせ行やらぬ裸でか方に逢りよかヘナア、彌次「こいつもあつてやろうエヘン馬士「シ
ツ、トにはかにかううたを下て行過る彌次「北八さうだ奇妙か北八「二本差を見ると乗打の
出來ねへこたア替しつて居らア彌次「夫だからおれを侍だと思ひかつて北八「馬鹿ア云せ跡
を見なせへ侍が二人り來るから彌次「エ、ほんにがトふりかへる拍子に此侍にばかり彌次「

ハイ是は伊勢なさいやし。神戶へは最ふぞれば御座りやすな。此侍衆は此邊の郷士と見へてソレ向ふの堤からすつと空へあがらせるもふ半道もあらずにな。彌次「ハイ有難御座りやす北八」堤から空へ上れたア。何のことだ。蟻が天じやう。しやアしめへし。ハイ、時に此川は何と云川だ。橋番「ハイ橋錢が貳文宛出ます。此川は宇都部川と云升。彌次「ソレ貳文宛。四文よ。拔参りならばふさをも宇都部川。渡しの錢も假橋にして。夫より高岡川を打渡り。早くも神戶の宿に至る。入口に寶珠山火地獄堂有り。安穩に火地獄の守らん。爰のあつさも冬の神戶も。斯く此宿端なる茶見せに寄て休居たるに馬士「モッお前方アおまに乘て下んせんか。彌次「いか様戻りなら乗べし。馬士「上野迄戻る。おまじやわい。荷を付けて貳百五十下んせ。北八「二方荒神で百五十還るべし。馬士「今日は棒を持てこんわいの。爰から上野迄三里の所じや。白子へ登里半替りやつて乘ていかんせ。彌次「二人乗れにやアいやだア。馬士「うしたらお二人り共おまの鞍へくし付けていかまいか。此細でしめりや氣遣ひはないがな。北八「とんだとを云。夫じやア煙草も吞れぬ。彌次「そんなく乗り。乗ふ百五十でやるか。馬士「まよかじ。やらかしましよ。ト馬のうらだん出来て二人りの荷を付け此所より先北八乗て出掛る。彌次「おらうら。先へ行ぞ。ソレ北八「右の方へかし。探だ(馬ヒインヒイン)鈴の音「しやんく。此内向ふりきたる男。紺緋のせんたくしたる引廻しを着せ。一貫手差子の古き風呂敷に包み肩に引掛け草履掛

にて來り此馬士を見附て。ヒヤア主やアぬし。上野の長太じやないか。今まがとこへ行た戻りじや。エイとこで行合た(馬方長太)「ア權平治様かいな。コリヤ扱わしや面目がないがな。權平「あうまい。ある筈がないわい。晦日くは戻す筈を。まんだ。びたせん一文もいこさんか。おふじさるのじや。ソレ聞はし。馬士「マアくこちへ來て下んせ(此馬士借金のとわりと見へて。かの男を日當りの能き所へ伴ない。かのれも土手の上にゆらくと腰打掛)馬士「うないに業表らかいて。くだんすな。マア爰へ腰掛けさんせ。イヤうこのねきには。犬の糞がある今日かいでると。じり居つたら。うらうらして。おこものコリヤく權平様へ茶など上んか。酒かふてこいと云所じやが。こしは大道中で夫もできぬくい。北八「コリヤをうする早くやらぬか。馬士「ハテせはしない。些またんせ。いんま大事のお客がある。情マア聞いて下んせ。去年の冬から内の暇めが病氣を煩らひおつて。かき共には。せちがはれる。雜役にさへ出やせん者を伺じやうと。とうしてくだんせ。四五日の内には。ひゆつとこちからもて参がな。權平「イヤしやうちならんわい。うないに云ふても能く展じやしまいがな。大事無く。最ふ三年越と云もの貸た錢じや利に利が喰て二十貫餘りと云ふもんじやもの。着いてすな。くうの替りものおまを。取いのたかい。ハテまごかの時は。のしがおまを渡すと証文に書じやないか。うしたら云ひ分ありやしよまいかな。サアくおまの上な旦那様いんま聞んす通りじや借錢の替りには。受け取つたおまじや。どうぞこしからかりさんせ氣の毒ながら。北八「ハアおいらも先刻にからじれつ度てならんだ。ひよんな馬に

六十八百藤

乗合せたは。こつちの不止合然じまた錢は遣らす。是迄乗たを徳にしてドレおりて行やじやうか
 (トかの權平に口を取らせて馬からおりると馬士かけよつて)モツ旦那前がかりては此馬を
 取れる。マア乗て居て下んせ。權平「イヤならんわい。馬士ハチをないにもするわいの。旦那をふ
 るしては氣の毒な。サアサア召て下んせ。又八「又乗のかしつかり頼むぞ(ト北八又馬に乗せ權平
 やつぎとなり)コリヤ〜長太どうしさるのじや旦那おりて下んせ。北八「エ、又おろすのか。イ
 ヤ貴様たちやアおれをい〜ちやうさい坊にする。下したりのせたり。足も腰も草臥はてた。權平「
 夫じやて。わしがあまじや。さふぞかじ。かりて下んせ。北八「エ、面どうだ(ト小じれがきてぐづ
 と飛おる)馬士長「はて儲下さんせすと能がな。コレ權平様こうして下さんせ。わしも途中じ
 や。よじこごがなぬ。せめて内へいぬまで待て下んせ。其替り。こゝで此布子を渡すに。權平「うし
 たらいでわけつけるか。馬士長「もう能はいサア旦那召ぬかい。北八「ナニ又乗かもふ掛忍して
 くれ。おらア是から歩行て行ふ。何なら少々は錢を出しても乗とアいやだ。馬士長「其云んせすと
 乗て下んせもう能がなサア〜(ト馬の口を取てすゝむるゆゑ北八又仕方なく馬に乗ば)權平「
 サア約束の布子脱まいか。馬士長「イヤうないには云たもの。是も内へいぬまで待て下んせ。權平「
 イヤおのれ。もう了簡ならんわい。サア〜旦那又おりて下んせ。北八「エ、此唐人めらア。又下
 りろとぬかじアがる。もういやだ。サア早くやらぬへか。さうしやアがるのだ。馬士長「旦那うら
 はやく。おろすとい〜に。權平「イヤおろすとあゝとは何でぬかす(ト真黒になり馬に取つきかけ

七十八百藤

る所を馬士つきのけて。馬の尻を思ふさまたゝき立ると。馬は一さんに掛出せバ北八上にて真青
 になり大聲揚げ「ヤアイ〜たすけてくれ。コリヤさうする〜。權平「馬をにがしてはならんチ
 、イ〜(トおつかけるごじやう大事に馬の鞍に取付ても馬はやみくもに走るゆゑ北八飛かり
 様として鞍の繩に足が引掛りまづ漣さまに落て腰の骨を打)ア、いたぬ。だれぞ来てくれ(アイ
 タ、〜(ト一人もがきてくるしむでいるに。馬方一さんにか付け来り)モン旦那
 かけがはなぬか(ドリヤ〜(ト手を取て引おこす内。權平は馬をとらゑんとかけぬける馬
 方是を見てうふはさせぬと。北八にかまはずかけ出して行)北八「チ、イヤちやアがれ。おれをば
 ひどいめに合じやアがつた(ト小言を云ひながらおきあがり。腹は立ども。詮方なく。おつかけん
 には足腰がいたみ。やう〜の事にて踏しめ〜うろ〜とたどり行きッ、)
 借錢をかふたる馬に乗合せ。ひんうりやさうとおとされにけり
 行程なく矢場瀬村と云に至る。彌次郎兵衛は神戸の宿端れより先へ來たるが。かの馬のいさくさ
 をば。露しらす余程先へなつたるを。ふしぎに思ひこ〜に待合はせたりけるが。夫を見をより彌
 次郎「北八其形はどうしたのだ。北八「イヤもう咄にもならぬ。非だめに合た(トさいせんより
 の一五二十を咄せば。彌次郎おかしく。さいはい此所は鎌倉の權五郎が古跡ありと聞て彌次郎兵
 衛どりあへず

權五郎ならぬと馬士のいつさんに。おつかけてゆく掛取の海

夫より玉垣を打過。白子の町に至り。福徳天王をふし拜みつ。子安観音の。わかれ道にて
 風を孕む沖の白帆は觀音の加護にやすく海渡るらん
 此宿を過て磯山と云るに着。此所に。吹矢の色を飾り付けたる。小見せの親父往來を見掛てサア
 〳〵かなぐさみにやてかんせ。外題は忠臣蔵十一段つゞき。ソレ吹んせ。ヤレふかんせお當なさ
 るとたまち替る。新板の上組工は是じや〳〵 北八ハ、ア何だ勘平あかる。魂膽夢のまくら。
 イヤこいつは。やらかして見よう(ト吹矢筒に吹矢入)フウ、引(カチリガツたり)彌次「何だあら
 い松茸が出たコリヤおかしい。ハ、ハ、ハ、與市兵衛子ゆゑの間の夜は。何が出だろう(フツ〳〵フ
 、引)(ガチリガツ)〳〵ヒヤア見越入道ハ、ハ、ハ、向ふのは何だ。北八彼方へ寄や(ト引の
 ける拍子に足元にて居る犬の足を踏む)(犬キヤアンキヤアン)彌次「此畜生め(ト吹矢の筒に
 てくらはし越掛る犬はワント云て咬つく)彌次「アイタ、ウぬ打ころすぞ(トおつかくはづみ
 に。おつざりところげたらばに落て有は煙草入)彌次「ころんでも損はいかぬ。こゝに煙草入が
 (トひろめに掛ると向側に居る子供が糸を引と煙草入はする〳〵〳〵)エ、いま〳〵しい一
 番はぐらかしやアがツた子供「あはうワハ、ハ、北八「こいつは能業晒した。サア行やせう(ト
 吹矢の錢を拂ひ出掛る向に又きせるが一本落て有ゆゑ北八「夫彌次さん又拾はねへか彌次「イ
 ヤもふ其手は喰ぬ。アレ跡からくる親父がひろぬ居るだらう。(ト行過てふり歸り見れば跡なく
 る親父。かの煙管を拾めて懷に押込さつ〳〵と行過る) 彌次「ハアだましてもなかつたらうな

北八「ハ、ハ、お前へどうぞに聞が悪いせ(ト打笑ひ腕。行程に。頓て上野の宿に至る爰に此道の
 人と見へ羽織ばつちにて小野郎を俱に連たる男跡より來たりて彌次郎兵衛にかけ付) 卒爾なが
 らあなた方アか江戸で御座り升か 彌次「アイ左様さかの男私しは白子の先からあなた方のお
 膝に付て参じたが道々の御狂詠を承りまして及ばず乍ら感心致ました面白いとで御座り升彌
 ナニサ皆出放題で御座りやす男「イヤ驚き入ました。先達てお江戸の尙左堂俊満先生など當地
 へおいで、御坐りました 彌次「ハア成程左様〳〵 男「あなたの御狂名は 彌次「わちヤア十返舎
 一丸と申しやア男「ハ、ハ、ハ、御高名受賜はり及びました。十返舎先生で御座り升か。私しは南爪
 の胡麻汁と申升。扱〳〵よい所でお目に掛りました。此度は御参宮で御座り升か 彌次「左様さ彼
 の膝栗毛と申著述の事について態々出掛ました 胡麻汁「いか様あれは御妙作でお坐り升。是へ
 お越なさる道すがらも。吉田岡崎名古屋遊御連中方。御出會で御坐りましたらふ 彌次「イヤ東海
 道は。宿々残らず立寄所が御座れ共参ると引留られまして。懸懸にあひまするが氣の毒で御坐る
 から。皆すぐ通りに致しました夫ゆゑ御らんの通り態々脱服を着く致して。やはり同者の旅行同
 様に心安く。何でも氣まかせに。風雅を第一と出掛ました 胡麻汁「夫はお樂みで御坐り升。私し
 宅は與津で御坐り升。がどうぞお供致したい。置おぼし召有がたい 胡麻汁「まことに御珍客近所
 の社中共へお引合せ申たい。何れ御一宿をお願ひ申ませう。ハ、ハ、ハ、ふじぎの御縁でよい所で
 御目に掛た。時にこゝが小川と申ところ饅頭の名物一ふく上りませんか 彌次「イヤ饅頭にはこ

二十九百藤

舎南館と申升ふしぎな御縁でとやつかいに預り升ごま汁「ナニサを」とねから。おかまひは申さ
んじやて。イヤ先生ちとかくつろぎなされまいか女「御膳がよ傍坐り升ごま汁「早う上んかい。
傍ゆるりと召上りませ」ト亭主は勝手へ立て行女膳を持って彌次郎へ「据行」「彌」まんざらでもねへ
の北「いと女だ然しこしじやアお前も先生かふだ。おとなしくせざアなるめ」ト此内又十二二
斗りの小ぢよく膳を持。北八にすへる。兩人箸を取りて喰掛り見るに。膳の向に平めなる皿の中
に大福餅の大きさの如き黒き物のせて出せり。平にはこんやくを盛。味噌は別に小皿に有り
次郎小聲にて「ナント北八。此皿にある丸い物は何だろう北八」されば何であるふか「ト箸にて
つゝき見るに至てかたくはさめ共うごがす。よく見れば石で有るゆゑ肝をつぶし」北八「こ
りヤ石だ」彌次「ナニ石なものか」ウ女中「女」夫は石でお坐り升北八「夫見なせへ女」こん
やくをお替なさりませ彌次「いか様もう少し」トひらを出して女の立て行を待かね「彌次」コ
ウ何を馬鹿くしい。どうして石が喰れるものか北八「イヤ夫でも喰れる仕法がありやアころ。
出したであらふ。先刻き當所の名物を上ませうと云つたア何でも此の石のことだ彌次「夫れだ
とつてついで。はなしにも聞かねへ北八「イヤ待なよ。江戸で團子の石を石く」と云から大方コ
リヤ團子であらふ彌次「ア成程うともあるよや本とうの石じやアあるまい」ト又た箸を
もつてつゝき見るに。やはり石也是れはふしぎを煙管のがん首にてたし見ればかこちうく
彌次「どうでも石だ」コリヤどうして喰物だと聞もどうはらだか。どうもねつから合點が

三十九百藤

かぬ(此の内亭主勝手より出て)是は何も御坐りません。宜しう召上りませ。イヤ石がさめは致し
ませんか。コリヤくぬくと石を替へ上申せト云れて二人共吃驚せしが如何にして此石の喰
様を知らぬと云はれんも。どうはらと彌次郎兵衛是を喰たる顔にて「イヤもうかまひなさるな
石もはや宜しう御坐る。惜々珍らしい物を食斷致しました。江戸表などで折ふし小砂利を唐
からし醬油で煎つけるか又は煮豆などの様に致してたべるとが御坐り升。夫に又右塔なども嫁
をいじる。しうと婆などに。喰せたが難だと申してたべ升るが。私も隠分好物で御坐り升。今度府
中で逗留致した時。馬蹄石を泥糺表にして。振るまはれましたが。ツイ私し四ツ五ツたべました
所にお聞なさい腹がもく成て起ふとした所が一向たくれず。仕方なしに兩方の手を洗しぱり
の様に致してかついで。貰つてやうくと手水に行やした。御當所の石ころはかくべつ風味も能
ふ御坐りやすから又たべ過たらば御やつかいに成るだろふと存じてお氣の毒で御坐りやすご
ま汁「ナニ其石を上りましたか彌次「たべました段かごま汁「ヤイ夫はめつろふかいな石を喰
ると云はけしからんお齒のお達者などで御坐り升。熱し焼ごはなさりませんかいな彌次「夫は
なせなごま汁「イヤあの石は焼石で御坐り升。すべてこんにやくといふ物は水氣の取れぬ物で
御坐り升から。あの焼石にて。おたしきなさると水氣がとれてかくべつ風味がよござり升。其
爲の焼石で御坐り升。あがるのでは御坐りませんわいな彌次「ハ、ア成程く聞へましたごま
汁「イヤどうしてござがつて御覽なされ。コレお鍋上石がぬくとなつたら持てこんにやく早うく

ト此内皿に石の焼たるを乗て女持出ひ替て行く彌次郎北八亭主が言葉の如くしてかのこんにやくを件んの石に打つけ見るにシウ引と云て水氣取れたる處を味噌を付てくらふ風味かくべつかろくしていはん方なければ大きにかんじて)彌次「まことに珍らしひ料理御仕法かんしん致しました。うしてかやまに同じ様な石が早速に能く揃ひました。ごま汁「イヤ夫は兼てたくわへ置升お目にかけて升せう(ト勝手にかけ入取物碗を入れる様な箱を持出て)御らん下されませ。こないに二十人前は所持致してかり升とかの)箱を見するふたりはかかしく其箱の横の方に何か書付てあるゆゑよんで見ればこんにやくのたき石二十人前と書付たり此内近所の狂歌よみおひく(來りて)御免下さりませ。ごま汁「やは小髪有元成様サア。ごなたも是へくハイク是は十返舎先生。始て。お目に掛り升た。私しは。富田茶賀丸を申升。次は反齒日屋呂。水鼻垂安。金玉の嘉雪。何れもお見知下さりませ。ごまじる「時に先生おやかまじう御坐りませうか(おむづしかるふといふをおやかまじうといふ國言葉なり(扇面短冊などお願ひ申たいが何成共お持合せのお歌をお認め下さりませ)ト扇子短冊をつき付られ彌次郎しかつべらしくとりあげて何の開放体やらかして吳んと色々考てもわがよみし歌には是ぞといふ歌もなく早速に思ひ付もなければ是まで聞覚へ居たりし人の歌を書て差出せばごまじる是をいたゞき見て)是は有難う御坐り升お歌は時鳥自由自在にきく里は。酒屋へ三里豆腐屋へ二里ハ、アなるほど。どうか聞た代な歌だ。さぬく(の箱をしらげ今一つ。ううをもつけやあけ六ツの鐘。イヤ是は千秋庵大人の歌

歌では御座りませんか彌次「ナニ私かよみ歌。然も江戸中大評判の歌。たれしらぬ者は御座らぬ。ごまじる「イヤさよじやあろうか。先年私しお江戸へ参じたとき。三陀羅大人荷葉亭大人なごにもお目に掛りまして。すなはちお短冊もいただけて歸りましたが御らんなされ其屏風に張て御坐り升(トいふゆゑ彌次郎ふりかへりて見れば成程屏風に三陀羅と書て右の歌あり北八おかしく氣の毒なれば)イヤ「私しの先生は。うゝつかしひが。くせで人の歌だの我歌だのと云しやべつは一向御座りやせぬ。コウ彌次さんイヤ先生是道道中筋でよみなごつた。お前の歌を書なされば罷に(ト氣を付られて彌次郎面目なけれど。押の強め男なれば。いけしやア)として跡の短冊へは道中筋の歌をかき此内北八も手持なければ張交せの屏風を見)ハ、ア總川茶阿の畫が有。モシあの畫の上にある聲は何でお坐り升ごまじる「イヤあれは詞で坐り升北八「こちらの布袋の畫の上には有は詩と見へ升が誰が致したので坐り升ごまじる「イヤあれは語で御坐り升。澤庵和尚の(ト云故北八心の内にこいつ。いまくしひやつた。さんか云へば。詩だと云時かご云ば。語だと云。何でも此度は一ツよけぬに云て胡麻つかせてやろふところ見廻し(北八「モシお掛物の畫の上に書て有は大方六で御坐りませうなごまじる「六か何か知ませんか。あれは質に取たので御坐り升(ト此内勝手お女立出て)ハイ罷願様から。お手紙が参じ升たごまじる「ドレレ何じや有な(ト此手紙をひらきて高々ごよみて見れば)手紙鳥渡申上候只今東都十返舎一丸先生。拙宅へ御着有之候。勿論名古屋連中並に吉田。大竹も書狀参り申候。早速貴公御書し教

賃候ゆる進付貴宅へ。同道参上。可致候間。御案内申入置候以上ごまじる。コリヤと云うじやいな。とんと合點のいかぬ。ノウ先生只今朋友共から斯様に申越ましたが。定めてこやつ尊公のお名前をかたつて参つたものと見へるさい進付是へ参るとあれば。ナントお逢なざられて。なぐさんでやろうじや御座りませぬか。彌次「係々。大變な事だ。いや早横着なやつもあれば。有るものだ。然し私には。會はずまい。ごまじる。なんせ。彌次「イヤどうか先刻から持病の痲氣がこりました。左様でなくバ其にせ者。致し方が御座る者を。係々。こまつた物だ。ト思ひがけ無く。此仕儀に及びさすかの彌次郎しよげ返りて居る亭主ごまじるを始め。皆々先刻より彌次郎が振舞ひ合點ゆかすと思ひし所扱はと心付こいつ。バけの皮あらはしてくれんとたがひに袖を引あふて。茶ケ丸何と先生コリヤ面白とが出けました御不快で御座りませうが是非共其似せ者にはおあひなざるが能ふ御座りませう。彌次「ハテ扱こまつたをまつしやる。垂れ安「イヤ時に先生のお宅は江戸表では何所で御座り升な。彌次「されは何所か御座つた。マ、夫々。鳥羽か伏見か淀竹田かゆき山崎の渡しを越て與市兵衛とを尋あれがをさやアがれハ、ごまじる。イヤ。あなたの方のお笠に江戸神田八丁堀彌次郎兵衛と書付て有をつたが其。彌次郎兵衛と云はたれさんのことじやいな。彌次「ハア聞た様な名だか誰であつた。マ、聞た筈だ。私が實名を彌次郎兵衛と云ふことまじる。ハ、ア常にや参らぬ鳥々波参らぬ彌次郎兵衛で御座ると云はあなたのこと有たか。彌次「左様。茶ケ丸「時に彌次郎兵衛先生其似せ者の一九をいんま連れてこまじ

かい。彌次「イヤわしはもう出立致ううごまじ。何せ今何時じやと思ふて。最ふ四ツじやげな彌次「さればのことわしが痲氣はかはつたこと。此様にかしこまつて。ヨリおると段々。悪くなる。いつも夜分外を歩行て冷さへすりや直に能くなるから。ごまじ。ハア、夫で今立ふと云ふのか。ろうさんせい。噂ごなさんが。居ようと思ふても爰にやもう置やせんのか。早う出ていかんせ。ようも人の名をかたつて。だまさんしたの。彌次「ナニかたつたとは。ごまじ。ハテかたつたわいな。ほんまの十返舎先生は名古屋の川並連中から狀が着てきてありや。ちがひはなぬがなれば安「初めからごなさんの不都合たら。こなるなとであうと思ふた。こちからほからかし出されぬ内に。ちやつくと出ていかんせ。彌次「何だはかしたすコリヤ面白い。北八「コレサ彌次さん。りさんでもはじまらねへ全体を前への思ひ付きが悪めサア爰を出て何所ぞ木賃にでも泊りやせう。コリヤア。何方たも真平御免なざりやじ。ト北八が段々のわびをに亭主は取は立どもをかじさも半分。皆々此二人がほうくの体にてうこくに支度し出行なりを見送り家内の者共手を打たしきと笑ふ彌次郎はしじうふくれ顔をじて。りきみかへり出行くをかしさ北八跡にじたがひ。

いとはまじ通り。一遍旅の取。清捨てゆく。扇子短冊。斯よみて跡は笑ひを借ふじ出かけたれど。最早亥の刻過たると見へ。家並に戸を閉てひうまりかへり。何れを旅籠屋とも。見へ分たず泊る。きき方も無してうか。と。たどり行程にあはや

軒下の犬共がをき立て吠掛れば彌次郎兵衛さよろ々してエ、此畜生めらア悪くぶさきやアがる
 (ト石ころを拾ひて打ちつくれば猶々犬はをこり立て取まく)北八「かまぬなさんな犬迄が馬鹿に
 しゃアがる。チャ彌次さんをつな手付をして前向をする彌次「イヤ犬に取巻れた時は宙へ寅
 と云ふ文字を書て見せるを犬が退げると云ふだから先刻から書て居るがねつから退げやアがら
 ぬ此氣らア皆な無筆の犬だらうな(トシツシ)トさうやらさうやら追散かして行共無しに思
 はず此町を出離て)彌次「コリヤつまらねへ者だ。まよ北八夜遊北行こうじやアねへかきつい
 ことアねい。やらかせく北八「お前さんだを云まだ九ツにやア成めへ又何所ぞへ泊りてへ
 者だ彌次「夫だどつて今頃におきて居る内はなし。イヤ有ぞく遙向ふに火が見へる。アノ火
 を目當に行て宿を頼まふ北八「サ、サ。夫が能く。然し提灯の火じやねいか彌次「とんだを
 云ふ。戸の隙間よりもれる火だ物を北八「ほんに家の内で焚火た何でも是非あうことを頼んで泊
 やしやう(ト足近にまかせて急ぎ行く頓てそこに付たるにかの目當の火はをのれと段々先へあ
 ゆみ出して行く休にをさろき)彌次「ヤアくくくあの家がどうか北行て行様だ北八「ほん
 になア。こいつはをかしい彌次「イヤおかしくない氣味が悪い何所の國にか家が北行と云ふは
 只事じやねへ北八「ナニサ是も赤坂の泊りぐらいで皆な狐めがする事だろふよはみを見せる
 直附け上りがする。かもう事はねへ。さつくと歩行みなせへ(とわざとりきみかへつて星早に
 件の火にをひつきくらまされにすかし見ればいさりの車なり。小屋の内にて火を焚。茶をわか

しながらの車を押して行の也。二人はをかしくこゝをすぎ行に。折節月は出たれども草木もねむら
 異夜中のうす淋しさ。跡にも先にも只二人。上はべはがまんにつよ張ても心は至てのをくびやう
 者てわごわなごり行跡より一人来る者あり彌次振返り見れば小山の如き大男脇差を腰に横たへ
 来るは只者ならず我々を目掛来るならんと北八にさしやきて)彌次「コウ跡からをかしな奴が
 付て来るちさうきてやらかう(ト足ばやに走れば跡の男も又ははる北八「待なと香口がは
 づれらうだ(ト小便をすれ其男も立留り待て居るゆゑ彌次郎聲を掛け)モシお前は今頃何所へ
 出なごる(トこはく)云バ彼の男存の外やさしき物云ひにて)ハ、ハ、私しは松坂へ。もどり
 をる者じやがな。夜さら一人りこはふてくモウさうしよいなと思ひかつたさうこへ。お前方が
 通らんとするゆゑ。コリヤ能連じやと跡から二人を心便りに参じたわいな北八「イヤをめへ。
 なりには似合ぬよはい音を出しなごる。うしてうんな長いやつを差て居ながら彼の男「ハ、ア
 是かいな。コリヤ跡で拾ふて来た。竹切じやわいな(ト腰からぬいて杖につきて行く)彌次「ハ、
 く、脇差ではねへの。わつちらア又お前へがこわくつてく先刻にからコリヤひよんな奴に
 見てまれたと思つたが。マアお前へおくびやう者ではつちらも落ついた北八「もうく是から
 三人と云もんだから大丈夫だ男「イヤく此先をこつとねらい事が有がな彌次「何がねらい男
 「聞んせ。わしや今日江戸橋迄いて。歸りにきつう遊なつてな。ぬんまの先此松原にきまつたど
 が。何じややら向ふに大きな白い物が立ていてつて。夫が何方へいたり。こつちへ来たりのぶうら

りくもうくはしやてはふて。コリヤ死ぬかと思つたわいな。うじやものどうして向ふ。へいかれる者でコリアならんわいと路原けして。さうぞよい道がほしいと思ひおつ所へ前方に行合たのじわいな北八「エ、其白い大衆な者が居たと云は何所らに男イヤヒッきに此先じやわいな北八「エ、何が出る者だわいらが先へ行ふ。おれに附て來な」ト打連て此松原を一斗りも行きたる時彼男アレく向ふに「ア、コリヤ」たまらぬく「トがだく慄へる二人もあやしくはるか向ふを月明りに透し見れば何共分らぬ白き物をよう一丈斗りも高く街道一ぱいに廣がり立て居る様子之は何だろうと先へもすまず立留り見れば又きゆるようにはつたり無くなるかと思れば又そつくりと立大さく成たり小さく成たり其形ちわからず彌次「マア何だろう北八」襦がねへから亡魂に逢へぬへ男「ア、アレじや物どうして先へ行れまじやうわいな彌次」性体がわからにやア。猶氣みが悪ゆコリヤ行れぬ跡へ戻ふ男「わしも前方を便りに又參じたがどうもこはふて行れんわい跡へ戻つて又迎の人が出来をつたら又愛迄こまいな二三度もうなかに。いたり戻たりしをつたら丁度夜があけふわいな彌次「何でも白装束だから何ぞの亡魂に逢へはねへは北八」アレく青い火が見へる男「エ、どうかこちらへきかふるようじや彌次」コリアどうしよう迎も先へは行れぬく「ト三人乍ら色青さめてがたくふるふ折から向ふより人の來るとみへ唄戀の重荷をナ。つんだら。お馬にへいぐ駄あろやらしれぬくひナアンアエト唄ひながら來るは助郷の人足四五人彌次「モシ」か前方何所から來なつた人足「ハ、

わしらノ此近在じやが役に當り居て津迄行かると云わいな彌次「コリア能がこへは。さうしてきなさつた人足」ハテこな人は其役で津へ行のじやと云のに彌次「ただしはお前方も幽霊じやアねいかさうも人間なら愛迄生てこよふ筈がない人足」何云んすやらねからわからんわい北八「イヤ向に化者が居のにさうしてをぬへ其前を辿つて來なつたと云事さ人足」コリアこなさん達は三渡りの藤九郎狐が。いごいたのじやなハ、くハ、北八「ナニサ向を見せへ人足」むてに何か居ぞい北八「ア、白い物がアレくアレ人足」白い物とはあれか、ありや道中。かまの靴や草鞋がもゑてゐるが其煙が月にうつて白なつて見へるのじやわいな彌次「ハ、アアううかハ、ハ、ハ、コリア有難座力やすト人足に別れて三人共はつとため息をつき打笑ひつゝ頓て其所にたどり付見るに成程草鞋靴などを積かさねて火を付もしたるにて其煙白く立ち登り見へたるより此所を過て松坂に至りまた夜更なれば道連の彼の男を頼み賤る斗りのきなればあたりまへのはたごを出すもつひへ成と町入口に木賃宿を世話して貰ひうこに泊りて一夜をこつは明かしける」折て。月落鳥啼て時の鐘明六ッを告渡るに彌次郎北八。早くもあき出此所を立出るとて

旅人も輪に成て舞ふ日を旅人の踊り出たる松坂の宿

右の方小山の薬師を打過ぎ楠田と云に至ると、にわ勘か紋と云る二軒の茶屋あり餅の名物なり

旅人はいづれに心づくるやとお教かかぬが賣れる焼餅